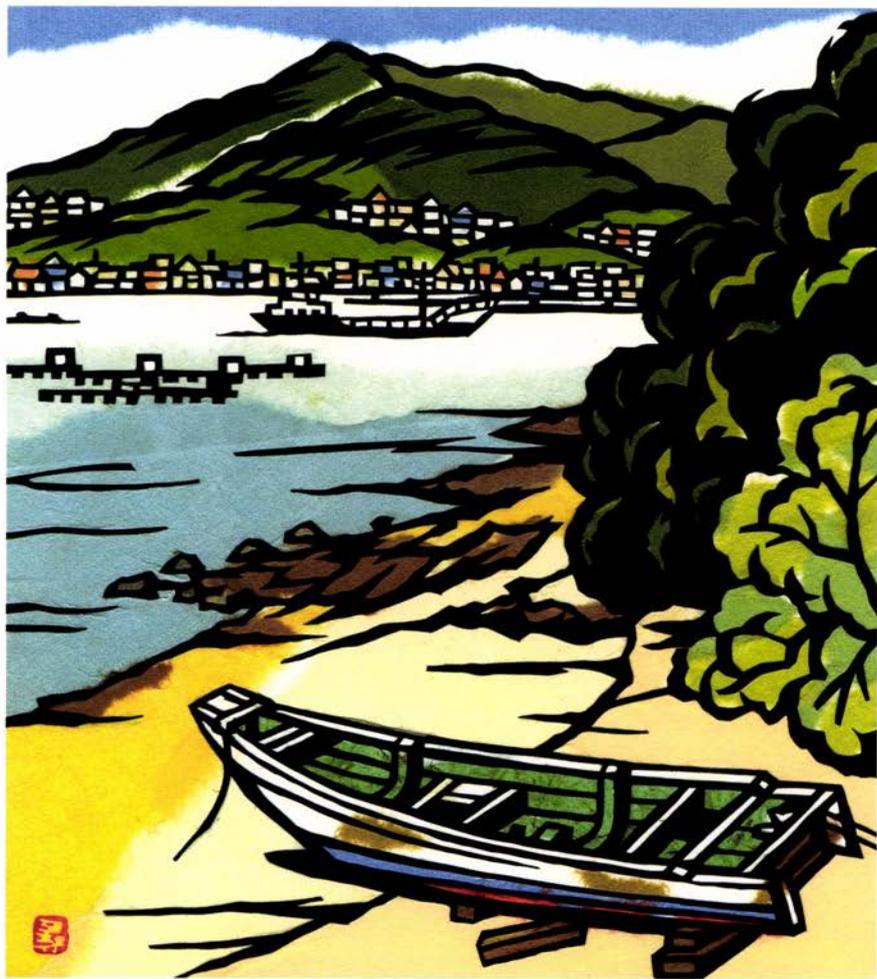


川柳塔



平成二十八年七月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇七〇号

日川協加盟

No.1070

七月号

— 路郎賞・川柳塔賞の応募は

八月号の刷り込み用紙で —

- ① 川柳塔欄・水煙抄欄に6か月以上、出句した人に応募資格を認める。
- ② 平成27年9月号から平成28年8月号までの入選句（自分の句を出句する）
- ③ 8月号刷り込み用紙に5句を楷書で書き8月10日必着のこと。

昨年九月から今年八月の間に
誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を選択して応募して下さい。

ただし「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、間違いないようお願いいたします。

選者交代のお知らせ

九月号（七月投句締め切り分）から来年八月号までの選者を次の通り交代します。

水煙抄 西出楓楽
檸檬抄 北野哲男
安土理恵（共選）

川柳塔社

「檸檬抄」課題

北野 哲男・安土 理恵 共選

発表	月	課題	締め切り日
28年	9月	前触れ	7月15日
	10月	疑う	8月15日
	11月	塩	9月15日
	12月	無心	10月15日
29年	1月	価値	11月15日
	2月	チクチク	12月15日
	3月	手頃	1月15日
	4月	青	2月15日
	5月	適当	3月15日
	6月	沖	4月15日
	7月	あっさり	5月15日
	8月	タオル	6月15日

ピンバッジ

小島 蘭 幸

昨年のバードウィーク、5月15日の朝刊に「飛び交うペア愛の巣づくり」「ブッポウソウ作木の宝」の見出しで、復刻バッジで保護活動という記事が掲載されていました。私は緑の中を優雅に羽ばたくブッポウソウのピンバッジに思わず見とれていました。いつか機会があれば是非買いたいと思っていました。

今年の4月5日～6日、かんぼの郷庄原で、全国郵政川柳人連盟第51回中国ブロック川柳大会が開催されました。三次ワイナリーで昼食を一緒にして散会となりましたので、そこから私は一人で、ピンバッジを販売している三次市作木町の川の駅へ向かいました。20分位車を走らせたでしょうか、川の駅に着くとビックリ!! 定休日だったのです。隣の郵便局で聞くと、カヌー公園の売店で販売してるとのことでした。復刻バッジではなかったのですが、美しいブッポウソウのピンバッジが一つだけありました。

復刻バッジは後日、川の駅へ電話をして送付していただきました。

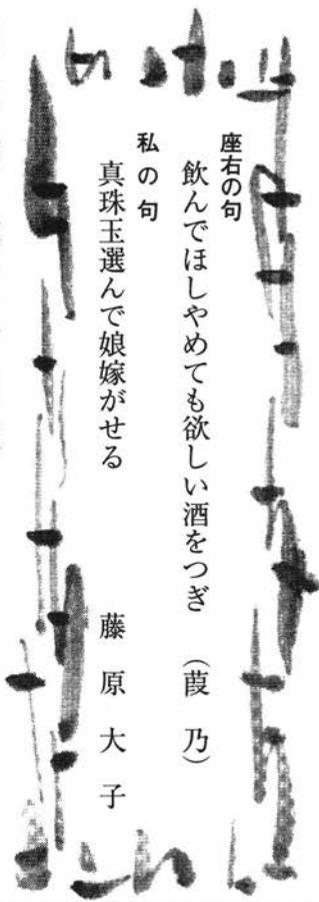
ピンバッジ仏法僧よ鳴きなさい 蘭幸

4月28日、生放送NHKひるまえ川柳に、川柳塔とブッポウソウのバッジをして出演しました。お題「声」には、鳥の鳴き声を詠んだ作品が二句入選していました。

ほととぎす鳴く声聞きに大山へ 成田雨奇
鶯もわたしも春の声になる 木下草風

最近テレビで、スーツにバッジをしている人を多く見かけるようになりました。ピンバッジも又、静かに深く浸透しているのです。

私がスーツに初めてピンバッジをしたのは、還暦の記念に県立美術館で買ったゴーギャンの絵の中の「赤い犬」でした。赤で凄く目立つバッジでしたので、「蘭幸さん胸の赤いバッジは何ですか」とよく声を掛けていただきました。声をかけていただくきっかけにもなるピンバッジ、思い出を鮮やかに甦らせてくれるピンバッジ、あなたも蒐集してはいかがですか、私は先日、可愛い「猫」のバッジを20種類、大人買いました。



座右の句

飲んでほしやめても欲しい酒をつぎ (葎乃)

私の句

真珠玉選んで娘嫁がせる

藤原 大子

川柳塔 七月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「淡路島福良」

■巻頭言 ピンバッジ……………	小島 蘭 幸 ……(1)
木本朱夏さんとお逢いしました……………	清 博 美 ……(2)
川柳塔(同人吟)……………	小島蘭幸選 ……(4)
自選集……………	(44)
温故知新……………	(47)
川柳塔の川柳讃歌 ⑬……………	木津川 計 ……(48)
新川柳鑑賞 ⑤③……………	麻生路 郎 ……(49)
水煙抄……………	川上大輪選 ……(50)
橘高薫風句抄……………	(70)
英語 de Senryu ⑤⑤……………	吉村侑久代 ……(71)
誹風柳多留一二篇研究 37……………	(72)
愛染帖……………	新家完司選 ……(74)
檸檬抄 「おそらく」……………	三浦強一・長浜美籠共選 ……(78)

木本朱夏さんと

お逢いしました

清 博 美

昨年の暮れ、京都へ行ったついでに和歌山まで足をのばした。特別な理由があったわけではない。ただ無性に行ってみたくなったのである。

和歌山市は母親の故郷であり、私自身も小学校に入学する前の一年半を過ごした所でもある。

川柳塔社には、「川柳雑誌」の時代から長らくお世話になっているが、昨今の「川柳塔」の編集に携わっておられる木本朱夏さんが和歌山市にお住まいなのでお呼び出しして食事を共にしていただいた。現代川柳の話・江戸川柳の話など、時間の過ぎるのを忘れて語り合い、楽しいひと時を過ごさせていただいた。

と、その時、一人の女性を紹介されたのである。川柳の作家であり・詩人であり・研究者であり・大学院生だという。朱夏

■エッセイ 鮎のささやき	中居善信	(81)
一路集 (「追 う」)	坂本蜂朗選	(82)
初歩教室「夢 中」	岸本孝子選	(83)
川柳塔鑑賞	山口光久	(84)
水煙抄鑑賞	居谷真理子	(86)
せんりゆう飛行船 ⑥7	松本 昌	(88)
麻生路郎覚書	新家完司	(89)
インスピレーション・ナビ 印象吟	古谷恭一	(90)
六月本社句会	大西泰世	(94)
句会燦燦	岩崎眞里子	(96)
各地柳壇(佳句地十選/両川無限・榎本宏子)		(101)
七月各地句会案内		(114)
柳界展望		(116)
■編集後記(ひとこと/紫しめの)	朱夏・まつお	(150)

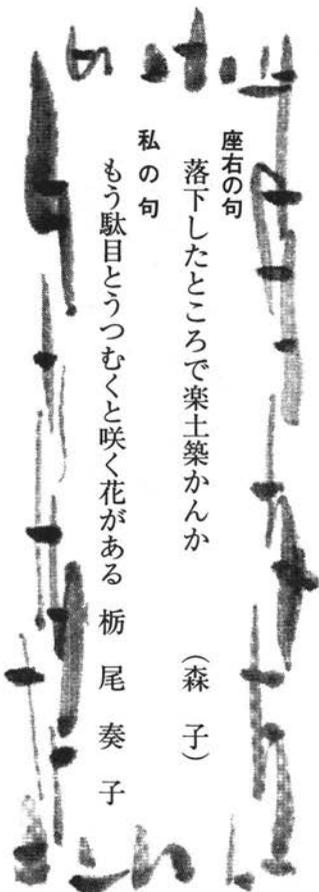
座右の句

落下したところで楽土築かんか

(森子)

私の句

もう駄目とうつむくと咲く花がある 栃尾奏子



さんの話からは極めて魅力的な女性が想像された。

さて、帰宅してから数日後、紹介されたその女性から論文を同封した手紙が送られてきた。そこで当方からも数冊の著書を贈呈した。

すると間もなく、二度目の手紙が送られて来た。私が岡田甫先生に師事していたことを知った内容だった。岡田甫先生旧蔵の本、一叩人著「反戦川柳人 鶴彬の記録」全三巻が、巡り巡ってその女性の手に渡っていたのである。その第一巻の遊び紙左端に「一九七三・九・一 御高覧を謝し申し上げます。岡田甫様」との記載がある由。即ち、一叩人が自著を岡田甫先生に献本したものだ。世間は意外に狭いのである。

手紙を拝見するかぎり、極めて聡明な女性と拝察。紹介して下さった朱夏さんにもお礼を言いたいし、結ばれた折角の御縁、大事にしたいと思っている。ちょっと離れた場所に住んでいるので、成り行きに任せてはなかなかお目に掛かれそうにない。何か具体的な行動を起こさなければならぬか、と考えている。



小島蘭幸選

沖繩県 森山文切

一斉に開く告別式の傘

真実は総じて鼻の下あたり

ダブルベッドで妻には届かない寢息

パーカーに沁みたにおいが消えません

真つ暗な部屋でお弁当を食べる

不倫するつもりのお会釈ばかりだわ

弘前市 高瀬霜石

美しい横顔 読書する少女

大切そうにバッグから出す文庫本

読書家が苦手な読書感想文

通帳と生命線を見比べる

無抵抗主義です小骨ありません

どこまでも緑ぐるぐるるり過疎

檀原市 居谷真理子

信じてはいけない春の指切りは

君を撃つ輪ゴムいっぱい持っている

がらんどうを残し大きな人だった

父という名の懐かしいカビくささ

大空に抱きしめられている独り

少年よ五月の空を打ち鳴らせ

和歌山市 木本朱夏

入院へお便りセット用意して

せめてパジャマは少女に還る花模様

あの時の樹海へまでも沈むのか

昼食の鰯が臭う雨の部屋

晩年の椅子がやさしくしてくれる

ふり返る涙の谷が光っている

河内長野市 山岡富美子

震度七それでも人は立ち上がる

有明の海に遥かな日の影絵

辞書を繰るたびに樹海が深くなる

珈琲の苦さよ絆という重石

くまモンにせめて寄り添う義援金

印籠になるかマイナンバーカード

鳥取市 森山盛桜

返り点ばかりで前に進めない
言ったこと無いが本音はサユリスト
幸せを零す両手の不器用さ

ちよつと腰引いて毒口吐いている
何にでも馴染む輪ゴムは偉大なり

メロディーは元氣な移動販売車

告白は女の方が大胆だ
大阪市 栃尾奏子

夏だから許されることだつてある
一枚を羽織り虜にしてしまふ

いま君はどの孔雀より美しい
夏という恋に溺れたキリギリス

したたかに女は靴を履き替える
札幌市 三浦強一

自分史のB面にある袋とじ
現状維持がベストと医者が言うた

賞味期の切れた風味もいゝものだ
押せ押せで来た人生も黄昏れる

十八が握る一票夢がある
反戦を詠むエンピツを尖らせる

堺市 栗原道夫
天守閣からなつかしいもの捜す

風を恋うことに疲れた鯉のぼり
マサイ族からのまさかの招待状

CMの間に砂を吐く浅蜷

風神も雷神もややいとけなし
サンドイッチにされて幸せそうな僕

夫逝くおはようと言う人がない
京都市 高島啓子

ひとりぶんのレシビが少しづつ増える
牛乳を豆乳に変え余命かな

蕎麦屋にはひとりのための席がある
たこやきをくるり自問を繰り返す

やさしい人だ電話をしてくれる

笠岡市 藤井智史
君からの愛をこっそりつまみ食い
寄り添って枯れて散つても君は君

戦争が絶えぬわたしの台所
納豆の粘りも君に嫌われる

迷宮の恋のゴールで待つ案山子
好きでしたハズレの鍵を温める

桜井市 安土理恵
限界になったら家を出るだけさ
言い訳のろれつ怪しくなつてくる

しょうがない男と女というものは
続編へしつかり四股を踏んでおく

わたしの地団駄無視してどこへ行くのです
母の日へ娘はデンワ嫁はバラ

松江市 藤井寿代

美しい切手を貼って家族葬
輪郭を消して飛ぶ練習してる
あっけなく潮満ち女偏はずす
かきかっこ消したらやさしくなれそう
ひとり飯金魚の群れが監視する
つかの間のアバンチュールが効いてきた

篠山市 酒井真由

水のある風景鳥獣禁漁区
亡き父に捧げん百万本の薔薇
欲望が渦まく六本木ヒルズ
予約席噂の中にいる人と
骨のある男と逢うてきた余韻
イヤリング外すひとりの夜が更ける

米子市 吉田陽子

孤独なら好き孤立には耐えがたい
まだ着地ならぬと神のお告げあり
とてもきれいな指は持ち合わせていない
生きなさい鯛の頭食べなさい
頼らない可愛くないは母譲り
春は密かに診察一つ予約する

岡山市 田中恵

節穴を貧乏神に覗かれる
田舎には噂の渡る橋がある
絵の皿みどりがあれば足る五月

裏声でポチが知らせる救急車
花野まで肩の力を抜きに行く
イメチェンに挑戦してる今内緒

青森県 松山芳生

春一番雪の重さも溶けて咲く
美しく老いたし胸奥の夕陽よ
一本のノミが仕上げる人間味
お静かにプラトニックの糸蜻蛉
香典と書く墨はすぐ乾かない
雪溶けの川へあかりをおく夕陽

鳥取市 岸本宏章

一億人総活躍へ寝ておれぬ
聞かぬふりしながら聞いている他人
貧乏性少し乱れた部屋が好き
大声で大事なことは話さない
主義主張曲げると僕の影がない
絶滅の危惧種になるか鯉のぼり

和歌山市 福本英子

年金の範囲贅沢赦される
過労死の夫を今でも赦さない
悔ったガードレールに救われる
車間距離きっちり守るおじいさん
頭より大きな口でツバメの子
故障してから捜す説明書

竹原市 石原淑子

あそぼうよインコが手から離れない
和やかな茶の間で怖いニュース観る
セキレイの庭の巣箱がおめでたい
朝ドラに泪家族のありがたさ
落ちつかぬ天災どこで起きるやら
三代を円く包むハーモニー

河内長野市 村上直樹

爆買いの群れてナニワが活気付く
親の目にはまだまだだだけど選挙権
凡ミスで妻にヘソクリ召し捕られ
ときめきを胸に卒寿もひとまたぎ
あの世へは不意に召しませエンマ様
ポケットマネーはたきせめての義援金

吹田市 太田昭

絵文字ばかり多くて読めぬ子のメール
喫茶店の窓際にある俺の首
能面の奥にしなびた顔がある
老人が好きで猫背が治らない
俺のシナリオ側にあなたがいつも居る
余白の隅に間借りをさせてくれますか

大阪市 榎本日の出

公園で右往左往をする老化
セーターが縮まないのに背が縮む
太陽を丸かじりする里の味

素晴らしい朝だ胸までピンク色
晩学のわたしにあった燃えるもの
ストレスを全部食べたら夜が明けた

米子市 中原章子

他人のため泣ける幸せ持ち合わず
待たずより待つての方が性に合う
あれこれと許せる窓になってきた
政治家が尊敬されぬ世の中に
妹とサーカスを見て童心に
三世代ピント合わせる舵を切る

吹田市 山本希久子

波はかぶらぬ位置潮騒を聞いている
もったいなくも敏感肌が陽を嫌う
等身大の罪科猫にも私にも
私のスマホに守秘義務ありません
昭和からまだ聞こえてる海行かば
手ぶらで行くあの世へ捨てられぬ荷物

奈良県 渡辺富子

スニーカーピンクに替えて風を切る
ずらりスマホ読書の少女ひとりだけ
優先席スマホに夢中長い足
幸せの尺度が違う三姉妹
どっと来て淋しさ置いて孫帰る
人ひとり許すとふいに晴れる空

東かがわ市 川崎 ひかり

いざの時阿吽の呼吸になる夫婦
サーブ権妻が握っている家系

いつからか夫が反論しなくなる

夫が逝く倅せでした五十年

夫ひとり逝っても世間変わらない

松山市 古手川 光

自然とは無情だ二度も震度七

導火線が短い包容力がない

生き下手で重い荷物を背負い込む

ジャンボ当たれ一度爆買いさせてくれ

まさかと思うその日は明日かも知れん

松山市 宮尾 みのり

お手入れをサボると歳が出てしまう

やっかまれそうで口には出来ぬ愚痴

逝った子が時どき傍に居るようで

立ち直るきっかけ孫の笑い声

事務的に事が終わった茶封筒

大洲市 中居 善信

トランペットよ寂しい曲を吹くでない

ひよっとしてぼっくり逝くか持病もつ

アンコウは見ているだけで愉快なり

安全神話またぞろ作りあげている

テロ地震日本に不安つきまとう

西子市 黒田 茂代

木漏れ日を抜けてするりと春がゆく

初夏の街並みが明るいハナミズキ

初咲きのばらの香に生気を貰う

初夏到来単衣の塩沢に決める

季の巡る度忘れもの増えてくる

高知県 小澤 幸泉

君とボク水と油で仲が良い

鈍行で歩む夫が頼もしい

キリストのいのちに生きるとおい道

妻黙る子供黙る長い夜

記念誌の隅に居座る一ページ

高知県 小川 てるみ

農耕民族草食系の腸を持つ

愛という長い鎖に繋がれる

立板に水うらやましいと思わない

内情を耳うちされた日のシヨック

告げ口をしたのは春の風だろう

唐津市 坂本 蜂朗

補修した心臓でまた恋をする

女医さんが躍るハートの音を聴く

直感を信じ金婚通過する

知る程に自慢の山が崩れ出す

晩年の日日に素敵な友がいる

唐津市 山口 高明

雨の夜は呪詛の声する水子塚
学者より政治家むきのお人柄
法則の通り墜落した機体

四五回で利目うすれるおどし銃
パニックは送電線がきれただけ

熊本市 杉野 羅天

幼子も老人も地震千回

消えた学者言い訳をする気象庁

情報0予震大きくなりました

高級車のいない避難所の車

梅一つ心頂く震災後

札幌市 小沢 淳

高級マグロ津軽海峡放し飼

害鳥の過去が朱鷺にはあったのだ

写真撮り録音をとる周到さ

稜線を分けて雪国からっ風

鍋の底ピカピカ母は大丈夫

黒石市 相馬 一花

爆買いを乗せ新幹線は北へ行く

花粉禍に黄砂も迫る風が吹く

オアシスで象と小鳥がひと休み

燃えさかる煩惱を切る裁ち鋏

ロボットもドローンも恐い武器になる

弘前市 浅田 隆樹

雪とけて雉子と挨拶した畑
豆植えて三年土も角が取れ
思い出し笑いはきつと孫のこと
無心だが何かを思う畑仕事
ブラックを微糖に変えて苗植える

弘前市 稲見 則彦

葛籠なら大きい方に手を伸ばす

リユースをされて嬉しい古背広

男子用だって平気なお年頃

葉に混じりとなんボクも刻まれる

送別会渋い顔には近寄れぬ

弘前市 岡本 花匠

雨降って花粉の量に驚いた

いい笑顔見せてひ孫のご挨拶

四つんばいこれから立つか這いはいか

ひ孫見て成長振りに拍手する

コーヒーの香りと味に活費い

弘前市 今 愁女

五月晴りんごの花が馥郁と

朝々に金の成る木に水をやり

イケメンも鼻水垂らす花粉症

市松模様縄文土器にあったとは

岡本太郎も驚愕古代芸術に

弘前市 須郷井蛙

チヨコ配り今年も当りありません

北方領土ロシアも気にはかけている

孫が来る腰の具合を確かめる

北鮮の脅威シエルター欲しくなる

新聞をしっかりと読めよ十八歳

弘前市 高橋洋子

やがて来る老いと重ねる花筏

年とつて想定外が目じろ押し

モノクロの夢でひよっこり母に会う

お喋りが寡黙となった休肝日

風通しいい嫁がいて平和です

弘前市 富士慕情

花まつり花が散つても人は来る

分水嶺に降る雨の物語

散骨もやがては海の彩になる

雨の日のガラス悲しい涙痕

過去は過去歩けば光見えてくる

さいたま市 星野育子

活断層の上で生活してる

レンゲ草見たくて電車で二時間

足し算引き算して答は出ない

長時間勤務でお疲れ猫カフェ

今は故人ばかりの小津映画観る

東京都 川本真理子

雑草の可能性考えてみる

軽く謝りながら抜く草の芽を

目の前と心を電車通過する

踏切が開くと時代変わったた

風を受け今日のわたしは浮き上がる

東京都 まえで とよこ

ふるびても夏には夏の好きな服

ゆきかえりシャープがなければ阪和線

手になじむシャープペンシル何おもう

ゴールデンウィーク首相のわらじ休みなし

ヒロシマ発オバマさんのメッセージ

横浜市 菊地政勝

無い袖を振つても恩義果たしたい

辞世の句用意するほど粹じやない

呑む暇はあるのに作句ままならぬ

発想を変えろと道が見えてくる

少子化をカバーできない高齢化

富山市 島 ひかる

出前教室子供達から来る手紙

花の名を覚えて登る山がある

十指では足りぬ名前をまた数え

黒ユリへ恋をしている登山靴

子が巣立ち愛犬のこと聞かされる

可見市 板山 まみ子

転動が急に決まった家の中
田植機に勢いづいた鯉のぼり
大災害次は我が家と怠らず
雑草のようにはいかぬバラとキク
ガソリンの安い時だけ遠出をし

愛知県 早川 遯 行

八十のこれが最後のクラス会
オリンピックまでの命を誓い合い
高速を乗り継いできた傘寿会
八十になつても人を好きになり
半数は鬼籍に集う傘寿会

犬山市 金子 美千代

風みどりふつと亡夫が逢いに来る
築40年耐震補強したけれど
オスプレイでの救援何か引つかかる
これぐらいで膝を痛めたのがショック
誕生日子らに甘える畝づくり

犬山市 関本 かつ子

靴下を脱ぐとどつと出る疲れ
諦めて肩凝りすつと消えてゆき
死に方がロマンチックでない牡丹
お隣へきつと倒れる震度七
軽トラが増えてそろそろ田植どき

京都市 清水 英旺

ガラガラボン運命神が決めている
棺桶に寝たるが如しMRI
食らいながら惨状凝視してゐる我
同情心の片隅どこか冷めている
道問われ学校英語役立たず

京都市 藤井 文代

鉢巻してアップさせます記憶力
空気に酔い乗せられた椅子気に入った
思い込みと習慣が邪魔する思考
隣からの匂うコーヒードヒとやすみ
財源は裏付けとつて遣い切る

京都市 榎本 宏子

全部バラシ小細工なしのおつき合い
句は出来たほんやりネコを抱いている
全没に頭リセット初期化する
顔形似てぬ姉妹の似てる声
叩く撫でる足にも頼む山歩き

京都市 三宅 満子

女子会が続きおなかも疲れ気味
新緑がまぶしい京でルノワール
左遷地の水にも慣れて遅い春
倦怠期短所ばかりが見えてくる
マイナンバー親子夫婦もバラバラに

長岡京市 山田葉子

華やいだ雰囲気のままお茶にする
服もバッグも買わずシーズン過ぎてゆく
予算内に納まらないが捨てがたい
避難出来るだけの力があるのかな
少年の夢を育てた野球帽

八幡市 今井万紗子

丁寧を作る幸せお味噌汁
父が植えた桜満開見えますか
手習いに小さな未来見えてきた
エラー続きパソコンの中覗きたい
昔はネ顔も心も磨いたわ

大阪府 桑田ゆきの

匿名で震災見舞い慎ましい
花筏蟻一匹が黄泉の旅
百態の羅漢に探す母の顔
節くれの指が押ししてる電子辞書
軍歌まだ忘れていない父傘寿

大阪府 野田栄呼

沸々とたぎるは老いのいらだちか
かしわ餅姑と手作りああ昭和
煌めいて初志貫徹へ血が騒ぐ
無難な日続いているて凄いなあ
よく食べてよく寝て心いつも晴れ

大阪府 米澤倅子

地震国とはありがたくない日本
先見えぬ被災地鎮め給え神
スローライフしあわせ包み夕陽落つ
カンフル剤を欲しがっている頭腦
僅かばかりの募金に心和いでいる

大阪府 池上清治

今聞いた事も忘れる年となり
本名は忘れあだ名で呼ぶ教師
学校で競った友は忘れない
玉砂利を踏んで賞でも貰いたい
思い切り食べた鯨は忘られず

大阪府 井丸昌紀

看護師は別嬪入院を決意
僕の別荘二十四時間看護つき
入院中で全部断ってやる
左目が腫れてる何かあったんだ
ナススコールやつと別嬪さんが来た

大阪府 内田志津子

枯れるまで背伸びしている小米花
初鳴きのいまだリズムに乗りきれず
不意打ちのクシャミ鼻水乱気流
老木に新芽フツフツ命継ぐ
母の日に花と笑顔が来る平和

大阪市 宇都 満知子

土ふまず素足の初夏をまつている
胸いっぱい花粉が済んだ五月風
ワイン色のカーネーションが届いた日
思い出が寂しくさせる花もある
届いた本もつと読みます感謝して

大阪市 江島谷 勝 弘

体も心もサイフもふらついて
草取りにダンゴ虫たち大さわぎ
ケータイを持っているから待たされる
主義主張もっているけど控えている
キムジョウンあの濁声に顔ゆがむ

大阪市 榎 本 舞 夢

雅子妃の回復兆し安堵する
鯉のぼり幸せ運べ被災地に
菖蒲湯で若さもろてる老い二人
母の日に孫まで嬉しサプライズ
雨の日は静かに学ぶ五七五

大阪市 大川 桃 花

服従は性に合わぬと猫家出
絵馬になら個人情報隠さない
たわいない日も人生の句読点
全体を知るためちよつと距離を置く
浮世の苦み知って山菜好きになる

大阪市 奥村 五月

連休は独り静かに休みたい
泥船も沈む事無く五十年
纏め役何時も笑顔で声かける
飛び付けば一桁違うゼロの数
黙祷で何時も始まるクラス会

大阪市 笠嶋 惠 美

带状疱疹今で良かった御越しやす
我が句をば見つけてうれし通り抜け
実家の法事姉妹ちぐはぐ時代の差
夢の七列四十二番タカラヅカ
娘の言葉神の言葉のように聴く

大阪市 川端 一 步

流れ星亡母なら追って行くものを
住いことがあるよう黄色シャツを着る
川柳と将棋で無聊など知らぬ
羽生井山二人の頭脳やわらかい
立ち読みで得して高い本を買う

大阪市 熊代 菜 月

病院の予定ばかりのカレンダー
あの日あの時あなたと行った通りぬけ
言い訳を心の中に押し戻す
テレビ見て泣いてる私母のとし
友の数みんなわたしの宝物

大阪市 古今堂 蕉子

薫風の息はすんなり出入りする
愚痴入れた箱を虫干しする晴れ間
猫に罪ないがわたしは猫嫌い
オンザロック一緒に飲んだだけの仲
何回もリベンジ何度も敗れる

大阪市 小谷 集一

人影がだんだん消える下り坂
咲く日まで舊は夢を溜めて待つ
本当は強い女の泣き黒子
地下鉄の窓に映った老いた顔
運命に任せて生きる無為無策

大阪市 近藤 正

歯を抜かれ金払わされ顔ゆがむ
父よりも母の日多いブレゼント
地震帯川内原発ひとまたぎ
本当の思考停止はあなたです
リオ五輪招いた人が居りません

大阪市 坂 裕之

真っ直ぐに行けばぶつかる事もある
大学は地方で下宿したい孫
へこんだら叱ってくれる友が居る
割り勘で損したことは無い私
好きなよう遣らせてもらい元気です

大阪市 佐藤 忠昭

気に入った店は誰にも教えない
先客にチョコット会釈座が和む
突き出しは親交の奢り腕を喰う
酒飲んで心の滓を流し出す
酒飲みにカラオケ不要酒不味い

大阪市 田浦 實

ジュラルミンのランドセルある里の蔵
スローライフ退却じゃない挑戦だ
病院の帰りはいつも腹が減る
僕の財布診察券が威張ってる
はったりでもプラス思考で老いに喝

大阪市 谷口 義

気合入れた後から空気抜けてくる
これぐらいにしとくわと神さまに頼む
肩叩き合ったことなどない夫婦
嘘吐きと夫は思っているだろう
磨り減ってからがにんげん面白い

大阪市 津守 なぎさ

旬の花めでるあちこち露地多彩
早や植えのゴーヤぐんぐん陽をはじく
千回をこえた地震に耐えぬいて
毎日の雨被災地をおもいやる
GW 済んで子供の多い事

大阪市 津村 志華子

石の上に座り続けてまだ元気
捨て切れぬ欲のひとつを抱いている

黙々と写経の筆と無に浸る

卒寿とて日焼けを防ぐ夏帽子

母送る最後の旅はリムジンで

大阪市 寺井 弘子

バーゲンで品位なくしている淑女

靴下の穴から足の吐息もれ

原点に戻ると視野の広くなり

ときめきを気付かぬ振りです席を立つ

囲まれて花束胸に職場去る

大阪市 寺本 実

靴下の臭い気にせぬ仲になり

名が出ずに天気景気でごあいさつ

成功に導く秘訣ただ笑顔

まぶた閉じ想い出めぐる旅に出る

指折って首長くして待つ年金日

大阪市 原田 すみ子

要るものは要ると家計簿大雑把

信念は有っても折りに触れ揺れる

ヒロインの祖母では出番あまり無い

主役立て自分の味も出さしようが

墓参り回数ならば親不孝

大阪市 板東 倫子

電気屋がガス ガス屋が電気売りに来る

震度三か五かとだんだん慣れて来る

里帰り抱き合う親も子も孫も

黙祷をする日ばかりが増えて行く

母さんの母へと孫からチョコレート

大阪市 平嶋 美智子

努力したらしい社長という名士

ちよい悪が枯れて柔和な顔になり

突然に声かけられた妙な縁

働かぬ脳を見かぎり電子辞書

この頃は思い出だけを追いかける

大阪市 藤田 武人

死に向かう事実生きているという覚悟

正直と向き合い書いたアンケート

片道の切符机に置いてある

長靴も傘も帽子も皆黄色

逝った友闘いはまだ終わらない

大阪市 藤原 千恵子

桜咲くお受験自慢孫自慢

花到来友とおんなじ香りする

怖い思い体験せずに終わりたい

犬も猫も家に帰れば暖かい

加齢かなテレビを観ては貰い泣き

大阪市 伏見雅明

明日こそ開くつもりでいる蕾
褒められて花は支えた葉に感謝
客どうし挨拶かわす通り抜け
花見酒リミット超えて膝笑う
たましいが安らぐ花の通り抜け

大阪市 升成好

たつぷりの余白を残すいいカルテ
ペン牝脈がスマホの指を嫉妬する
遠まわりしただけ拾う花の種
近づいて八十路の峰の高さ知る
諦めぬ人に手を貸す徳俵

大阪市 吉内タカ子

災害の長き苦勞に神頼み
我が身から老いの仮設は気に掛かる
朝ドラに合わせ片付け早く済む
早起きは病んで止めない悪い癖
庭に咲く長い藤花癒される

大阪市 若本安代

土肥やし心を癒すれんげ草
道祖神出合う飛鳥の里が好き
立ち止まりひと息つくと見えて来る
ダイエット忘れてはしゃぐ豆ごはん
薔薇の香に恋の麻酔をかけられる

堺市 奥時雄

不名誉か名誉かパナマ文書に名
僕の名はパナマ文書に載ってない
トランプに僕も言いたいことがある
お愛想の拍手に話長くなる
見た目ほど糞虫の日々楽でない

堺市 加島由一

七回忌亡妻よ喜べ鯉のほり
悩みなどない振りをして生きている
風車この世の恋は片想い
暑い日もいいねドンペリ開けながら
世は情け手元に戻るプーメラン

堺市 柿花和夫

身に覚え妻の丁寧語に焦る
薫風が狭い心をこじ開ける
親と子でホームドラマを見て無口
和と洋の頂点にあるオムライス
被災地へ作業着で行くお偉方

堺市 源田八千代

リフォームのドレスで八十路闊歩する
彼の世から此所はええとこ早よおいで
不思議にも良い想い出ばかり甦る
体調管理出来る内は独り住む
初給より孫メッセージ付きプレゼント

堺市 齋藤 さくら
明日から変わるつもりで竹を踏み

智恵たんと頂く他人有難し
横綱にせめて一人は日本人

お茶の間で野球解説にぎやかだ
負けている阪神御飯進まない

堺市 澤井 敏治

えらいこっちゃ早一年の折り返し

わくわくと余生の日日の八十路越え

祖父は祖父なりに童話を咀嚼する

通り雨止んでも続く雨宿り

英霊の声聞いているサンゴ礁

堺市 遠山 唯教

一合で米研ぐ古いの音をきく

子が送る米を大事に食べてます

春爛漫妻が絵筆をとっている

母の日に探しものする妻の留守

つつがなく静かに暮らす老いふたり

堺市 内藤 憲彦

仲締めがそろそろなのかメロン出た

また来年熱い握手が離れない

公私混同そばで見ると物悲し

明日は我が身足腰頭鍛えねば

カレンダー今年こそはが折り返す

堺市 村上 玄也
存在感あり過ぎている琵琶の種

良く言えば沈着だけ鈍なだけ

気に入らぬらしい筈がかえらない

この間喜寿だったのにもう傘寿

老人も戦争知らぬ人が増え

堺市 矢倉 五月

駅前の本屋もついに両手挙げ

居酒屋の哲人めいて隅の焼酎

無造作に食べるな佐藤錦だよ

夫が居た子が居たオムレッツセピア色

どんどんと短気頑固も自覚あり

堺市 山本 半錢

名付け親の蘊蓄を聞く苦わらい

ありがたい情報源はお嫁さん

表札は別々都合よく暮らし

言い度くて言い度くて飲む酒もあり

嬰路のかすかな揺れは亡母だろう

池田市 栗田 久子

巡る旬何はさておき初鱈

母の日のカーネーションに母を見る

花水木見れば唇ふとゆるむ

ころころを引いて出かける野菜市

奥行きのある行いを友に見る

和泉市 横山捷也

正論を置き去りにして多数決
欲捨ててやつと世間の風に慣れ
花言葉確かめ妻にプレゼント
オフクロサン天にも車椅子ありますか
検査シロ老化に安心しておれぬ

茨木市 島田誠一

満ち足りた重さを膝に読む童話
胸キュンは遥か後期の不整脈
吊革に下がる惰性で行く余生
振り出しに戻さぬ意地の男坂
猛虎復活買いかぶつてる浜の風

茨木市 藤井正雄

真ん中に自分を置いた狭い視野
石臼を回しばあちゃん童歌
からくりを承知の鳩の不眠症
どの人の顔を立てよう順不同
遠隔操作黒幕の家で庭いじり

大阪狭山市 矢野梓

古い二人生きて幸せ豆ご飯
消費税三度の食に付き纏い
誕生日母の日続き子等多忙
延命の処置は要らぬと誕生日
残された命大事に誕生日

貝塚市 石田ひろ子

コンサート暫し身を置く雲の上
ストレスも楽しわたしの潤滑油
惚け防止の本百均で買いました
七坂を越えて十指に余る恩
おたふく豆ボンと平和な顔が出る

河内長野市 植村喜代

晩ごはんあと間食が増えました
デイサービス心の憂さを置いて行く
この世のことこの世が解決くよくよすな
寒椿ポツンと落ちて娘が逝った
手遅れて娘の命送る破目

河内長野市 大島ともこ

掴み取りつい親恨む小さな手
どちらでも良けりや大きい方選ぶ
まだいける撫でて磨いてポンコツ車
緑児の笑顔未来へ玉手箱
ご自由にと変顔野菜並ぶ棚

河内長野市 梶原弘光

風にして風にどんだんなる老後
インテリに切った張ったは似合わない
密偵を放ちバアバの機嫌取る
意気投合およそ三合当たりから
図書館で診察券を先に出す

河内長野市 木見谷 孝代

近ごろは雀もまれで愛らしい
早起きをしても一日短過ぎ

遺品整理思い断ち切り前へ行く

イカにアジ捌いて元氣取り戻す

長生きでみんないい顔ふる里は

河内長野市 黒岩 靖博

飲み代をこっそり付けに澄まし顔

身の丈に合った暮らして小さい幸

特別に何事も無い至福の日

年老いて入れ歯がくがくハヒフヘホ

またおいで言つてた人はもういない

河内長野市 坂上 淳司

逆走を恐れ返納した免許

隠してもキー探し出す認知症

鉄路をもドライブをする認知症

終活の第一免許証返す

不倫補選に血税何と数億円

河内長野市 谷 久美子

御迎えは恐くないけど遣る瀬ない

孫達に譲り渡したDNA

私長女纏め役して我慢して

苦しくなく痛くないのに居る病魔

お誘いを受けてあれこれ服選び

河内長野市 辻村 ヒロ

自分には料理上手も手抜きする

強情も顔に秘めてる深いシワ

いつまでも甘えてた子もパパの顔

人生の楽しみ綴る恋の唄

害虫が海外旅行する時代

河内長野市 藤塚 克三

愚痴すつかり聞いてあげたら酒が出た

前向きが余生楽しむサブプリかも

穏やかに最後はコロリ天国へ

丁寧に残り少ない歯を磨く

朝刊を読んで朝ドラ後未定

河内長野市 松岡 篤

単純なことだ乗るなら飲まぬこと

譲られた席は素直におおきにと

三叉路で犬と私は譲らない

忘れものして百均という機転

母の日と父の日合わせてカンバイ

河内長野市 山室 光弘

好奇心ポケットに入れて老いを討つ

仕事着の汚れは俺の勲章だ

理想と夢捨てた時から人は老い

なっぱ服場末が似合うコップ酒

総活躍皆働きの動員令

岸和田市 岩 佐 ダン吉

多数派の仮面外してみたくなる
切れ味は鈍いが男憎めない
風の向きなど気にしない戦ノ一
受け狙う淋しい僕になつてゐる
時どきはプライドあるか自問する

岸和田市 雪 本 珠 子

邪心ない笑顔に今日も癒される
人の輪の空気流通ままならぬ
リラックスし過ぎた脳が空回り
魔法の手古着活かしてニューモード
立ち止まり見直している人生譜

四条畷市 吉 岡 修

丁寧なノックだチャンスだと思ふ
逃げ道は四方八方からどうぞ
地球からこぼれぬように手をつなご
ライバルのアキレス腱はわかつてる
メビウスの輪の結び目が見えて来た

吹田市 木 下 敏 子

孫七人新芽によきによき子供の日
脳トレに五七五の指を折る
残り火を上手に燃やす靴を履く
絵手紙に母の一句を書き添える
母の日があつて嬉しい鯉井

吹田市 須 磨 活 恵

生きてゆく辛さ楽しさ業と性
躰いた石に身の丈論される
何こともほどほどにせよと石の声
井の蛙なりのプライド持つてゐる
罪と罰今日一日をふり返る

吹田市 野 下 之 男

国民はどうでも良いの核実験
叙勲だよ北国の春おめでとう
あの人の笑顔悲しい広島だ
万札をしみじみ眺め有難う
古くても博物館でどんと来い

高石市 浅 野 房 子

震災に祈るしかない不甲斐無さ
不意に来る地震だあなたならどう逃げる
明日はあす今日のノルマは無事終わる
琴線にふれること無く散つた句よ
生き疲れ一人では荷が重すぎる

高槻市 井 上 照 子

勞られ逆に悔しさ増してくる
憧れた女優も年を重ねてる
まだ続く感謝羅列の日記帳
妥協など出来る筈ない大仕事
遠慮なく老化はどんと押ししてくる

高槻市 片山 かずお

トレーのままに惣菜食べる妻の留守

人だかりに吸い寄せられるクセが出る

建前が勝って解決遠くなる

赤いシャツ着ても背中にでる齡

肚の中読ませぬ苦勞人の笑み

高槻市 島田 千鶴子

亡母の声聞こえたみたい和讃講

ブーメラン付けて諭吉を送り出す

満月と会話が弾む観覧車

予約もなく突然やって来る夏日

時々鏡のぞいて背を伸ばす

高槻市 初代 正彦

お喋りも雑談力という長所

足踏みのお蔭で触れた人情味

コーヒーにお疲れさんと癒される

気まぐれに一駅歩きカプチーノ

風呂上がり先ずはプシユつと缶ビール

高槻市 杉本 義昭

川柳を始めて夫婦近くなり

正直に生きてひとりになる手首

赤恥をさらし人間シヤンとする

冬があるから春の新芽が温かい

恋敵の胸毛にとっても敵わない

高槻市 左右田 泰雄

おくればせ乍ら一花咲かせたい

思い出が柱のきずでよみがえる

振り向けば子等かけぬける砂ほこり

日向ほこすればかすかな草いきれ

平仮名のようにやさしく包む愛

高槻市 富田 美義

南海トラフ避難ツールを揃えねば

危ないと知っても覗くスマホ闇

明日への命を拾う聴診器

ベット飼ひ互いの命見詰め合う

エンディングノートの指示でフルムーン

高槻市 富田 保子

間違えた歳が若くてほめられた

乗れば直ぐ駅弁ひらく江戸の孫

瘦せる日を夢見てズボン捨てられぬ

アイスクリーム服まで舐めて孫の笑み

チャン付けの昔が開くクラス会

高槻市 原 洋志

ブランコの揺れに任せるロスタイム

手土産が軽すぎたのか渋いお茶

神様にあの世の消費税を訊く

言いそびれ宙ぶらりんの観覧車

泣きやすい場所にはいつも壁がある

高槻市 安田忠子

朝食の果実幸せ連れて来る

みずみずしいオシャレしてると褒められる

終章はプラスマイナスゼロにする

恩師逝く皆集まりクラス会

歩いて来たあの道草が懐かしい

豊中市 江見見清

暖かい陽が饒舌にした散歩

守備範囲広くエラーの数も増え

ライバルの長所を真似て超えられず

花も茶も替えて仏に頼む留守

枯れたって信念曲げぬ老いの意地

豊中市 藤井則彦

痛恨のエラーをバネに伸びた人

箸使いに親の姿が透けて見え

再稼働せねば下がらぬ電気代

真っ直ぐに世を渡るのも味気無い

来し方は半端だったと影法師

豊中市 松尾美智代

頑張れば出来るんですね痩せました

叱られているよな父の太い声

辛口の批評をくれる娘の発破

頼られて少し背筋を伸ばす父

二度目なのに又迷ってる同じ辻

豊中市 松村里江

呵呵大笑男の見せる喉仏

花は葉に散る潔さ見てしまふ

美しい文字撫で書きで真似てみる

それぞれの出会いで今を生きている

タイプではないがとつてもやさしいの

豊中市 水野黒兔

君を待ち針の動かぬ花時計

1センチを段差と認め膝なでる

材料費は無視で男の台所

子は親の期待に背くのが家系

花冷えの妻と二人の午後のモカ

富田林市 片岡智恵子

蕎麦はこうして食べるんだよとむせている

仏壇へもう喧嘩しなくていいね

いい所あなた自身が知らぬだけ

板さんと目の合う席で落ち付かず

丁寧すぎる地図でますますたどれない

富田林市 関よしみ

市松が五輪の街に揚がる日よ

かっこつけポーズを取った転び癖

虫封じ鬼灯市を濡れ歩く

自画像に水と木のひびきを入れる

紫蘇ジュース香りの中の笑い声

富田林市 中井アキ

週末は必ず嫁がやって来る
少し迷い少しあきらめ爪を切る
美しい雲ともしもの話する
ブライドを山程持つて黄昏れる
好奇心また脇道へ動き出す

富田林市 中崎深雪

地震なの地に今日も非情の雨が降る
夫婦ゲンカ出来る幸せ地震なの地よ
わたくしをすっかり変えて春巡る
摘み草を諫めてくれた君を恋う
想像の翼はいつも手入れする

富田林市 肥山一文

望むこと指一本でこと足りる
うしろ指さされず生きた正直に
日本の将来託す小さな手
夢であうあの日あの人あの場合で
将来を夢見てたころなつかしい

富田林市 山野寿之

里の風匂には匂を確と咬む
耕運機エンジン音は労働歌
背伸びして景気の底を覗きこむ
面影もみんな仲間のクラス会
手に馴染む夫婦茶碗と五十年

寝屋川市 伊達郁夫

決心がついて誘いの手を握る
言い訳はしないと決めた散る桜
思ひ出を解凍してる春臍
愚痴ひとつ流して今日も介護する
老いふたり一足す一が一になる

寝屋川市 籠島恵子

妹に逝かれた後の水たまり
水たまりいっしょに跨ぐはずだった
薄墨に咲いてはらはらさくら闇
姉さんが好きな花ねと馬酔木咲く
飛び出してC面体になっている

寝屋川市 富山ルイ子

竹藪で初物を掘る季がめぐる
御近所に配りうれしい札を聞く
大変な筍掘りを二人して
筍掘り来年に早や予約する
若竹煮竹の子御飯木の芽合え

寝屋川市 平松かすみ

法名へ語りかけます小半時
柳誌みてデンワ頂くありがとう
マイネームバナマ文書に載ってはず
気合い入れラジオ体操へも参加
屈伸も跳躍もみない加減

寝屋川市 森 茜

傘寿とは遠くにあらず紫木蓮
想定外に戸惑う老いの旅仕度
スーパードまで杖つく人の多いこと
野良猫に名前を付けている無職
乗りついで出来たての湯葉届けられ

羽曳野市 安芸田 泰子

血の色がだんだん薄くなる故郷
因習を守り続ける屋根の反り
決心がつかないままに雨期に入る
訃報記事自分の齢と見比べる
背を伸ばし歩きなさいよ影法師

羽曳野市 宇都宮 ちづる

ゴールデンウィーク空の青さに布団干す
宿坊の朝が清しい善光寺
孫の手が大きくなつた腕相撲
神経衰弱五歳に負けてポケ防止
母の日に夫がくれたカーネーション

羽曳野市 徳山 みつこ

家中の隙間薫風抜けていく
高齢が闊歩成熟した町だ
筋トレは落ち込んだ日のサブリです
母の日のピンクの鉢がよく笑う
くまモンに頑張れなどと言えませぬ

羽曳野市 永田 章司

粘つての死球に評価安打なみ
辛口の評論だけどぬくさある
金メダル博打打つ手に渡せない
民宿で囲むいろりの火がぬくい
反原発鯨のデモが止みません

羽曳野市 藤原 大子

嬉しい記事載せて世相を変えて欲し
褒められて遠ざかってくありのまま
悲しいな声かけられて身構えて
窮地へと追いこんでいたのは自分
選りに選って旅行の朝に熱を出す

羽曳野市 三好 専平

にっこりと笑えばおばあちゃんになるあなた
ハーブのようにすぐに優しく泣くあなた
たたかれてコツンと音を出すあなた
青い海をスイスイ泳ぐあなた
寒月のようなあなたのみるい皺

羽曳野市 吉村 久仁雄

立ち枯れているが添え木の妻がいる
定席に知らない人が座つてる
コロナの香放つておとこ法被着る
空気にはなつてくれない妻といる
道を説くことが趣味ねと妻が言う

東大阪市 北村 賢子

謝罪か否か広島訪れるオバマ
親子ゆえ許されぬこと許すこと
やんわりと諭せばこころ開かせる
散り際の美学さくともわたくしも
かざす手に今も真つ赤な血が巡る

東大阪市 佐々木 満作

休日は妻のエプロンして調理
笑うことクスリにしてた母の常
母という傘で育つて来た昭和
晩学に今更という壁はない
学問に温度差はなしペン磨く

枚方市 海老池 洋

他所事で済まぬ連鎖の大地震
激震の爪痕寒くみる無言
職退いてばかんとしてる昼の月
遺言状ゆつくり墨をすつている
結局はエイヤで決めた分れ道

枚方市 小林 わこ

二度と来ぬ今日一日が宝もの
はいというこの一言が詰まるのだ
取りあえず勝ちはあるあなたに譲つとこ
大胆なことしてみたいプチ旅行
雲流れポトポト落ちていく記憶

枚方市 丹後屋 肇

菖蒲湯に浸かつて故郷嗅いでいる
頼つてた妻を亡くした白い杖
紫陽花が艶めく雨の年回忌
春一番飛んだ帽子が縁結び
千本鳥居抜けければ青葉顔撫でる

枚方市 二宮 山久

精いっぱい生き証の日記帳
七〇坂孫へエールの子どもの日
締め切りが近い作句の書齋部屋
今日生きる目覚めさわやか元氣者
新緑をあびてウォークのにぎり飯

枚方市 二宮 紫鳳

明るさと笑顔が集うウォーキング
シヨッピングベダル軽やか年金日
ほどほどの目盛りが欲しい老い二人
木の芽和えピッチが上がる夫婦酒
みどり風六十路の坂を闊歩する

枚方市 寺川 弘一

嘘だから何度も同じことを言う
交差点多くて首が凝る街だ
バカみたい一日潰すパソコンゲーム
神か仏かどっちなかに皆なるさ
あの世ではみんな善人ばかりなの

安全が第一金は二の次に

藤井寺市 伊藤 アヤ子

明日の事分らないから夢がある

珍客に試行錯誤でおもてなし

仏壇にカーネーションありがとう

恐れては何も出来ない結婚も

藤井寺市 太田 扶美代

五月晴れ今日は特等席にいる

新芽溢れて会いたい人が増えてくる

一坪の庭がわたしの秘密基地

この糸を切ればわたしが駄目になる

摺り足で尚摺り足できた老後

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

誘われた訳ではないが風と逢う

聞き役もいいな黙って傍にいる

真ん中に出ると小さくなる身体

まだ呆けぬ恋しいひとがいる限り

本当のわたしが湯船から出ます

藤井寺市 鈴木 いさお

梅雨明けのころ母さんの七回忌

ハルカスから六甲をみる生駒みる

饒舌なバラと寡黙なコスモスと

飲みながら婿の器量を測ってる

なりたいたいね親父のような酒呑みに

本職は主婦あれこれと思うこと

さり気なく庇ってくれてありがとう

五十年此の庖丁が捨てられぬ

朝顔にしようか胡瓜植えようか

働けぬ蟻はうろろするばかり

藤井寺市 田付 絹枝

風の森競うさえずり目をこらす

手術後の瞑想妄想宙に舞う

バタバタ症少し休めと神の声

ベッドから鳥の自由に嫉妬する

手造りの珍味をゲット道の駅

藤井寺市 津田 シルク

政治家になるとブレーキ故障する

妻はなかなか賢女だったと逝ってから

不発弾抱いて眉間の皺深く

介護保険使って解るありがたさ

家計簿の二ひく三をどう埋める

藤井寺市 増井 ヨシ枝

お散歩ですの自転車の前かごの犬

車椅子お茶飲んだ気で花を買い

法事する親子だけでとこじんまり

被災地をおもう車椅子のりながら

ひい孫へせめて兜の押絵など

藤井寺市 吉田 喜代子

奈良の子鹿瞳に何が見えませうか
義歯悲し炒り豆スルメ見てるだけ
旧友と神戸スイーツ食べ歩く
お別れは足は大事に合言葉
何時迄も続く地震と根気かな

藤井寺市 若松 雅枝

母の日に期待の子等が誰も来ぬ
合せ鏡で見た白髪のが頭
剪定の音見下して鯉泳ぐ
駄々こねた方が強いに決まつてる
腰骨がずれたかしばれ止まらない

松原市 森松 まつお

一週間酒は呑むなときつい医者
散髪へ行くのに髭を剃っている
大会へ気合の入った顔が来る
逝く日まで五欲は胸に抱いている
唇のピアスにネギがついている

箕面市 酒井 紀華

すつきりと眉をととのえ勝負顔
経を読むわたしに春の風が吹く
胸の傷新しい恋で蓋をする
独り者きりりと生きる炎天下
イエスマン返事はいいが重い腰

箕面市 出口 セツ子

新しいこと興味で挑む惚け防止
子が自立当てにされぬと張りが無い
健康のテレビ夫婦で見えています
転ぶたびしぶとく強くなる女
誕生日催促しても夫無視

箕面市 広島 巴子

孫が着て武者人形が生き返る
切られ役疲れ降参爺と婆
鯉幟ファイトファイトと泳いでる
温かい血が満ち満ちてポランティア
被災地は避けてと願う梅雨間近

八尾市 内海 幸生

高いから旨いと思うほどの舌
敵を知り己を知れば逃げるしか
極楽へ行くより地獄行きやすし
株下がる儂の所為では無いと神
必死とは生き抜くための文字なのか

八尾市 高杉 千歩

小走りも出来ずインターホンにささやき
救急車確かめ鍵を開けたまま
生きたとは素晴らしいね樹々若葉
浮き沈みあつて悔いなくすみ草
余白埋めるあまりに長い人生

八尾市 寺川 肇

辛抱が美德のような世に育ち
老齢へもう後がない拉致家族
年金の論吉たじろぐ新学期
人の世の辛酸舐めて共白髪
アナログ戦士粘り通して社に尽くす

八尾市 宮崎 シマ子

飲んだ後会費回収はかどらぬ
スキヤキの脂味なめらかな会話
耐えきれず一人眺める月おぼろ
ほどほどがわからず兎寝てしま
お勤めがちぐはぐ姑を頼りきる

八尾市 村上 ミツ子

続く余震へ祈るしかない無力
やっと出てきたくまモンへみな笑顔
ニユース見て納得したり怒ったり
諦めるあきらめるなど言われても
負の連鎖どうか断ち切れますように

八尾市 山根 妙子

新聞で兜を折って犬に被せ
さきり顔武者人形の初節句
槌音の響きに小さな義援金
生きただけハブニングにも巡り合う
連休が終ると一人静かです

神戸市 上田 和宏

紫陽花の色蔭る日本も翳る
いまどきの歌は歌えぬ友と群れ
英語聞くとなぜかうなずく日本人
色仕掛け分かっていても拒まない
国債買うやっぱり日本好きだから

神戸市 奥澤 洋次郎

淋しさを置いてスポーツジムへ行く
雨男雨の恵みを受けている
なんとなくニユース番組嘘っぽい
子供泣け泣け団地が進む高齢化
指切りをした約束にない時効

神戸市 白川 淑子

人間の森で迷子になる羊
風薫る甘い約束してしまう
春爛漫ままならぬ世も生き生きと
マナー欠く老いの甘えが恥ずかしい
初恋は耳まで赤くなつた頃

神戸市 富永 恭子

次ページをめくる逆転期待して
しゃしゃり出る脇芽早めに摘んでおく
まずコーヒーゆっくり飲んで立ち上がる
百花咲く中で一人のお茶を飲む
果実酒の出来は上乘いい予感

神戸市 能勢 利子

喫茶店水を何度も入れにくる
命日に何故か花ある夫の墓
ブランコに乗りたい時は孫誘う
真つ新な今日を信じて深呼吸
究極の遺言書かな日記帳

神戸市 松井 文香

モナリザの笑みは快眠へと誘う
調べたら悩みな人誰もない
束の間の幻に酔う恋一ツ
連弾の呼吸びつたり笑む親娘
恒例の筈掘りに沸く従姉弟

神戸市 山崎 武彦

犬だけが妻と阿吽で通じ合う
本音吐くキャスターすぐに降ろされる
微笑んで深い眠りについた母
吊橋を渡ると故郷の笛太鼓
かぶと虫死んでも額に飾られる

明石市 糀谷 和郎

裏側の顔は決して見せぬ月
人の血を吸う蚊もきつと命懸け
深呼吸心の棘が抜けてゆく
投函のあとも手を入れ確かめる
結論はでてもやる人でてこない

尼崎市 市坪 武臣

短命を楽しむように桜散る
履歴書に嘘を書きたい長所欄
度たびのミスを乗り越え味が増す
ブランドの靴下だつて穴はあく
激動の世を無事に渡つて今がある

尼崎市 加川 靖鬼

風除けにされたりしたり競い合う
撫でられて村に溶け込む石地藏
DNAというナンバーを持つている
直筆の百人一句目眩いする
念のため菓子箱の底振つてみる

尼崎市 長浜 美籠

春よ春菜の花漬けも今が旬
はや傘寿さして変身しないまま
一汁一菜でも太るとは奇つ怪な
几帳面に応えてくれるホツチキス
淋しいなあ童女にかえる友と会う

尼崎市 藤井 宏造

病院のストレス溜まる四人部屋
だまされた監視カメラのニセモノに
今夜もまた毒になるまで酒を飲む
ミニクラス会できて楽しい友の通夜
まだ古稀だきつといひ風僕に吹く

尼崎市 山田 耕治

子供の日ハンバーガーへ御供する

何もせぬ一日を許してしまふ

お手伝いの最初洗濯物たたみ

古いこと知らない顔で聞いている

突撃ラッパ吹く人がいる外野から

芦屋市 黒田 能子

ポケットの鈴がかすかに鳴っている

一番の味方はきつと母だろう

今朝も元氣あなたのためのおりんご剥く

歳月にりっぱに咲いた花の種

よかつたなああなたの横の指定席

加西市 金川 宣子

渋滞を若葉と紅葉作り上げ

人生の卒業予定見えてこそ

逝く時も一人と悟り性根入れ

終い湯にバラを散りばめりラックス

家計簿にベストを尽くす妻の跡

川西市 大坪 一徳

年金の暮しに慣れて腹八分

ゴルフ会休んだ友の計報来る

里山を歩こう会が闊歩する

土砂降りを若い二人が突き抜ける

良き昭和悲しいことは皆忘れ

川西市 山口 不動

孫五人パーベキューして呼び集め

孫達が帰って二人早寝する

あるじ無き庭に満艦さつき咲く

春嵐去って鶯戻ってる

長い足白いパラソル顔見えず

篠山市 北澤 稠民

ボランテИА金の話は仕舞いこむ

競うこと争うことを忘れよう

酒も飲みクスリも飲んで老いてます

不器用という弱点で生きてます

医者を出す薬解らず安堵する

篠山市 酒井 健二

背を伸ばし監視カメラに胸を張る

胸襟を開いた返事素っ気ない

爪だけは伸びる失意の一日も

天命に逆らい今日も葉漬け

綺麗ごと言つて鏡で顔を見る

三田市 足立 つな子

ありがたい白馬の王子だんな様

夫婦です的外さず雨あがる

立つ座るマッスル鍛え再生へ

水素水飲んでストレス活性化

山と海三十万の都市が好き

三田市 石原 歳子

いかなごの釘煮ひそかに待っている

よく見ると皺増えてきた朝鏡

待っていた釘煮手にして直ぐ電話

おいしいと釘煮をほめて又貰う

五月晴れ病院巡りして元気

三田市 上垣 キヨミ

後期でも五感いきいき日日常忙

辛口の意見親友なればこそ

難産の果てに生まれた句がいと

ママ友で埋まるお洒落なレストラン

若冲の鶏が羽搏く音がする

三田市 上田 ひとみ

水たまりとべない私見ています

ヒアシンスその一途さは切ないね

階段の途中詩人になりました

雨を受けとめ風を抱いている今日

疲れたら眠ろうクマの抱きまくら

三田市 尾崎 一子

遺影から抜け出た夫と春の酒

震災が世界を繋ぐ太い橋

震災の度にひろがる支援の輪

しあわせなわたしを包む若葉風

震災に百円募金鯛買う

三田市 北野 哲男

子供の日屋根に菖蒲の家も減り

粽よりケーキが好きと一人っ子

古里で子に草笛を吹いて見せ

懐かしや窓に去年のヤモリ出る

七億の夢と貧乏くじを買う

三田市 久保田 千代

戻らない今日を大事に過ごす日

春盛り温もりの陽を浴びる

限界を知って空しさ湧きあがる

歌ってる瞬間が私になれる時

あるだけの鉛筆削り五七五

三田市 野口 晶子

下町と路地裏歩く大都会

尋ね来た死神座り花見酒

神様も平均寿命決めかねる

ヒーローになりたい死体役の僕

自爆する人にも問うた死の重さ

三田市 福田 好文

諦めか自信だろうかノーマイク

天辺に立つと本性すぐに出る

肩書きが付いて泳ぎが上手くなる

OB会同じ自慢を聞きに行く

野良仕事観光バスの視線浴び

三田市 堀 正和

予報士が明るい服で晴れと言う
被災して知る人間の温かさ
消しゴムがまだ忙しい青写真
風を読むことはしないぞマイベース
僕宛は茶封筒しかやつて来ぬ

宝塚市 田中 章子

新道知らないナビとまたけんか
Gパンでロンドン帰りのご住職
国宝のみほとけの笑み裏切らぬ
時代かな農地に太陽光パネル
老いてまた同じ方向見るふたり

西宮市 秋元 てる

歩け歩け緑風と仲間が待つて居る
夢の入る余地ない世界などは無い
休日の折込み程の気迫欲し
手探りで長寿の森に生きる日々
節約を自慢する女隠す女

西宮市 足立 茂

寝込んでる時に見舞の長電話
同郷の友と訛りが弾む酒
シッポ切りされたトカゲがカムバック
坊さんがお通夜のあとで行くクラブ
玉の汗見てから彼を好きになる

西宮市 梅澤 盛夫

心地よい大人の時間ジャズライブ
懐かしい風が吹いてた神戸ジャズ
次世代につけを回して長寿国
良き夫婦深いところで分り合う
文春が狙う大物次はだれ

西宮市 緒方 美津子

苦味から春をいただくいい日本
お財布も孫もよろこぶ割れおかし
あほらしいことも笑いにして夫婦
熊本に味噌汁の朝祈るのみ
ふる里の風は素足にやわらかい

西宮市 亀岡 哲子

母の日が着くまで今日は出られない
ばあちゃんのメールは手書き花切手
メルヘンの森へ還つてゆく長寿
ラリルレロはつきり言葉言う稽古
アンカーにエースを置いている余裕

西宮市 西口 いわゑ

すんなりと老いるというもむずかしい
お隣のはや五年目の鯉のぼり
輪になれば敵も味方もないビール
蓄たちみんな光つて天を向く
一人称楽と寂とが同居する

西宮市 福島弘子

九条を守る為だと声高に

肥後もつこすその内きつと立ち直る

青い鳥追つて三途の川まで来

四面楚歌知恵で乗り切る年の功

永田町とぼけ上手がスクラムを

西宮市 山本義子

うっかりも少しませとく処世術

サシスセソはすっかり手抜きしてレンジ

優しさだけ見える眼鏡かけてます

うつらうつら世のしきたりに遠くなる

運不運きれいに包むオブラート

西脇市 七反田順子

無口でも言いたいことがふたつみつ

ちゅうハイを5回に分けて下戸の技

ガラケイが何んや解らん後期です

サプリメント若葉の滴ふりかける

マスコット犬と川の字老夫婦

姫路市 古川奮水

減塩を誓い退院許可となる

藤棚に誘いコンピニ折弁当

田園の若葉が薫る深呼吸

オプシヨンは省き翼で旅に出る

旧知寄り心友宅で祝酒

奈良県 安福和夫

サムライにガムのクチャクチャ似合わない

フィギュアに芝居の表現生かせるか

囲碁七冠次の相手はコンピユータ

人間の代表負けてなるものか

囲碁麻雀四千年が生んだ知恵

奈良県 谷川憲

出張先大阪弁が幅きかす

路地裏に昭和をさがすひとり旅

叩いても途切れた記憶もどらない

陋屋の柱に残る背比べ

高く売れたのは箱付きマジンガー

奈良県 中原比呂志

華やかな宇宙に鎮まらぬ地殻

無視されたコラムに隠れている真実

草書体読めぬ世代で飛ぶ絵文字

指タツチ誤作動一日棒に振り

ばあさんは施設じいさんはランドリーへ

奈良市 阿部紀子

句碑なら臙腫と気が舞い上がる

川柳を子から育てて町おこし

忘れたので忘れるのかも知れぬ

アマリリス倍々増えて鉢溢れ

色褪せぬ振袖孫に良く似合い

奈良市 大久保 眞 澄

幾何好きの蜘蛛の特技はレース編み

待合室誰が患者か付き添いか

いい御主人らしいうちのダンナ様

力んでみても今更のことばかり

断捨離せよとリサイクル店から電話

奈良市 加門 萌 子

春すてき麻路持ち友が来る

一病でないから米寿ほど遠い

ふるさとも遠く同窓会終う

わたくしが居ないと駄目な筈なのに

定年の夫は古いタイプです

奈良市 辻内 げんえい

デイケアの車行き交う朝の街

トボトボと歩く人見て我に喝

運動と音楽出来ぬのは血筋

マル秘ですこのエピソード君にだけ

同窓会みんな浮沈の過去話す

奈良市 米 田 恭 昌

人のため献血というケルン積む

過労死の男遺した火のページ

この歳で元氣粧う二度の職

鬼課長のなれそめ聞いた三次会

マイナンバーややこしそいでまだ持たぬ

生駒市 飛 永 ぶりこ

阿弥陀さま私すつぱり浄化する

生かされてふつと忘れてつい愚痴る

マッサージ心の凝りも解けていく

深読みをしすぎて風邪に居直られ

予定表夕方なのにまだ未処理

香芝市 大内 朝 子

初恋の思い出きゅんと柿若葉

未来凶へ夜明けの唄をうたわんか

立ち食いのうどんをすすする隙だらけ

心配な子へへこたれぬ母の役

人間の素顔にもどる土いじり

大和郡山市 坊 農 柳 弘

見て聞いて食べて明日を模索する

夢追いの真ん中辺にある期待

誘われて仕掛け花火に口説かれる

聞き役の位置で明日を考える

愛されて花いちもんめランドセル

和歌山市 磯 部 義 雄

機嫌とり今日は勝たせてやる将棋

旗色が悪い今夜は早寝する

連休が救ってくれる五月病

愚痴言わず嫁が介護をしてくれる

誕生日感謝を込めて箸を置く

和歌山市 上田紀子

恙無く心が軽い五月晴れ
爽やかな風と遊んだスニーカー
順調に老いていますと言う鏡
歳重ね恐いものなし肝座る
お陰様今日一日を遣いきる

和歌山市 楠見章子

招待状が届かぬリオのカーニバル
子等の瞳も山も澄んでる雨上がり
ラストチャンス先ず帽子から変えてみる
サッチモをかけてもやもや吹っ飛ばす
冷や奴のピュアと勝負はせぬことに

和歌山市 坂部紀久子

たつぷりと時間の贅沢しています
偶然の振りして駅へ会いに行く
突っ掛けで嫁がカレーを持ってくる
至れり尽くせりだんだん淋しくなる我が家
誰の目にも触れずに消えていく一句

和歌山市 武本碧

気配りが効いて歯車弾み出す
鉛筆を丸め乱れる思い断つ
梨園の妻なんて今風シンデレラ
反骨の精神今はイエスマン
たそがれて禿びた鉛筆いとおしむ

和歌山市 玉置当代

花吹雪ひとひら受けたワンカップ
痛い膝宥めて花の寺巡る
コーヒーのお代わりをする待ち合わせ
新緑へ息継ぎに行く手弁当
今日も無事夕日に感謝して眠る

和歌山市 土屋起世子

こんな日も笑顔の遺影憎らしい
生かされたお陰で弾む趣味の会
まだ保険入れますよと世辞を聞く
吹っ切れた顔で鏡も安堵する
まだ老いていられぬ孫や曾孫見る

和歌山市 福井菜摘

火も水もくぐった父の手の温み
今もって母に及ばぬ知恵袋
惚けぬように毎日捻子を巻いている
人生の荷崩れふせぐ趣味の会
あるがまま生きて紀州の水に合う

和歌山市 古久保和子

山は新緑足踏みばかりしておれぬ
都合よく私の耳は伸び縮み
傘立てに杖一本が仲間入り
鉛筆がまあるくなつて眠くなる
犬笛に呼ばれたような気がするが

和歌山市 堀 富美子

手を焼いた分だけ笑う花の鉢
マイペース崩さぬ今日をキープする
ペースメーカー私にはっぱかけて来る
沈黙は苦手口火の空気読む
癒された今日の浪費は無駄でない

和歌山市 松尾和香

一杯のコーヒーやる気出して来る
逝く日まで今の時間を続けたい
五七五終止符飾る手を添える
二十年先地震来るとの現在地
衣替え心も洗う五月晴れ

和歌山市 松原寿子

涙こらえて誰にも負けぬ靴の底
受け止めて呉れるポストに礼を言う
紫陽花の心の底は読み取れぬ
胸に浸みる君の言葉を逃さない
足し算引き算結局何も残らない

岩出市 藤原ほのか

急いでも違いはないと言いつ聞かず
方言がお国自慢を熱くする
ドン底を知っているからひるまない
底力信じてみよう今だから
底力信じています町工場

海南省 小谷小雪

点滴がポトリと揺れて母繋ぐ
母と居てぶれない自信湧いてくる
久びさのデパ地下に来て目が冴える
学舎の窓に流れていく唱歌
窮屈でないのでしょうか夫婦旅

海南省 堂上泰女

竜神温泉コデマリ咲いて懐かしむ
鷺が舞うキリキリと悪声で
カラフルな傘の季節も近くなる
母の日父の日東ねて届く柏餅
紫外線カットの帽子雨も除け

紀の川市 宇野幹子

ゆつくりと拳開いてヒトになる
五月晴れ方程式がとけてくる
少年へタイムスリップする小路
今もまだ残像を追う七回忌
脱輪をしながら喜寿へこぎつける

紀の川市 北山絹子

大切な事を時代が忘れてる
思い切り翔んで未来へ着地する
愛情の欠片を抱いてまだ独り
水恋し花も恋しい石仏
ペン胼胝に父の苦勞が甦る

紀の川市 楠原富香

引き際が来たのか骨が軋み出す

先ず土産買って安心する旅路

生きる道探り続けて草臥れる

お袋の味に納得した帰省

耐えた分大人になった土踏まず

紀の川市 辻内次根

椎木の山は五月の風を生む

あみだくじひいて現在地に着いた

眼を閉じて初夏の光の届く耳

先ず生きる五キロの米を買ってくる

二十四時時々びっくり水を差す

田辺市 岡本昇

鈍行で老化の道を辿ります

迷ったら父の背中と会話する

嫁ぐ朝とうさんの肩揺れていた

口開けたままで辛かる鯉のほり

真夜中に指折る俺を笑う妻

橋本市 石田隆彦

少したが社会に返すポランティア

若者の汗が輝くポランティア

男たる土台はやさしさと悟る

教室のあふれる個性みなダイヤ

わかる日も来ますよ親のありがたさ

鳥取県 石谷美恵子

菜の花の合唱ジョギングが弾む

再会へみんなが古い笛を吹く

井戸水のうまさを褒めて一人住む

百歳の目にはひとりの的もない

分相応とやつと納得する家計

鳥取県 岩崎和子

川柳誌喜びおさえめくつてる

友笑顔柳誌めくると次々と

川柳誌閉じても浮かぶ友の顔

兄二人ふたとせ続き星になる

眠ろうか兄の歌声聞こえ来る

鳥取県 斉尾くにこ

救命の必死 救急車の遅さ

逆戻し五分と願う事故現場

横転の単車が漏らす油臭

看護師となった娘の頼もしさ

深傷負う愛車もみなもただ無言

鳥取県 竹信照彦

鯉幟の隣に夏が立っていた

余震続き台風並みの低気圧

アベノミクス三本の矢も当て外れ

マイナス金利じわり地銀の首しめる

借金の利子重かったなあ昭和

鳥取県 西谷悦子

生きてゆく彩に気配り歳保つ
主語のない会話だんだん増えてくる
わたくしの居場所キッチン落ち着いて
思うこと胸でこなしてから話そう
地震情報耳慣れが怖くなる

鳥取県 細田裕花

十五分ページをめくる朝ドラマ
良い仕事出来そう気持ち良い朝だ
アクセルを踏んで五月を謳歌する
口笛を吹くと昭和が振り向いた
文庫本読めるメガネに替えました

鳥取県 山下節子

家計簿の赤字を補填母の謎
挨拶はいつもやさしい顔でする
さくら咲くいつもの春と同じ色
マイナンパー決められている自覚なし
ふる里をさ迷う千の風になる

鳥取市 池澤大鯨

安請合い手術五時間平ちゃらだ
付き添いはすることないから邪魔になる
手術慣れしていると妻は皮肉言う
管で尿垂れ流す別にある尿意
俺の臨終妻は思つてオロオロす

鳥取市 加藤茶人

墓も建て葬儀代も貯め元氣
衣食住その上何がまだ要るの
老人会資格はゲートボール好き
漢方が親の小言のように効き
レジェンドの妻にあげたい榮譽賞

鳥取市 岸本孝子

これだけは言いたくないあなた誰
気配りに甘えて長居してしま
何事にもうなずく悪い癖がある
キヨロキヨロとするのも仕事巡查さん
仏壇の燐寸を借りて灸すえる

鳥取市 倉益一瑤

梓抜けて風と放浪してみたい
キッチンが妻の鳥だと譲らない
霧笛鳴る夢がだんだん遠ざかる
さくら散り妹の泣く声を聞く
一徹を貫き弥陀の手に乗った

鳥取市 坂本とも湖

深追いが過ぎていくさで人が死ぬ
桃太郎に夢のジーンズはかせたい
逆算をすると私が先に逝く
被災地へミラクルの知恵貸してくれ
ロボットに情けと美学などは無い

鳥取市 田中 童子

母の齒に合つた食事でみな元氣
他人ならいつでも言える無理するな
ひと休みしたただけなのに家事の山
お野菜を包む新聞読み始め
暇な日もボーツとしないお金持ち

鳥取市 棚田 大

人生の仮免取れとせかします
裸つきあい愛と憎などこだわらぬ
人工知能匂づくりして夢を見た
遊園地大人ばかりだあきれちゃう
心には縄張りなんて作らせぬ

鳥取市 谷口 回春子

妻色に染められ暮らす五十年
ピーヒヤリ祭囃子が旧友を呼ぶ
嫌ですと言つたとたんに欲が湧く
味気ない暮らしにそつと紅をさす
辛せと気づいた時は過去形だ

鳥取市 永原 昌鼓

半分は外国人が大相撲
反省の微塵も見せぬ北の国
人間は学歴よりも人柄だ
すじ一本違えさ迷う暮れの街
宇宙にもさ迷うゴミがあるらしい

鳥取市 中村 金祥

連休の間は息を潜めてる
寒暖が極端過ぎてまだ炬燵
ゴミ出しも妻は忘れぬ薄化粧
野菜苗植えて子守の唄歌う
笑い皺自分も惚れる相になり

鳥取市 夏目 粹

半額に魅せられサイズ妥協する
いくらあつてもいいものは金でない
満天の星も我が座は譲らない
痛み止めのんで切ない世を歩く
なんでだろやさしくされて目が潤む

鳥取市 西川 和子

磨り減つて扱い難くなつて来た
身の動き今日の予定が熟せない
まだ夢があつて薬は手放せぬ
持ち寄つた匂を使ってメニュー増え
失敗作ひと捻りして生き返る

鳥取市 春木 圭一郎

もう一人自分がいると意識する
全員に好かれることはまずはない
嫌なこと無理して合わすことはない
起こることすべて自分へふりかかる
尊敬の心身近な人へ持つ

鳥取市 福西 茶子

バンザイだ孫は嫁似で背が高い
母眠る丘へ杖つき腰曲げて
日本中待たせてパッと散るサクラ
当方は無縁株安ゼロ金利
早起きをして論吉は拾えない

鳥取市 前田 楓花

花の名を知らぬ夫の草むしり
ゆずり葉のような母の死孫の生
泣いている初声聞いた戸の向こう
見ぬふりが出来ぬ大人になりました
トキメキを探して歩く駆けぬよう

鳥取市 山下 凱柳

あの時の出会い人生変えました
午後一の会議堂々船を漕ぐ
都知事さんちよつと高飛車ないですか
無我夢中なつて指折りボケ防止
俺の出番必ず来ると爪を研ぐ

鳥取市 両川 無限

耕すと亡父の匂いがする棚田
おごそかに神をいぎなう巫女の笛
矢面にはだかる父という巨木
寝た切りの父には狭い空だった
十戒に囲まれ外に出られない

鳥取市 吉田 孔美子

経上げる幼馴染の僧も椅子
先の事心緩める友の僧
粘つたら明日が当てにならぬ腰
加湿器は不要ね熟女たちの午後
ドレスにもストローハットスニーカー

鳥取市 吉田 弘子

老いるとは明日の約束さえ疑問
老人と猫深い訳ありそうな
一点の翳りもないと言う逮捕
五七五トイレと風呂で湧いてくる
スーパ一の死角睨んでいるカメラ

倉吉市 猪川 由美子

被災五年まだ癒えぬのにまた地震
世が荒み弱者どんだん身が縮む
家も身もメンテナンスに忙しい
絵に描いたモチいつ食べれるの総理殿
地震をよそに海外旅の人々だ

倉吉市 牧野 芳光

南風吹いたら鳥になるつもり
連休が過ぎる我が家の窓の外
雷管は抜けた安心するように
マスコミと救助ヘリとがバトルする
民間にまかせて事もなく終る

倉吉市 山中康子

ひ孫出来親近感がこゆくなる
交替と言えど看護師重労働

初めての足湯ほっこりする笑顔

命名を任され「陽菜」と何度書く

真夜中のひらめき捨てたものでない

米子市 後藤宏之

じゃんけんが決める残りはおと一個

あの国がまつりまたまたミサイルか

大根が助演男優賞をとる

古希がすぎ迎えはいらぬ喜寿に言う

ごきげんを直す秘訣をやつと知る

米子市 後藤美恵子

万緑が日頃の灰汁を抜いてくれ

鯉のぼり川に泳がせ村興す

穏やかな同居に居場所探してる

老化とは告げない医者のおしさよ

カメレオン選挙のたびに増えてくる

米子市 竹村紀の治

行く当てもなく手と足の爪を切る

彼奴もかそうだったのか同期会

嫌いとは言わずにムリと拒否される

瘦せ我慢効かなくなつて風邪を引く

図書館が休みのときは美術館

米子市 成田雨奇

ストレスのとはあんたと妻が言う

ベッドから落ちぬあんたが不思議と言う

身を削る思いなどした事はない

雪の日も雷の日も配つたぞ

妻よりもましな腕力布団干す

鳥根県 伊藤寿美

「宇多田」聞きと姉ちゃんを見る朝餉

枯渇する脳に呼び水入れる孫

触診する老医が好きで行く医院

二十年前の服だが今もモリ・ハナエ

忘れていた傘を返しにゆく此の世

松江市 石橋芳山

火を吐いた男ゴジラの顔をして

まだ走り足らぬか風を追う駿馬

その件は触れずにこれからもピエロ

暗闇に両手両足縛られる

真つ黒な夜の太さに動かれず

松江市 小川注湖

落語会憂さを忘れて大笑い

ママの手に泣き止む乳児持つ五感

かずら橋前行く人の揺れ合わず

無人駅送った人は嫁に行く

句をひねる惚け防止にはなつてゐる

五月の憂い

松江市 川本 畔

後遺症胸の痛みへ雨が降る
濡れながら届けてくれたお友達
ふところの深さ見せない笑顔あり
全盛期たしかにあった花模様
すべて皆ふるさと遠く胸に閉す

松江市 松本 知恵子

一周忌姑との辛さもう忘れ
大丈夫姑が言う遺影の不思議
被爆地にオバマが来ると大ニュース
次世紀に意味ありオバマヒロシマに
たけのこの勢い僕と比べるな

松江市 松本文子

一番先に玄関開けるのはわたし
人は人私は私風よ吹け
雑草の俣で嬉しいこともある
食い意地は戦後の飢餓を耐えたから
何故死んだ湖の荒れ見つづける

出雲市 伊藤 玲子

蟹のハサミ借りて切りたい紐がある
お返事は水の澄むのを待ってから
泡吹いて言葉の乱れ嘆く蟹
森のたより川のたよりをする虫
上辺だけ見るなと山に教えられ

出雲市 小白金 房子

雨傘をしつとり濡らす花の寺
柳行李嫁したわたしも戦中派
姫鏡台拭いて嫁がぬ娘を案じ
祭典の幟主の名が残る(四月二十九日)
酒もよし新茶又よし花の下

出雲市 岸 桂子

よく弾む毬で秘めごと告げられず
君が代を歌うわたしは日本人
土砂降りもあつた轍を振り返る
香焚いて仏と長い話する
波はいたずら捨てたい物を打ち寄せる

出雲市 多久和 敬子

重い口開けば心軽くなる
ライバルもやがてまあるい石になる
次々と孫に抜かれて笑い皺
アルバムの昭和の家族笑つてる
招かれて論吉何枚包もうか

雲南市 松本 昌

預金ゼロ悲しき我が家の危機管理
パソコン・スマホ昭和ひと桁遠くなり
寂しさがジンと来ました過疎の駅
もう一皮むけて欲しいな公務員
また謝罪不正が続く日本だ

仏様今日は新茶と豆ご飯

岡山市 池田 たか子

神様の絵の具が欲しい春の山

萌えるものまだありまして柿若葉

二十五時命の音がする時計

年金の都合で軽い発泡酒

岡山市 工藤 千代子

考える時間をくれる信号機

青信号続いているがきつと罨

受け入れてみれば楽しい老いること

鉛筆が折れて始まる物語

立场上筵の上も笑顔です

岡山市 丹下 凱夫

どこにでも咲くタンポポのように咲く

菖蒲湯やとくに長湯がしたくなる

裏声も地声もかわらない子山羊

蛭狩りマムシ注意と書いてある

6Bで書いた駄作を積みかさね

岡山市 永見 心咲

青虫に三ツ星もらう自家菜園

安政柑ほどのたぐいか脳密度

筍の皮剥ぐと一途に丸くなる

パンケーキ不信の穴がふつつつと

4Bがいつしか太い杖になり

うっかりの予防のメモをまた探す

ぐずる孫僕を見てよと目が言った

味方だと思いと本音ポロリでる

血圧はやさしい声に癒される

花道の小石でいどになれたかな

広島市 岸本 清

振り返りや珍道中の半世紀

ゆつくりと歩めば知恵も湧いてくる

妻は留守ひと風呂浴びてもう一杯

正直に生きて誰にも恥じぬ背な

人間も犬もはしゃいでいる春野

竹原市 岩本 笑子

時よ止まれ孫がばあちゃん言うてくれ

ハーフです鼻高くして写真見せ

自信無い英語へ孫の日本語

長生きをしたねと孫の話など

四季廻る一年生の黄帽子

府中市 藤岡 ヒデコ

手のひらが過去の苦勞をものがたる

一途だったあのひたむきが懐かしい

大丈夫毎朝薬飲んでます

引き出しは残念ながら空っぽで

○印に向けてトキメクカレンダー

(平田実男さん、坂本加代さん、浅田隆樹さんは47頁にあります)

自選集

小島蘭幸

前 たもつ

結婚記念日忘れたふりをしていたよ
ルビー婚までの目標など立てて
父の歳は遙かに越えたほしほたる
レギュラーの背に火を見た海を見た
霧が晴れるとライバルはもういない

西 出 楓 楽

政 岡 日 枝 子

イル・ディーポ聴きつつ作句する至福
爆買いは無理でもせめて大人買い
物欲も食欲もあり前を向く
孫を待つ首がだんだん長くなる
世代の差落としどころが分からない

仁 部 四 郎

三 宅 保 州

涅槃図に猫は作意があったのか
ねずみ追う猫はゼウスの手下かな
出世して小判をかじる猫を飼う
猫の手はやはりタタでは借りられぬ
ポチとタマどっちがやきもちやきだろう

歩け歩け素敵な老いを意識する
わが娘DNAを愚痴らない
再採用校長職が空いている
年金日妻に感謝されている
川柳を趣味と割り切るものがある
家中をどんでんがえす介護一
老々介護同じ話題で日が暮れる
途切れ途切れの記憶に輝いた日など
よく響く友が笑いを持ってくる
夕陽浴び私が暮を引くのだろう
とりあえず忘れた振りで切り抜ける
誕生日覚えてくれている業者
大女優の本名知ったスキヤンダル
兎小屋から借景の海を見る
募金箱見ると入れずに居られない

宮西弥生

月下美人枯れても香り切る一夜
実印が不意に他人の顔になる
厚着する加齢に言葉のない鏡
叩くより諭すが光る「みつを」の書
居酒屋の前で仲間が指にとまる

八木千代

恩師の忌友の忌やがてわたしの忌
淡々と参ろう列にしたがつて
尋ねあくむだろうあの世も混んでいる
逢うも逢わぬも向うでは向うのルール
さすれば独りならばこのまま歩こうか

両川洋々

報復の連鎖アラームを寝付かせぬ
ポリプぐらい晩酌すれば直ぐに消え
食うための残業過労死が恐い
死に急ぐなかれ酒ならまだ飲める
浄土まで追い掛けてきた請求書

板尾岳人

滾滾と命あふれる影法師
タンポポを握りつぶして鳥となる
腹黒いメダカ聖書を読んでいる
丁髷を掴むと母に叱られる
毒舌な奴を無口にする餃子

林瑞枝

ヴィーナスの麗しさを見る山の娘に
長寿の輪抜けて昇る陽を拝む
掴もうとすると逃げてく青い鳥
腕に虹抱ける若さを借りてきた
未知数の期待を生んだ福袋

奥田みつ子

さくら散り待ってましたとつづじの朱
いちごちゃん呼べば返事が聞こえそう
押し花をすみれ色した風が撫で
菜の花もお目覚めの蝶と手をつなぐ
街角の若葉見る度笑み浮かぶ

川上大輪

分身は容姿端麗なんですが
嗽しておこうかちよつと褒めすぎた
味方にも敵にもならぬ神ほとけ
ケンケンバ怪しくなってきたバの字
トイレかな我が家のパワースポットは

小西雄々

白い道行けど面影忘れない
プライドという刺を持ち近よれぬ
大志抱き日々燦燦として暮らす
舞踏会お化けも踊り盛会へ
軍服の写真へ七〇年がすぎ

齊藤 劼

希望の芽膨らんできた庭の鉢
岩木山に拝む姿で鎌を振る
よきによきといのち噴き出てくる花野
銃口よ争いごとはもうよそう
参拝の記念にもらう花の種

新家 完司

健さんの残像がある雲の峰
神さまを待ちくたびれているスマホ
難民が流れる深い深い闇
手厳しく裁かれて二日酔い
ドジ虫がDNAの隅にいる

津守 柳伸

招待を受ける至福の宿選び
神仏に祈る火の国活断層
三拍子揃い過激な言葉尻
颯爽と若葉に映えるピクニック
近ければお味見いかが豆ごはん

都倉 求芽

鯉のぼり見ることもなし京も過疎
なに食わぬ顔で修正液乾く
ネクタイがみなからまつたままハンガー
湿布貼る箇所が見えない届かない
花だけが部屋を明るく話す赤

土橋 螢

生かされて生きる男の黒い影
芸術の心を癒す墨をする
わたくしを洗うと黒い汁がでる
惜しまれて死ぬ武士道を知っている
八十歳の傘に寿命がつかまとう



(つづき)

幸せはいつも静かに待機する
勝ちゲーム新聞を待つ朝三時
通販に元氣と若さ強いられる
分身のスマホご機嫌斜めです
(前月分)岩国市 上村 夢香

第155回
大阪川柳の会

日時 8月3日(水) 午後1時開場・午後2時締切
会場 大阪市立総合生涯学習センター 第一研修室
宿題と選者(各題2句・席題なし)

△「溝」 尾上八重
△「波」 大西泰世
△「急ぐ」 川端一歩
△「ネットク」 森中恵美子

会費 1000円
欠席投句 8月2日まで 会員に限る

〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706
本田 智彦宛

川柳塔

(つづき)

宇部市 平 田 実 男

車椅子押してるほうも要介護

政官財絆はみんな私利私欲

曾孫へも脛かじらせる好好爺

ライバルのお蔭もあつて八十路坂

道草が世間を広く広くする

防府市 坂 本 加 代

モニタリング騙し撮り見て笑えない

雁首を揃えて首脳税逃れ

邪魔をするだけの野党は見限られ

近頃はシングルマザー其処かしこ

止められぬ君の命は神のもの

(前月号) 弘前市 浅 田 隆 樹

酒飲みは酒飲むという健康法

晩酌を買いに日課の三千歩

濃いお茶で湯呑み茶碗も渋さ増す

喧騒を遠く椿も咲いていた

淡雪にまだ風邪癒えぬ雪囲い

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

戦争の足音がする妻よ子よ

アメリカの盾に子供をしたくない

表札は俺の名前か確かめる

裏長屋 鼠小僧を待っている

妻がこう言っていますという意見

抜けた歯を捨てる男も忘れよう

裏方がそつと覗いた客の入り

気をつけや物を乗せたら落ちる棚

本物を観てきたはなしマチス展

老夫婦なすびはいつも漬かりすぎ

寄せ書きの隅に逢いたい人がいる

お茶配ってるのが今日の主役です

口重くヒロシマの夏いくたびぞ

刑務所でないがトビタの高い塀

上役へわたしの影がお辞儀する

囑託の椅子はガタガタ音がする

川柳塔の

川柳讃歌

139

木津川 計

同居するまでは満点だった嫁

坂本 加代

詩人・天野忠の「首つり」である。「うち
の嫁はんが／あれはいかん／これしてもろて
もいけまへん言うて／いじめてはっかりいや
はりますささい／もうこうなったら／あて
首くくって死ぬかもしれへんえ／てんごやお
へんえ／そしたらあんた／へえー そうどす
か／そんならそうおしやしたらよろしおすが
な／どうぞお好きなようにどうぞ／まあこう
どすねん……。」加代さん、井上草一の「京
都ざらい」が売れるのも分かりますねえ。

もう会えぬかも知れないがまた会おう

早川 遡行

その天野忠さんは七十八歳の年の暮れ「生
れて初めてへたへたへたと／大地にへたばつ
た／両手をついて／足の膝から下が消えて行
くのを見た／スキップして遊んでいた子供が
チラとこちらを見た／走って行った家から人

が出てきて／大地にしがみついている私を抱
き起こした／「どうしました」／冷静に私は
答えた／「足が逃げました」。詩「老衰」である。
僕は八十。へたばりはしないまでもステッキ
に頼る。すると遡行さん、一年も先の約束は、
さて、いたしたものとどうかと……。

私抜けます一億総活躍

竹村 紀の治

「阿蘇も好き熊本城も好きだけどこれ以上
はもう頑張れないよ」と熊本の歌人が朝日歌
壇に。日本人は「頑張れ」の好きな国民で「前
畑頑張れ」の河西三省アナは「頑張れ」を36
回繰り返した。「頑張れと言うから手術恐く
なる」のも構わず「頑張れ、頑張れ」だから
もう恐いのなんの。大体に政権が「国民精神
総動員」や「一億一心」いままた「一億総活躍」
などと叫ぶときは破滅に向かう時代だ。紀の
治さんはどんな考え故だろう。

今か今かやと抜かれてホツとする

山下 凱柳

判らない。どういう情景か全くわからない。
マラソンランナーがグラウンドでああっ抜
かれたあーっで「ホツとするか」。出世競争
の昇進で抜かれても同様だ。もしかすると、
ひたたくりや自動車盗など街頭犯罪ワースト
ワンの大阪が東京に抜かれて「ホツとする」

のおおかしな話だ。それに「今か今か」の緊
迫もあるまい。やっぱり判らない。一体何に
抜かれ……、あつ！ 歯を抜かれたのか？

棺に何を入れたのかと聞く女房

成田 雨奇

「銭形平次」で人気を集めた大川橋蔵は
五十五歳で亡くなった。結腸ガンだった。棺
には平次用の十手と投げ銭が入られた。

小泉八雲の怪談「破約」は危篤の妻が侍の
夫に頼む。「私の亡骸は裏庭の梅の木の下に
葬り、棺には鈴を一つ入れて下さい」と。妻
の死後、夫は十七歳の若妻と再婚。夫がお城
に夜勤の夜、どこからともなくチリンチリン
と鈴の音が聞こえ先妻の幽霊が……。雨奇さ
ん、「鈴を」と言うてはなりません。

清貧と言っても貧乏と違わない

坂東 倫子

「月天心貧しき町を通りけり」の蕪村を評
して萩原朔太郎は「人生への或る涙ぐましい
思慕の情と、或るやるせない寂寥とである」
と。評論家・中野孝次は「蕪村」自身が「貧
しき町」に住んでいて、しかも心では天空に
澄む月とともにそれを眺めている」離俗のひ
とであると。倫子さんは清貧と貧乏を区別し
ている。貧乏を清貧と言ってもなりません。

〔上方芸能〕発行人

新川柳鑑賞 (53)

麻生 路郎

株少し持つて哀れや気が小さし

(矢寸志)

僅かな株を持つて、夕刊にかじりついて
いる人種を嘲笑した句である。少し変動が
あつても、川釣に浮きがビクビク動いたほ
どに感じて大騒ぎするのを見て憫笑したの
である。世の中には株で儲けたいと云う人
間がかなりウヨウヨしているが、大ていは
僅かな株を持つてビクビクしているのでは
ある。皮肉られても返えず言葉はないであ
らう。

課長いくらだしたと幹事また聞かれ

(谷 水)

慶弔のつなぎか、慰安会のつなぎかであ
らう。例によつて幹事がやつて来ると、
「課長はいくら出した? コレか、ソレと
もコレか」と指を出して訊く。

「コレだ」

と幹事も指で答える。

「タツタ、それだけか。」

と、ケチだなアという顔をする。
こんな問答の繰り返される情景をうまく
キヤッチしている。

下五の「また聞かれ」の「また」がよく
利いている。

やつと借れたのに嬉しさがグツと来ず

(多久志)

事業資金らしい。銀行へ泣きついて、やつ
と借れたので、ホットしたことはしたが、
あんなに走り廻ったり、苦慮したりした割
に、嬉しさがこみあげて来なかつたとい
うのである。事業家心理を巧みに描出した句
だ。

金使こた程に売名出来ていず

(庸 佐)

金が出来ると名が欲しくなる。そこで金
を使つて売名をする。しかし、金を使つた
割には名が売れない。変な連中に担がれて、
仕事らしい仕事はせずに肩書きばかりふえ
るからである。

選挙があると立候補させられる。これも
金を撒いた割には票が入らない。と云つた
実質のともなわな売名家を諷した句とし
て面白い。

買いました下がりました五百株株主

(妄 夢)

粒々辛苦で貯めた金、株でも買つておい
たらと買ったところが、値下がりが。

「だから株なんか買ったつてダメよと
云つたじゃないの」

と細君から皮肉られて涙面をつくつてい
るのが目に見えるようだ。

格調がきびきびして五百株の小株主
の驚いたさまが躍如としている。

記念碑を拝借彼女寫しとき

(ひか平)

なるほど、そんなこともあると思わさ
れる句である。

「そこへ一寸立つて」

「もういいの?」

「イヤ、もう一枚」

と云っている声が聞こえて来そうな句であ
る。この句からは若さというものを感じさ
せられる。

お父さん僕の足だけ寫しなや

(東 岸)

ネコも杓子もカメラを持つ世の中で、芸
術が何であるかも判らないお父さんがカ
メラを持つ一人となり、先ず被写体に子ど
もを選んだのである。

「写してやるから、そこへ立つとれ」
と云つと、

「お父さん、足だけ寫しなや」

と、こどもから、からかわれたのである。

「足だけ寫しなや」

に自然にユーモア味がにじみ出ている。



川上大輪選

岡山県 紫 しめの

出る杭もやがて打たれてオジサンに
ふるさとが重荷になって飛び立てず
目標はあのパーキンと決めている

ボクよりも犬が知ってる田舎道
エルニーニョラニーニャ日本の春消える
遺言にネット保険のパスワード

松山市 柳 田 かおる

役どころちようどバセリの位置ぐらい
目に見えぬ所を評価してほしい
反対の声を束ねて山動く

多機能へ使いこなせたのは一つ
花を愛で風と遊んでロスタイム
祝盃をあげているのはキリギリス

尼崎市 清 水 久美子

聞き役に徹して滑ることが無い
阪神が負けるとしよげるうちの猫
タミ声の蛙に出会う青田道

仕切り屋の異名取ってる口八丁
辻斬りのような仕打ちの暴走車
目に青葉まだまだ続く花粉症

三原市 鴨 田 昭 紀

損得の秤をいつも持ち歩く
前列に合わせる主義のない歩幅
母さんが言うから全部信じよう

営業の厳しさを知る靴の底
心無いひと言湯豆腐が冷める
穏やかな視線の先にある野心

横浜市 巖 田 かず枝

元気です被災地からの思いやり
心配をかけまいとする空元氣
骨粗鬆取り扱いに要注意

リウマチを卒業する日まだですか
日本語がままにならない時がある
痛み止め笑いの粉をかけて飲む

岡山県 山 縣 のぶ子

ウグイスの下手な一声座禅組む
だれだつて咲く位置がある割烹着
あっぱれを一日ひとつ問う鏡
放されて一気に飛んだ青リンド
一徹の壁も横道知つている
そろそろと一番あとにいる自由

貝塚市 吉 道 あかね

クルーズの旅で十日のシンデレラ
毎日が鯛やヒラメの飛鳥Ⅱ
船旅でゆったり寿命延びて来る
体力の貯金こまめに動いてる
日に一度私の顔を確かめる
熊本に申し訳ない羽根布団

大阪市 平 井 美智子

たつぷりと借りてチビチビ返す恩
悪口をいっぱい書いてある日記
言い勝つて芯あるご飯食べている
まあいいか尻尾を切れば済む話
ほがらかに笑う女で淋しがり
包み紙変えて私が新しい

西宮市 株 元 玲 子

当り前が消えそうな世に生きている
どちらを向いても涙の物語
何はともあれ生きていかねば始まらぬ

小さな幸せあなたと分かち合う
屋根の上やさしい声の鳩二匹
ほんの少し若返りたい背伸びする

山口市 増 田 めだか

孫も来ぬ雨の一日不整脈
花畑草と競争する私
たくましい妻が居るから今の僕
断捨離に父ちゃんかろうじて残る
風になり五月の空を泳ぐ俺
物忘れ薬飲んだか飲まぬのか

尾道市 小 畑 宣 之

大声と陽気な声が宝物
地球儀を回してチェック大相撲
命がけなんて軽くは言わないで
融通も機転も利かず野暮で生き
根性をつつかい棒に今日も生き
あり余る知識あれども知恵はなし

小野市 田 中 辰 夫

政治屋の銭の常識非常識
辛党が甘党になる孫の笑み
過疎になる九連休の大都会
国内の名所知らないパスポート
昭和の常識平成に色褪せ
遊園地老いの居場所はベンチだけ

倉吉市 大羽雄大

一日に一句腕組みして暮れる
前髪を上げればやはり母親似
蟻んこが三匹甘いものに蓋
回る寿司見てるだけでも楽しめる
たまに乗るバス料金を握りしめ

倉吉市 岡崎美知江

すんなりと別れる事の出来ぬ農
春風にのって花粉も調子づく
口実を言う度言葉浮いてくる
揺れているハート貴方にとどかない
去る者は日々に疎しと暮れなずむ

境港市 中井虎尾

ジョーカーかキングになるかトランプ氏
見上げれば見て見てと笑む丸い月
ああそうか今日はさびしい休刊日
余市沖ローソク岩は少しとけ
気に入った安値の服は俺に合う

米子市 野川宣子

マドンナに近づきたくて悪さする
マドンナと呼ばれた人も腰屈め
父と子のキャッチボールに球弾む
十連休も年金暮し踊れない
終活の文字やたら目につく木の芽どき

米子市 見山温子

空財布孫の誘いもおこことわり
不眠症も里の床では夢を見る
ウォーキング一人二人と追いこされ
娘へ荷物タラの芽わらび春送る
介護終え介護される身せまりくる

松江市 中筋弘充

エスカレーター付いたら渡る歩道橋
連休に家を空けたい世間体
ゴールデンウィーク田植えに来てと待つ棚田
失敗を恐れぬ虎にする兄貴
日本の恥かも女性専用車

雲南市 菅田かつ子

行き先を探して思案の蝸牛
アイラブユーあの日もつつじ咲いていた
ハミングで小鳥と今朝の物干場
老いかしら些細な事が気にかかり
親友の哀れあんたはどなたはん

岡山県 高岡茂子

階段を上ってみるかヒザに聞く
強がり胸の内では悔いている
弱いので神も仏も頼っている
一言のおいしかったを待つプリン
チョコッピリは必要とされ八十路生き

岡山市 藤成操江

振り向けば十年前がすぐそこに

過ぎし日はどうあれ今を手で囲う

完璧の半分程を心得る

する事をいつも探している両手

シグナルは出不精足に喝いれる

瀬戸内市 東 横 ますみ

雲ふわり恋の予感が弾みだす

野に咲いた花には怖いものがない

咲ききって女一人という余白

試されているのか背なが寒すぎる

サヨナラを言えば曇ってくる鏡

竹原市 若年幸子

あの時はあの時私若かった

露地野菜美人揃いの道の駅

卑弥呼の声残る埴輪の耳飾り

迷い道後戻りするのでもいいかなと

一期一会切札はここで出す

山口市 青木隆子

この家で初めて聞いたホーホケキヨ

わらび取り春の終わりをいとおしむ

採め事も自分のせいにして始末

前向きに考えやっと思を閉じる

友恨み友を許して夜が明ける

山口市 中前幸子

仮面を落とした晩春のシナリオ

含羞の微笑みがある埴輪の目

満天の星を繋いだ点と線

嘘つきの鼻が曲がってきたようだ

ど忘れが多くて脇道に逸れる

岩国市 上村夢香

真実を知らないことも選択肢

身も心も解放されて美容院

くまモンの元気印に期待する

活断層の上に私も暮らす日々

想い出を断捨離外は暗くなる

宇部市 高山清子

強がりの武器が次第にさびてくる

若返るはずの笑顔でしわが増え

生きていく力をくれる好奇心

肩書きが取れて気ままに出る本音

物探しに時間つぶれる老い卒業

松山市 栗田忠士

人情があるからロボットに負ける

勲章は無いが本気で生きてきた

頑張れと言わぬ優しさだつてある

あくせくとするから呆けるひまが無い

核兵器持つなど保有国が言う

松山市 郷田みや

幸せの中で普段を抱き締める
言わないでおこうピエロが笑うから
踏み台に乗ろうか背伸びをしようか
許されるような気がする独り言
思い出を並び替えてもいつも母

今治市 渡邊伊津志

モナリザより妻の微笑はもつと謎
猫じゃらし笑い上手で揺れ上手
字が下手と言う意味ですよ味がある
大噓ややを泣かせてしまいいけり
目的は損得だけのまつりごと

大洲市 花岡順子

遠足の空は迷っているらしい
鶯も桜の咲いたころに鳴く
足元の狂う怖さを知っている
家族つていいなあ傍にいるだけで
明日は雨蟻の動きが忙しない

西予市 西田美恵子

こだわりはこだわりとして好き嫌い
また明日そんな言葉が大好きで
キッチンとは言えない母の台所
包み隠さず全部喋ってからの悔い
自我一つ通す重たい深呼吸

佐賀県 真島久美子

馬鹿なのか馬鹿の振りかは見抜いてね
黒を着てカラスと和解するつもり
ひらがなとカタカナどこにいる私
ゆるゆるの服の隙間を抜ける夏
恋はただ薄紫になっただけ

山鹿市 中山好打

震度七天地ゆるがし死を覚悟
安全と鼓舞しておいて総くずれ
間一髪命から逃げまどう
助かりしこの先めどがたてやせぬ
この世には楽天地などありはせず

山鹿市 前田幸子

絆です心配りの義援金
声かけてあげたい私も身障者
無農薬ネギ一本も被災地へ
デイサービス今日も穏やか感謝です
青空も雨も凌げぬ被災地は

山鹿市 柳田白沙

ボケたふり言いほうだいのこの快感
格好いい人生を演じこけた人
勘違い思わせふりとやさしさに
今日もまた太陽を見る生きている
震度七火の国魂盾にする

略装に抵抗しつつかールビズ

塩竈市 木田 比呂朗

節電と熱中症のこわい夏

真夏日とビアガーデンのお呼び出し

缶ビールジュースと競う冷蔵庫

自由化の電気オプシオン売りにくる

横浜市 川 島 良 子

スマホという魔法にハマる宇宙人

敵味方隣り合せて和を保つ

枯れ葉マークどうぞ逆走せぬように

バカだなと思うエライとも思う

成績は二の次こころ優しい子

静岡市 渡 辺 芳 子

洗い流せ身体と心にためた垢

身の丈に合わせて生きるむずかしさ

いい笑顔たやさず老後送りたい

サクラ散る出征学徒の顔浮かぶ

花イカダ花の行く末幸せに

豊橋市 藤 田 千 休

味噌っ歯もやがて入れ歯にバトンパス

奢りだと聞いて遠慮はしない主義

手に余る余白を埋める些事雑事

恋せよと枯木に灰を撒いてみる

節穴へ鳩の目鷹の目世間の目

晴れと雨それぞれにある好きな曲

大阪府 神 野 千 恵 子

似合わない服がひときわ目立ってる

無口だと言われる人の眼が多弁

振り返ることもできない怠惰な日

ホで笑う人が一歩も譲らない

大阪市 柴 本 ば っ っ

遊びなさいそれが若さの秘訣だよ

夜遊びの減った分だけひげが伸び

安近短上手に遊ぶ妻の知恵

若づくりもう限界だ腰曲る

耳遠くなつて遊びも疲れ気味

大阪市 高 杉 力

さくら藤バラと卒寿の母連れて

錦織を生で観ている不眠症

返信を切らずに待っているライン

腕組んで嘘も絡めた御堂筋

友達でいようとと言われる恋

大阪市 橋 本 典 子

野遊びを嫌がるペット都会っ子

ミステリー肝心な所で寝てしまう

車椅子木漏れ日揺れる母揺れる

猛威にも絆と知恵で明日を呼ぶ

一歩引く年を重ねて気づいた日

堺市 梅木澄空

河内長野市 穂口正子

かあさんにキラキラしゃべるランドセル
手の平でしばらく愛でてんとう虫
すつとしたまた聴いてねと友帰る

目に宿るこの悲しみは誰のせい
無いものか揺れる心の処方箋
決めかねるとどちらに転ぶこの言葉

軽率に安請け合ひし気が滅入る
急かされてATMがなお苦手

そぎ落とし残る命の切なさよ
女から省かれたかもピラが無視

堺市 羽田野洋介

高槻市 三谷白黒

体重計納得できず二度三度
いいムードなんて言ってるうちが華

母の日だ文句言うのは止めとこう
朝ドラに妻の若き日重ね観る
三分のラジオ体操で息が切れ

無意識に止めた目覚し恨めしく
食べて飲み歌いストレス解き放つ

天国は金持だけにあるようだ
妻よりも毛布一枚多くする

池田市 上山堅坊

豊中市 荒巻夢

雑魚なりにきりりと泳ぐ老いの日々
月明かり笛が聞こえるきつと亡妻

コンビニからおでんが消えて春が来た
言い訳を用意して着る赤い服
繰り返し同じところで泣くドラマ

喜怒哀楽抑えてもでる声の色
アンケートおまけの丸を差し上げる

逝った子の泣き声に覚め春浅し
格差社会金の棺も出てくるか

泉津市 助川和美

富田林市 小出修三

お喋りに誰か来てよとかしわ餅
本棚に葉挟んだまま埃

片意地を張らず助けを待つ暮し
消しゴムで擦ってみたい顔の染み
欲しいのは妻の愛想と甘い汁

餃子を包む親子の会話聴く夕日
母さんの飯が美味くてまだ独り

週一の男の料理高くつく
着信のメール気になる土弄り

手を繋ぐこともないけど夫婦です

寝屋川市 岡本 勲

援助した子たちはみんな村を捨て
しんどいだけが残る上司のお説教
おいしさをテンポにのせて売るバナナ
祝杯をあげて内定とり消され
ほしいのはうしろ姿を見る鏡

箕面市 中山 春代

近道を許してあげる塀の猫
ゴミの日のバトルカラスに二連敗
わたくしの声は拾わぬ夫の耳
投げ出した足を謝る忌のお膳
雨の日は許してもらおう八千歩

神戸市 玄 番 美恵子

新緑のいいとこばかり狙う虫
ウイニングボールは母の手に渡る
熊本城思いが募る旅日記
連休を涙の事故が駆け抜ける
締切りへやつとやる気の顔になる

尼崎市 永田 紀 恵

生き過ぎて冥土のみやげ持ち切れぬ
愛おしい命支えた手術跡
つまみ喰いお毒見役とすまし顔
カラオケで不倫を唄いうさ晴らす
徒花と言われても咲く花の意地

尼崎市 藤田 雪菜

男用時計をそつと嵌めてみる
この家に一生住んで灰になる
あくびしてたミシンを使い帽子縫う
気配りの言葉空気が澄んでくる
美人画に栄養たつぷり貰う日

伊丹市 平井 富夫

種初に話しかけます野良仕事
髪が減り帽子の数が増えました
有りませんしわの数ほど貯えは
貯える老後按じる老い二人
念のため菓子折り底を確かめる

宝塚市 太田 としお

生きているただそれだけでありがたい
人の道外すと人は人でない
生きている人に迷惑掛けながら
知り合いはいっぱいいても友がない
ボケたこと知ってはるからボケじゃない

宝塚市 丸山 孔 一

行けとも言わず行くなとも言わず
凜と咲き散るは辛夷の身の哀れ
本心に脳トレなのか牌握る
CDにまだB面と君は言う
震災のテレビ観ながらお茶ごめん

南あわじ市 萩原狸月

神獸鏡卑弥呼映したのが自慢
鏡など見るから歳を思い出す
こんなにも善人が居たボランティア
踊り場で指令待ってる消費税
エアコンが脇役にした扇風機

香芝市 山下純子

順番と逃げる術なく役を持つ
強気だな弱味握っている証拠
愛つまる袋で育つカンガルー
髭剃って入学式に母お供
他人事だからいい知恵わいてくる

和歌山県 森下よりこ

自慢話の数々あの人も老いて
自家製の花束墓の数の分
姉よりも美人に生まれたのが不運
思い出しては手足動かす時間待ち
ひたむきに歩くしかないかたつむり

和歌山県 北原昭枝

奥の手を出しそびれてる蝸牛
踏ん張って赤い鼻緒が耐えた日々
捨て石がやがては風いでいる水面
あと少し待てば良かった遠花火
気が付けば夫婦の味が皿にある

和歌山県 倉橋悦子

万が一いつでも起こりうる時代
カレンダー通りに動く小商い
母にない土日祝日ひとり旅
満月が今宵わたしをストーカー
打てば響くそんなご無理は言えませぬ

和歌山県 平田元三

忘れてただけと言ひ合うポケ夫婦
夏こそその味は胡瓜の生かじり
取材するアナも苦になるゴミ屋敷
外人の浴衣びったり石畳
新幹線延びて日本を狭くする

岩出市 村中悦男

淋しさに勝とうと自問自答する
泥んこになって心を磨く子等
失せものさがしもしやもしやとごみ袋
みか月に腰かけたいと言うロマン
少しか月本音が愚痴に化けました

紀の川市 山東日出男

窓を開けよういい風が吹いてきた
生きているから時々噴火するのです
桜餅に嫉妬している草団子
コンビニと百均で済む暮らしぶり
骨休めの合間を縫ってする仕事

鳥取県 飯野 菖子
足腰をリースでつなく老いの日々

いい朝に生きる匂いは一万歩
温かい家族の匂いする夕餉
働いて働いて逝く夢の国

鳥取県 児玉 規雄

母看取る妻の背中に手を合わす
母の介護妻は仏の顔になる

僕と妻母の脳から消されてる

ふわふわと白寿の母は雲の上

鳥取県 下田 茂登子

健康食品庭木の枯れに効くと言う

断捨離をしながら服をもらつてる

癒しとはビール一本飲んで寝る

医者通い一週間が詰めてあり

鳥取県 田口 清帆

幸せはあなたの心が決めるもの

輝いて生きる秘訣は情熱で

気楽では無いと分かったひとりもの

若者に政治教えた安保法

鳥取県 橋谷 静江

愛情を包んで渡す子供の日

狭い部屋夫婦居るのに丁度よい

気苦労がつぎつぎ後を追つてくる

もやもやは畑へ出たら楽になる

鳥取市 大前 安子

長椅子の一人となって世間知る

顔洗う思い出すこと多くなり

鬼の面裏は涙の塩が浮く

山の影崩して植える田は終わる

鳥取市 奥田 由美

OLの鏡にされる社員歴

片手のる男一人のゴミ袋

二十年残るローンも子に贈る

ストも無い社員二人の町工場

鳥取市 田中天 翔

何事も今よりちよつと上目指す

何故だろう私ピエロが嵌り役

愛犬にどうしたのかと見つめられ

春の野に家計支えるこごみ採り

鳥取市 津村 律子

貰ってもあげても嬉し福袋

ババシャツがまだまだ離せない五月

どっこいしょ時間かかるも立てりやいい

うるたえてならぬ私も後期高齢

倉吉市 田中 紀美恵

ごめんねと一言いえぬ心空し

子を亡くし生きる空しさ天が知る

タンス預金利子はつかぬが論吉だき

ふつくら顔見てるだけで笑顔出る

倉吉市 中村 毅

曖昧な返事で役を宛がわれ
母の日が主役父の日は脇役
意地張ってシルバースhirt遠慮する
経済は踊らず総理だけ踊る

倉吉市 堀 かずこ

失ってはじめて気づく深い愛
迷い道夜汽車に乗って捜します
見栄を張る嘘で固めて正当化
さわやかな五月の風にうたが出る

米子市 生田 和之

半目の負けが重なる運のなさ
ガラケーを持ってメモ帳持たず詠む
春雨に新聞紙まで合羽着せ
父母の齢越えて五体にガタが来る

米子市 川本 美津子

川柳を始めて脳が再稼働
抱っこして猫に悩みを打ちあける
お帰りを夫に言わず猫に言う
車イスハグして載せる妻介護

米子市 田村 周子

日本列島どこにも腰はおろされぬ
目はかすみ腰は痛むがなお歩く
梅雨近し雨の音にも恐ろしや
血糖値とのたたかい続く根くらべ

米子市 永井 三津子

転ぶ度明日を信じて立ち上がる
子が眠る弱い母でも信じじり
顔よりも男らしさに惚れました
チューリップ午後ともなれば大欠伸

松江市 相見 柳歩

みな入る君に関することならば
恋という事件夜な夜な手をつなぐ
来世でも縁を結んでくれますか
ナマケモノ電波時計が怒りだす

松江市 福岡 左余

歎休めうぐいすの声真似てみる
老いはせぬ今を励ます歎振るう
消えはせぬあの檄亡父の遺訓だぞ
今日の絵巻終りを告げるお茶する

松江市 山根 邦代

震災に心痛めてみるテレビ
雑草と見捨てないでと花の色
かと言つてのめり込む程才もなし
エコタワシ自慢のようにさし上げる

出雲市 黒目 英男

根を張って夢の実現願つてる
追い風が世なおしの夢叶えそう
想い出が明日あさつてを勇氣づけ
川柳と出合い人生花が咲く

瀬戸内市 片島秀月

新聞を広げて朝が過ぎて行く
一步二歩目指す老いにも夢はある
五七五磨きあげれば脳に艶
川柳は吾を育てる肥やしとす

瀬戸内市 宮宅比佐恵

深傷に悔いの涙が乾かない
散り急ぐことはないよと花の意地
とび入りで踊った頃がなつかしい
主婦は卒気ままに余生の風にのる

玉野市 片岡富子

びびりながら抜歯の前に食べすぎた
久しぶり見事変わっていた仲間
初同居寄り添うプラン立てる友
怒りそうになると宥める友が側

尾道市 日谷寛

罪と罰にんげん力が試される
にんげん味比べいい人悪い人
あたたかい人だことばに影がない
にんげんが持つ愛と言う底力

竹原市 土井輝恵

寝たきりへ介護の知恵をプラスする
ポツクリ死羨む声が高過ぎる
ママゴトに夫婦の仲を暴かれる
お隣が連休予定聞いてくる

竹原市 六田半徳

カラス二羽ごみ収集の見物に
ふる里の山彦の声みどり色
水分をシツカリとれと医師の言
赤ヘルよ交流戦もしつかりと

府中市 岸田武

砲弾のような竹の子いただいた
掛け声をかけて湯を出る爺である
体じゅう切符を探す情けなさ
意気ごんだ日はバチンコ負けてくる

府中市 田辺和子

朝ほらけ床の名句は消えてった
病室へ手の平ほどの窓の風
めだか飼うために退院申し出る
相棒のいる間気付かぬ荷の重さ

三次市 伊藤寿子

律儀にも咲くマロニエと語る午後
残された人生悔いなく生きたいな
大嫌いな粥がこんなに美味いとは
サザエさん入院我が家灯が消える

下松市 有海静枝

すでに風ぎ嵐みじんも見せぬ海
完璧なルージュ綺麗な嘘を吐く
日の当り具合で育つ経験値
交われる価値観探り合ってお茶

松山市 近藤修二

円熟期ジャンプのつもり一歩のみ
する仕草ポーズをつける楽道家
フジの花視線の先に着い空
アカペラにハモるコーラス高齢者

松山市 神野きつこ

連休に掃除洗濯墓参り
喧嘩して勝ち負けよりも自己嫌悪
子が育ち母の独立記念日だ
年をとる一人称でまた歩く

高知市 三谷松太郎

お早うさんチンにルンバにお仏壇
役御免マル秘抱えてただの人
半生の発掘調査してみよか
爆発の一瞬前の虫の声

福岡県 本田さくら

台所生きる力を生むところ
主なき庭どこかさびしくつつじ咲く
被災地に想いを馳せる風強し
介護不要だからダンベル欠かさない

北九州市 小松紀子

眠ろうとあせってしまいう不眠症
健康法良いよと聞けば試そうか
とは言えぬお陰さまでと電話口
ふるりの地震災害胸痛む

佐賀県 門井孝

年寄りには早寝早起き口出さず
野菜より大きくはびこる名なし草
肩の荷が軽くはならぬ親の愛
なぜ生きる自問自答の七十路

佐賀市 清水園實

庭に柿植えて八年夢に生く
俺に似ず息子妻似で好男子
血圧も世間と同じままならず
ボケ防止川柳ひねり今日も生き

唐津市 岩崎實

診察で孫子の自慢してしまい
どなたですみのちゃんではと尋ねられ
三三五五からすが帰る暮れの空
ゆっくりと残りの人生送りたい

唐津市 吉富節子

青蛙草かきわけて御挨拶
体に良い聞いて実行続かない
友寄れば生きる話で盛り上がる
あの人がまさか本当にそうだった

札幌市 斉藤宏子

独り身に家族写真のおせつかい
花盛り華麗に桜舞いを見せ
哀しみを春の微風に乗せてやる
過去を脱ぐきれいになった明日がある

札幌市 富永恵子

まるき橋わたり安堵のにぎり飯

手のひらに宿る季節の花言葉

体験をほこりと思う靴の底

まだ未熟豊かな川に戻りたい

登別市 小林碧水

見ないふりばかりしてきたのに眼科

暦との約束ですと梅桜

棘でなく個性とって下されば

少し悪腐った方を友達に

弘前市 工藤京子

一九七一年沖繩からの留学生

一九七二年返還された沖繩が

紅色の仏桑華咲く沖繩に

平和ボケしてはおられぬ戦後ツ子

弘前市 高森一吞

古希過ぎし絡まる糸を包み込む

朧月遊び心が狂い出す

孫が折るだまし舟でも乗ってみる

桜散りあと幾度かの悔悟録

弘前市 吉川ひとし

活断層顔を出すなよもう二度と

美人なら買わなくていい化粧品

ユルキヤラが栄える街に根をおろす

棺から遺族へ届く懺悔録

男鹿市 伊藤のぶよし

台本の無い揺れが泣かせる地震国

決心がついたようだな弾む声

まだまだと余所見を止めぬ木偶の坊

渦巻く妬心静寂なんて夢の夢

つくば市 嶋本喬

子は終り夫育てが生き甲斐に

高齢化犬トモ減って猫派へと

老後にも厄年のいる長寿国

天守閣バスから続く蟻の列

上尾市 中村伸子

もうどこも逃げようがない地震国

エンブレムもう何ごともないように

市松の模様キリリと和の極致

痛み止め長々と効く副作用

松戸市 山下明子

初鯉今年も舌を唸らせる

カタカナで好きと背中に初デート

待ちぼうけ来ぬと知りつつもろい恋

叱られて蛇口にむかいひとり言

東京都 井上つよし

老いらくの恋過ぎし日を取り戻す

冷やかしを聞けば聞くほど熱くなり

古米でもお焦げにすれば香ばしい

優勝がするりと逃げたとこぼし

東京都 高岡 弥生

沼津市 鳥沢 無午

思う事現実になる素晴らしき
若作り若者いたら出来ないよ
宅配で私の部屋着ばれられに
入社式覗いて我が子確かめる

八王子市 川名 洋子

遠距離介護青かった恋も乗せ
終電車表の顔をポイと捨て
ぶれず生き脚光浴びることもなく
縄電車ひとりずつ抜け独りぼち

横浜市 長島 亜希子

私の夫だ背筋伸ばしてね

日本の出来事ですか橋落下

大の字に寝転がりたい春の野辺

富士山にも歓迎された花の旅

伊勢原市 小田 幸子

今日もまた犬かたわらで丸くなり
任せたぞバアバの守りに燃える犬
病み上がり胸の上下に目をこらす
夜桜のあやしい色に胸さわぐ

佐渡市 高野 不二

人口減俺には出来る事がない
杖を忘れた時はさっさと歩いてる
ついでやるのを待ってない親子酒
母の日もチョッピリ期待してる父

平凡に生きる努力の難しき
人は皆病んでることに気づけない
辛いとき涙を流す佛様
北杜夫読んで腕組む精神科

江南市 脇田 雅美

少しずつおっくうになる身の動き
おすそ分け昔ながらの慈しみ
引き出物溜まりバザーに出している
振り向いて思い出せない今のこと

鈴鹿市 小河 柳女

踏まれても路傍の花で生きていく
ペットボトルにみんな入って出てこない
家族とは猫と仲良く暮してる
まっすぐな木少し狂ってみませんか

大阪府 小栢 こずえ

責任無い日々で日毎に呆け進む
行き先は決まっているがつい急ぐ
決心は三日坊主で終りかけ
七転び八起きをしても角だらけ

大阪府 高木 道子

閉校も尊徳像は身じろがず
足早に巡る季節の五七五
沸点の手前で閉じる鍋の蓋
幸せに満ちている様蝶二匹

大阪府 畑 中 節 子

筍が出番待つてる春の藪
枝先を選び小鳥の喋り会
播り粉木に残る山椒の香る味噌
季の移り早く高齢化に悩み

大阪市 磯 島 福貴子

ヘルメット姿頼もし土木女子
ドローンが宅配便を担うらし
スキヤンダルスクープ命週刊誌
朝ドラのヒロインいつもやり手女子

大阪市 梅 里 南 天

病院の長い廊下で風邪をひき
子燕があやしげに飛ぶ交差点
杯並べ結婚式で眠りこけ
丁か半あなたに命預けます

大阪市 大 治 重 信

泣き言を酒に薄めて一人言
婆ちゃんの風呂敷に合うエンブレム
知らぬ間に取り残されて老い孤独
デイズニーで子供一人を紛失す

枚方市 坂 本 ミヨノ

喋るだけ夢中で喋り帰る人
入院です昼寝食付き痛み付き
神参り大吉が出て悩みきえ
野球人的が狂うてつかまった

大阪市 田 中 廣 子

エレベーター捜して歩く回復期
ありがたい皆に祝われ迎えた日
旅仕度あれもこれもとまとまらず
五月晴れ川面に揺れる鯉幟

大阪市 田 中 ゆみ子

手術台ほんやり天国が見えた
こんな時やっぱり夫婦だなどと思う
今にして毒舌聞けぬ淋しさよ
えらい目におうた無礼講のあした

大阪市 平 賀 国 和

大人にも希望振り撒くランドセル
庭に来る雀親子に情移る
新緑に囲まれ映える彬の碑
天の恵み平和憲法古稀迎え

大阪市 前 川 善 之

メーデーも祝う式典形だけ
嘘だって漫画にすれば変わる笑み
人の輪は世界平和を呼ぶ炎
サミットで美食で癒やす賢鳥

大阪市 松 田 聰

自然には逆らえないと仰ぐ天
忘れたい忘れたくないあの記憶
観光地外国人についてゆく
どんよりと黄砂が風に乗って春

大阪市 宮村 満寿恵

美容院鏡の皴は見ぬふりで
川柳で惚けも少しは遠くなる
老いが来た足の重さで分かります
温泉の湯気ですっきり美人顔

大阪市 横山 里子

どくだみを引き抜く罪の匂いして
どもならんプラスのネジは空回り
芯ゆらく背骨は少し粗鬆症
灰汁抜けぬ眼鏡に曇りあるように

大阪市 吉田 知之

句作りを心の糧にして楽し
若者は徒歩も車中もスマホ中
人事異動の季節泣いたり笑ったり
ステッキをてくてくついて医者通い

堺市 近藤 治子

車窓から富士見て心日本晴れ
生きている楽し苦しい悲しいね
ありがとうずっと私のささえです
家事でできることがうれしいおばあちゃん

堺市 山崎 早苗

スマホ持ち指一本のお買い物
雑踏の中であなたのかおりして
ブルマンの香りにひたる昼下がりに
お母さん呼ばれて三人振り返る

堺市 大和 峯二

川柳を詠んでる時は天国だ
種いっぱい話題に満ちて五七五
懐の浅さ身に染み寂しいな
残る坂柳のように生きたいな

交野市 田岡 久幸

花が散る春に終止符うつように
恥知らず故に過ぎ来し月日かな
孫受験今年や破格のお賽銭
娘の苦勞こちらもおすそ分けもらい

河内長野市 森田 旅人

詰め襟を着て中学の顔になる
素直にはなれぬ十二の春のもや
胃袋がもひとつ欲しいバイキング
ごくごくと男らしさの喉仏

岸和田市 宮野 みつ江

ロゼワイングラスふたつと別れ歌
クチナシの香に忘れたい人のこと
ピーナスはシャコ貝の中昼寝中
今はまだトンネルに居て仮眠中

豊中市 荒木 郁子

歳重ね何だかんだと骨惜しみ
よく回る口ときれいな歯にみとれ
春になり母の形見の花開く
転倒の訳が分からず悔しがる

豊中市 上出 修
咲き誇るわたし見て見て通り抜け
診察日単行本は必需品

表彰の知らせをサギと勘違い
地味ですが心は熱いエンブレム

豊中市 貝塚 正子

珍しく早く帰れば邪魔にされ

一筋の飛行機雲に夢の旅

耳栓がはずれて知った妻のぐち

貴男に逢う前より上手くなった嘘

豊中市 源田 啓生

未だ若い百歳老が言うてはる

厳冬も命の糸が切れもせず

ポケットの広がる宇宙と遊んでる

瞬間を生きる人間何迷う

寝屋川市 大同 美江

せめてもと熊本産の品求む

京阪の想定地震案じつつ

電飾に光る寺院に呆然と

今日ひと日無事に終れと思う今

羽曳野市 磯本 洋一

リフォームの着物羽織った七五三

古民家で満天の星フルムーン

父母の居る幸せな帰省かな

喜寿迎え仏の知己と酒交わす

羽曳野市 中川 ひろ介
ふるさと納税礼に鱈来て腕見せる
あと戻り出来ぬ吊り橋蝸牛

避難所にくまモンが来て笑もどる
見おろせば小さき事と鯉のぼり

羽曳野市 安本 美喜

着飾りてちやぐちやぐ馬こ夏を練る

旅帰りまずは蕎麦屋を訪れる

犬の看護に早退を言い出せず

愛犬の貯金通帳名は誰に

箕面市 大浦 初音

病む友に電話で元氣おすそわけ

何をしにきたのか忘れあと戻り

つらいこと話せば少し楽になる

しなれば出来ないことと同じこと

箕面市 寺井 柳童

生き返る自主トレ終えて飲むビール

見て見ない振りして許す親ごころ

鬼は外鬼がなついて離れない

湯あがりの孫追いかけるバスタオル

八尾市 田邊 浩三

ボケ防止グラス重ねる赤ワイン

早く散る桜に焦る高齢者

車椅子杖と触れあう通り抜け

時経てば美味くなるもの腐るもの

八尾市 前田 紀雄

瘡検診疑い晴れて気力湧く
列島が緊急事態活断層

無我夢中若葉マークのプロポーズ
都市砂漠安全地帯ない歩道

神戸市 輿水 弘

円熟のつばさ梳かして八十路ゆくの
ろけたらついに割り勘言い出せず
やわらかい言葉はいいが眼は怖い
四コマのように終ったクラス会

神戸市 細川 花門

猫が危篤句会休むと来たメール
妻が好き僕と距離置く猫の鈴
風見鶏廻り疲れているらしい
夫婦別姓金庫も別々に買う

神戸市 山根 弘子

回り道しすぎて愛が消えました
すぎ去った歲月語る古時計
ピンチには母の自慢の智恵袋
生きるため危い橋をいくたびも

川西市 日野岡 和之

子には子の親には親の設計図
四苦八苦心機一転老いの意地
生きているだから泣いたり笑ったり
花は友鳥のさえずりBGM

篠山市 永井 かほる

一日の感謝の祈り今日も暮れ
うわさなどどうあろうとも種を蒔く
夏野菜いろいろ植えて実り待つ
趣味あつてエールの電話くれる友

篠山市 藤井 美智子

好奇心うわさ話が好きな耳
笑顔でも心の陰り見破られ
自分でも許せない程物忘れ
父母と夫看取って今はわが胸に

三田市 九村 義徳

落書きを心に書いて去った人
聞き上手次の話を待っている
ややこしい話スリと聞き上手
つまらない噂はまるめゴミに出す

三田市 宗福 清司

ああ悲しへそくり出来ぬ定年後
それなりに写るはずでもポーズとる
恥ずかしいたまの手書きは誤字だらけ
お疲れ様くどくど言われ五十年

三田市 多田 雅尚

古稀も過ぎ言われて嬉し四十肩
雨の度仮設のテント目に浮かび
新聞の小さな記事に風を読む
景気の良い弾む足音消えたまま

三田市 谷口修平

一夜明け裂けた大地に息を呑む

立ち読みのページに付箋貼っておく

法律書どうも涎の跡らしい

過疎進みついにカラスも村を出る

三田市 辻開子

親子猫車庫は我家と友を入れ

肉好きが術後の体拒否しかけ

半月後予約診とれ落ち着かず

雨の日は退屈すぎる休養日

三田市 東内美智子

金平糖混ざり混ざって角を出す

パセリの芽間引いた中に私居る

外面がよくて好かれるお父さん

川柳の海また寄せてくる土用波

三木市 山口久子

武者人形ひ孫まねして床の間に

昭和まだ匂うわが身で年かさね

聞き流すことが世渡り上手です

百まではまだまだあるよ九十歳

奈良市 尾畑なを江

人生にマサカがあつてうろたえる

猫ブーム我が家の二匹知らんぶり

しばらくは総活躍を忘れとこ

このごろはスローテンポを自覚する

奈良市 高橋敬子

どっちもどっち浅い考えにらめっこ

たちかけた茶柱たおれいつもの茶

花好きが雑草の花抜いている

母の日の電話夫が順を待つ

奈良市 高橋仁志

今世紀野菜作るも工場

水溜まりお玉じゃくしも子も遊ぶ

新緑を呼び寄せている春の風

一夜漬けじっくり味わう春野菜

和歌山市 鍋嶋澄子

芍薬の大きく咲くもはかなげで

空元気老いに負けるな遊びましょ

小銭にぎり紙芝居みた昭和の日

年の暮れ小銭集めて夢を買う

和歌山市 福呂秀子

娘の老眼心が少し揺れ動く

乱高下冬物仕舞い狼狽える

庭に咲く花で手軽にお仏壇

パンジーが小瓶で魅力アップされ

山鹿市 柳田白沙

これからが大人の余裕の見せどころ

どうせならずつと騙され通したい

老いてなお愛しさつるあなたの手

笑う朝一日はずむわらべ歌

橘高薰風句抄

〔橘高薰風川柳句集〕平成十三年発刊

睡蓮はバラの日傘が来て眠る

クーラーは適温天井裏の鼠

汝明日を憂うるなかれ終列車

月見草貨物列車は黒く長し

列車通過駅長の背と列車の背

攻撃に羊の角は程遠し

年明けただけでほのぼの天地人

自らに同情をして釣りに出た

雑種だが教えただけの芸はする

あの年の祇園囃子が雲に住む

十二月の京都の良さを知りはじめ

振り出しに戻る小さな愛を得て

悼 山内静水氏

転生も美しからん釈静水

潮騒も晶子曼茶羅智恵子抄

雪化粧した森しかと神おわす

この甘露堂新しく仏古り

うどん好きお汁一滴残さない

今年また燕が戻る恩に似て

定年を茶碗の龍と淋しがる

山頂に立つと指揮官めいてくる

愛の巣という可憐さはすでになし

初春の姫島千船よい名なり

真っ青な日の出地下鉄サリン以後

禊せよ初春大雪の永田町

負け戦一度とてなし馬上盃

鬼の子の一番好き鬼の面

睡蓮が自分の化身だとしても

労働歌 蟻が歌えば凄かろう

学生を矢面に立て 国貧し

蕎麦の花地球滅びるなど思えず

英語 de Senryu ⑤⑤

麻生路郎句集 『旅人』

英訳 吉村 侑久代 Kim Horne

薄情な日傘きりきり廻すだけ

without thinking

she turns

her parasol

戀の罟 あの眼だらうか 眼だらうか

traps of love

her cute eyes

her charming eyes

without thinking 思いもなしに *turn* 廻す *parasol* 日傘 パラスル
trap 罟 *cute* 可愛い *charming* 魅力的な *eyes* 眼

～リバーウィローのため息～ R.H.ブライスによる川柳の解釈と英訳①⑨

ブライスは自著 *SENRYU* で、古川柳や近・現代川柳を14の項目に分けては翻訳しました。今回は Things(事物)から取り上げましょう。

なげ入れの干からびて居る間の宿 古

(Flowers arranged in a vase, / Withering, / At an inn between the post-towns.)

arranged 活けられている *vase* 壺 *withering* 枯れている *inn* 宿
between ～との間に *post-town* 郵便本局のある町→大きい町

間の宿(あいのしゅく)とは、江戸時代、正規の宿駅間に設けられた休憩の宿(しゅく)で、宿泊は禁止されていました。宿泊客がないために、宿のしつらはみすぼらしい状態です。「間の宿は、宿場間にある小さな村の宿で、旅人はそこには泊まることはなかった。壺の花は枯れたままで、それは村のさびれた生活を表している。この川柳は、俳句とほとんど違いがないが、俳句にある季語がないだけである。」とブライスは述べています。

ブライスは(間の宿)を、*an inn between the post-towns* と英訳し、宿泊可能な大きな町を *post-town* (郵便本局のある町) と言い換えています。つまり英語には存在しない言葉は、それに似通った言葉で言い換えをする作業が翻訳には必要です。ブライスは江戸時代の文化事情を、よく研究していたことを示す翻訳と云えましょう。

参考文献: *R.H.Blyth, SENRYU* (北星堂書店 1949) p.152

誹風柳多留一一二篇研究 37

細井龍夫・伊吹和男
山田昭夫・石川道子

小栗清吾

清博美

291 初手のやく寺で仕廻て帰る也

細井 女の前厄は十九歳、男の前厄は二十五歳。女だったら鎌倉の松が岡東慶寺へ駆け込んでかたを付けてもらい、離縁状を手にして帰る。男だったら、川崎大師で厄除け祈禱を受け、寄り道はしないで帰る、となろう。類句第三のように夫婦連れも考えられる。

おまへもかわたしも九さと松か岡 二一四
川崎の品川と来るむす子旅 二〇三
川さきへ六ツちがいの夫婦つれ 明四七三

石川 女の厄払いは松が岡なのですか？男女とも川崎大師だと思っていました。句も、最初の厄は川崎大師で厄払いをして、品川も素通りして、まっすぐ帰宅、と単純に男性の厄払いかと思いました。

小栗 礎説のスタンスがはつきりしていないので、石川さんの如き意見が出てくる。この句は二通りの解釈がありうる。(なお、礎稿は、「前厄」という語を「前の方の厄年」の意で使っておられると思われる、確かに辞書にもそう書いてあるが、現代語では、多く「厄年(本厄)の前年」の意で使われるので、此の文では避けた方が無難と思う)。

①松が岡の句とする場合。女の十九歳の厄年の一つの現れとして「離縁沙汰」を考えるパターン句の一つ。
②品川の句とする場合。川崎大師↓品川沈没ではないケースもあるぞ、という意味。このどちらかであつて、両立はしないと思う。ただ、さてどちらかとなると、なやましいが、二十五歳の男が品川を通過するとも思えない

ので、ひとまず、松が岡としておく。
清 「史伝」でも松が岡の句としている。女のはじめての厄が離婚問題だったという訳である。

292 さつたくといふけれどにげた也

細井 「離縁してやった」と亭主は言うけれど、実は逃げられたのだ。類句は逆の立場。出されたを出て来たにする里の母 八二

伊吹 賛。男の見栄。

清 賛。

293 ぼんぞくに寺をうられる秋の末

細井 正灯寺や海晏寺は秋の末ともなると紅葉狩だとして俗人共にかこつけの具とされ、吉原行きや品川行きになつてしまう。

よし原のみぢのやうな一寺也 二三四
かいあん寺しやうとう寺よりやすく売

清 賛。

294 下総はおかべむさしハあんもなり

細井 両国橋東詰日野屋東次郎の泡雪と橋西

の吉川町にある若松屋の幾世餅は、それぞれ下総と武蔵の名物である。

泡雪は餡掛け豆腐のことで女房語で「おかべ」という。幾世餅は餡ころ餅で幼児語で「あんも」という。

二ヶ国の雪ともちとへ弦ルをかけ

宝12松1

あわ雪ハ他国にあるがはんじやうし

明二義4

伊吹 贊。國境下戸ハこつちへいくよ餅 一二二七

清 贊。橋の東と西の名物。

295 ひく事をもつはらとする後家の色

細井 後家の色は何のかのと言って、後家から金品を引き出すことに掛かりきっている怪しからん奴だ。

後家のいろ男ものからねたり出シ

天七天1

後家を盗んで蔵も我物

武七4

清 贊。後家のいろ先年五両出したやつ

296 藪いしやへ自身にくすりとりが来る

298 くの世かい女郎かいにも月や華

細井 江戸時代には現代と違って、医者はず診をして、後刻薬を受け取りに行くという方式だった。この患者は軽い病気なのか、貧しいからなのか、裁医の所へ自分で薬を貰いに来ている。

葉取裁医女房が出て渡し

箇四18

清 贊。伊吹 贊。医者が医者なら患者も患者。

297 髪置のくしさせばおちく

細井 十一月十五日は七五三の祝の日。男女とも三歳になると髪置の祝いとて髻髪を廃めて鬘に結び、衣服を整えて産土神にお参りに行く。なにしろまだ髪の毛が少ないので櫛をさしてもすぐに落ちてしまう。御参りも大変である。

三ツから日本八国の形りにゆひ

椋9

髪置の芥子に小蝶の名古屋打

一三三27

小栗 贊。禮稿のあげられた「桜の実」の句によれば、髪置から「とんぼ鬘」に結つたら

しいが、そんなものに櫛をさしても落ちるのはあたりまえですな。

清 贊。

伊吹 連句の世界に月や花の定座があるように、売色の苦の世界にも月や花の紋日がある。

月花はおやし小言の定座也 一九6

山田 贊。苦と句を掛けるのに「にも」としたのがミソ。八月十五夜と九月十三夜、そして中の町の夜桜。

清 贊。月花も其内にある一トかまへ 三〇12

299 おふくろにかくすがげいこ本の事

伊吹 芸子のお袋は、実母であったり血のつながらない後見人の場合もある。そのお袋に何でも包み隠さず話しているようであつても、本当のことは秘密にして話さない。たとえば好きな男ができたことなど。

よい客を三の糸ほどあふながり

拾六24

山田 贊。遊女に限らず、芸子なども客に睦をつくのが商売、ということが前提としてあるのだらう。

小栗 贊。「本のこと」は、営業用の態度との対比。表向きとは違う本当の気持ちとして

好きになった男が出来たということだらう。

清 贊。

愛染帖

新家 完司 選

(投句 278名)

枚方市 丹後屋 肇

リクルートスーツの孫へ火打ち石

(評) 魍魎魍魎に向かって出陣する孫に贈る厄除けの切り火。一路平安・無病息災・大願成就など、総ての願いが込められている。

大阪府 米澤 俣子

どれだけの金目か古い服の数

(評) 買ったときはそれなりにしたものだ。今じゃ二束三文。もう着ることもないが捨てるには惜しいし、さてどうしたものか。

豊中市 水野 黒兎

六甲の意外にタフな登山道

(評) 神戸の裏庭として親しまれている六甲山。若いころは鼻歌混じりで登れたのに…。登山道は昔と同じだが足腰が弱つたのだ。

大阪市 平井美智子

娘の服を貰い微妙な若作り

(評) 娘のお古を頂戴して「似合ってる!」と褒めてもらったが…。イケてるようなヘンテコなような、ピミヨーなところである。

大阪府 藤田 武人
主賓まで割り勘にする名幹事

(評) 上下関係なし肩書きなし。奢つた人も奢られた人もいない清々しい勘定。ペテランでないとい出来ない鮮やかな仕切り技。

河内長野市 森田 旅人

狐狸たちよ山分捕つてごめんよ

(評) 山里をドライブしていると狸の糞死体にしばしば遭遇する。彼らの国であったところに道路を造つた人間が悪いのだ。

松山市 柳田かおる

拘らずフリーサイズで生きている

(評) 人間に対しても、金銭に対しても、神仏に対しても、既成の価値観や法則や掟に縛られない自由で柔軟な心でありたい。

大阪市 江島谷勝弘

いい女あつちこつちにいるもんだ

(評) 「いい女」「いい男」が目につくのは元氣な証拠。深入りするのはヤバイが、密かに心をときめかすぐらいはいいいだろう。

三田市 堀 正和

ホスピスで酒池肉林をするつもり

(評) 酒も来客も外出も自由なホスピス。先の無い身であれば夜毎の酒宴も許されるが、その体力がある内に入所しなければ。

大阪市 谷口 義

お見せするほどのことはない晩年

(評) あの原因子さえ晩年はひっそり。近所

の人も「めつたに見なかつた」とのこと。見習いたいと思うが、隠棲する時期が問題だ。

熊本市 杉野 羅天

壊れてませんぞ清正の石垣

大阪市 古今堂蕉子

裸にもいろいろあるな相撲取り

唐津市 坂本 蜂朗

子を孫に置き換えまたも夢を見る

佐賀県 真島久美子

定位置で眠り続けるだけの靴

紀の川市 山東日出男

漬物の重石にもある向き不向き

箕屋川市 籠島 恵子

なるようになっての川の流れです

広島市 岸本 清

女房も山口組も恐ろしい

和歌山市 古久保和子

食べながら歩く文化が許せない

大阪市 高杉 力

船旅が決まりダンスを習つてる

鳥取市 前田 楓花

左手を使い右脳を刺激する

豊橋市 藤田 千休

睡眠薬よりもよく効く麻酔銃

藤井寺市 田付 絹枝

一瞬の油断に負傷神のムチ

米子市 竹村紀の治

どちらとも言えないに○アンケート

大阪府 板尾 奏子
私なら飛び込んでから考える

河内長野市 坂上 淳司

板扉の節を覗いた遠い夏

高槻市 初代 正彦

てっぺんへ挑む夢見たのも昭和

鳥取市 福西 茶子

空しさを今日も味わう空財布

三田市 北野 哲男

飲み助の友の平癒を祈るのみ

大阪府 田中ゆみ子

こどもの日すぐに母の日ああしんど

胃を掴む術で男を離さない

男鹿市 伊藤のぶよし

燕来る何はともあれ目刺し焼く

神様の粋なはからいチョイと呆け

母という糸が私を縫い付ける

青森市 守田 啓子

玉結びほどく私になる儀式

府中市 岸田 武

も一人の僕はとんでもない奴だ

お祓いをしたらと言われ飲んでる

京都市 高島 啓子

ストローに合わせバックの穴がある

よく遊ぶ孫から貰う土産物

鳥取市 岸本 宏章

ビデオで聞く自分の声に耳塞ぐ

僕に似て茄子も胡瓜もみな曲がる

三田市 村田 博
指先で地図帳辿る旅行前

八王子市 川名 洋子

腕組んで外湯巡りの下駄弾む

笠岡市 藤井 智史

Uターンラッシュで奪い合うトイレ

倉吉市 牧野 芳光

老人になったらトイレとのバトル

鳥取市 田中 天翔

連休を庭の草取りして過ごす

明石市 糀谷 和郎

おばちゃんはマジシャン茶話の種尽きぬ

生きているだけでこの世はスリリング

京都市 榎本 宏子

母の日と命日兼ねて届く花

躓いて道に落としたかな若さ

弘前市 高瀬 霜石

男気のある女性にはひかれます

割り勘で飲む酒常に美味である

三田市 上田ひとみ

長引いた風邪に年齢自覚する

チャレンジと大きな字です古日記

堺市 内藤 憲彦

甘いムード新婚時代だけだった

こっそりを見ごと裏切る袋とじ

大阪府 高木 道子

一思案してつばくろが果を掛ける

留守の家に奮然と咲く草の花

岡山県 紫 しめの
節電で野菜室から発芽する

河内長野市 松岡 篤

父の日を作ってくれた商売人

羽曳野市 徳山みつこ

メイストーム私掴んで振りまわす

三田市 多田 雅尚

地震予知出来ればきつとノーベル賞

桜井市 安土 理恵

天女になる日まで禁句のヨッコラショ

紀の川市 辻内 次根

期限切れ食べて免疫力つける

正直に生きて社会を困らせる

東かがわ市 川崎ひかり

逝ったのに夫呼んでるゴミ出し日

夫逝ってこんなに広いウサギ小屋

宝塚市 太田としお

アホになるこれがなかなか難しい

金よりも大事なものに救われる

大阪府 榎本日の出

老いました心に化粧苦労する

心配は無くなったのに不眠症

高槻市 原 洋志

チャンネルはどこでも青汁しじみ汁

履き替えた靴も方向音痴とは

奈良市 大久保眞澄

バイキングシニア価格がよく食べる

ハイトーンのままオパチャンの内緒ごと

神戸市 山根 弘子
人生のギャップを埋める五七五

吹田市 木下 敏子
落煮込む間に一句立ち上げる

堺市 加島 由一
川柳をする美人には歳がない

大阪市 大川 桃花
誰も来ずどこへも行かず句も出来ず

八尾市 高杉 千歩
容赦なく押し寄せてくる締切り日

鳥取市 永原 昌鼓
自信作落とす選者が恨めしい

神戸市 奥澤洋次郎
川柳って何やろうかなおもしろい

岡山市 丹下 凱夫
一張羅着て柳会に飲み会に

三田市 尾崎 一子
気休めの一言よりも旨い酒

唐津市 仁部 四郎
まあいつばいそれからずっと愚痴仲間

八幡市 今井万紗子
目刺し二本仲間と飲める屋台酒

札幌市 三浦 強一
いい酒が言わせる老いの艶話

神戸市 松井 文香
丸め込むつもりかピッチ早い酒

河内長野市 梶原 弘光
通夜帰りつまみにされている故人

岡山県 池田たか子
腹時計晩酌だけは狂わない

鳥取市 夏目 一粋
もったいないから一滴まで飲んだ

香南市 桑名 孝雄
終活に酒の予約がまた入る

大阪市 佐藤 忠昭
支払いになると厳しい名幹事

宝塚市 田中 章子
飲みすぎてなんとおいしいしじみ汁

堺市 村上 玄也
年老いてからの旅行は緩近短

橿原市 居谷真理子
老いるのは嫌だが老いるしかないな

松原市 森松まつお
坊さんのリズム狂わす着信音

下松市 有海 静枝
雑草と疎み野草と珍重し

藤井寺市 鈴木いさお
札束を見ると理性が泳ぎだす

岡山市 永見 心咲
風邪で臥せば夫とイチゴと体温計

枚方市 寺川 弘一
いつまでも歳を取らないサザエさん

尼崎市 長浜 美籠
友情の証とケーキ半分こ

鳥取市 山下 凱柳
午後一の会議欠伸をかみ殺す

羽曳野市 永田 章司
辛口で評判のアナみんな降り

三田市 久保田千代
時を積む世をすねた日を悔いながら

松江市 中筋 弘充
パトカーが走り渋滞してしまふ

岡山県 田中 恵
貧乏は慣れっこだからよく笑う

川西市 山口 不動
靴下を履くとき出てるウメキ声

鳥取県 斉尾くにこ
くちびるが荒れるオチャラケ言っちゃった

大阪市 大治 重信
バラソルが刺ある顔を隠してる

防府市 坂本 加代
一言で雲の上から急降下

田辺市 岡本 昇
落ち込んだ時は悩みを書いてみる

倉吉市 大羽 雄大
出た腹に最後の段が見えなんだ

松山市 神野きつこ
庶民派の顔万人に受けが良い

橋本市 石田 隆彦
シナリオは喜劇で通す友見舞う

箕面市 広島 巴子
孫伸びる私は縮む背比べ

堺市 奥 時雄
どの葬式も参考にして帰る

終活をするかすまいかまだ傘寿
豊中市 藤井 則彦

時どきは水玉バジヤママヘアで着る
大阪市 柴本ばつは

春雷に出合い頭のゴルフ場
神戸市 細川 花門

寝過ごして慌てた頃が懐かしい
三田市 足立つな子

海老天が十二単でかしまる
横浜市 菊地 政勝

すべり台犬はずべらず駆け下りる
東京都 川本真理子

丁寧な罵声を浴びせかけられる
沖縄県 森山 文切

わたくしの脳味噌のごと臘月
香芝市 大内 朝子

生きていく術の一つの物忘れ
堺市 澤井 敏治

サア立つで立とうと膝に言い聞かす
鳥取県 石谷美恵子

病院を妻の好みで変えられる
弘前市 吉川ひとし

五十回忌父を知ってる人わずか
芦屋市 黒田 能子

エピソード混せて和尚が法を説く
和泉市 横山 捷也

眉きりり描くと心が外を向く
長岡京市 山田 葉子

素人に活断層がわからない
堺市 遠山 唯教

益城町の友の元気な声を聞く
寝屋川市 富山ルイ子

安全に絶対はない再稼働
枚方市 海老池 洋

顔を見てさつと座席を譲られる
奈良県 渡辺 富子

学んだように猫の子が顔洗う
鳥取市 土橋 螢

生傷は勲章 昭和の運動会
横浜市 川島 良子

茶坊主が殿の眼鏡を曇らせる
三田市 谷口 修平

猫は見えていたかあさんのつまみ食い
八尾市 村上ミツ子

スーツよりエプロン姿ほめられる
三田市 福田 好文

ええ天気不良主婦してみたくなる
京都市 三宅 満子

父ちゃんの居場所はポチの横にある
尼崎市 清水久美子

負けたふり作戦としてやりとない
鳥取市 春木圭一郎

風邪だけは二人仲良くひいている
大阪市 宇都満知子

町工場世界相手にオンリーワン
河内長野市 黒岩 靖博

桜散りリンゴの花が咲き競う
弘前市 高森 一吞

花の苗いただき土を買いに行く
高槻市 島田千鶴子

憎らしい青虫蝶になつて舞う
米子市 後藤美恵子

ひまわりよ一緒に咲こう種を蒔く
鳥取市 大前 安子

捜し物また階段を上り下り
弘前市 福士 慕情

泣き言と愚痴でふくらむゴミ袋
大阪市 若本 安代

ボカし語に慣れ荒む世を生き延びる
高槻市 富田 美義

整骨院増えて介護士不足する
大阪市 津守 柳伸

反骨の勲章だろう向こう疵
松山市 栗田 忠士

起きようが寝ようが針のない時計
和歌山市 玉置 当代

好き勝手言わせておこう五日飯
今治市 渡邊伊津志

結んで開いてデイケアのリハビリ
鳥取県 山下 節子

眼と耳を磨き詐欺から身を守る
高槻市 富田 保子

しっかりと背筋伸ばして聞く計報
大阪市 伏見 雅明

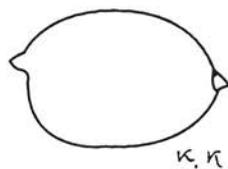
共選欄

檸檬

抄

(薰風書、カットとも)

(投句 373名)



「おそらく」三浦強一選

おそらくは東京五輪までもめる
マイペースこの子おそらく大物に
イケメンから会釈おそらく人違い
おそらくは食べて帰ると思つてた
低姿勢おそらく金の話だろ
おそらくの人智を超えた大津波
にっこりと挨拶したら変わるかも
おそらくは記憶にないと言うだろう
自爆テロおそらく神も許すまい
ロボットがおそらく介護してくれる
悪評がすぐに立つから休めない
二カ月も休めばきつと死亡説
極楽は無理だと思ふ友ばかり
きつときつと仲良しなのよあの二人
手の内をおそらく敵も読んでいる

三田市	堀	正和
高槻市	富田	保子
和歌山市	楠見	章子
堺市	齋藤さくら	
大阪市	原田すみ子	
川西市	大坪	一徳
橿原市	居谷真理子	
松江市	川本	畔
弘前市	福士	慕情
米子市	後藤美恵子	
羽曳野市	吉村久仁雄	
三田市	村田	博
三田市	北野	哲男
大阪市	柴本ばつは	
岡山市	田中	恵

「おそらく」長浜美籠選

毛虫とて舞う日信じているきつと
悪評がすぐに立つから休めない
低姿勢おそらく金の話だろ
父の日はおそらく忘れられている
休肝日おそらく三日もちません
だまつてると皆反対派にされる
どしゃぶりもおそらくあがる晴れ女
遠からず別れることになる予感
あきらめが早い何かがあるらしい
しよげた顔おそらく振られたんだろう
百までは多分足りない預金高
更新はもうしないだろバスポート
長生きの血筋百まで生きるかも
胎内で多分聞いてた子守歌
おそらくは生きてるうちに見ぬ曾孫

枚方市	海老池	洋
羽曳野市	吉村久仁雄	
大阪市	原田すみ子	
さいたま市	星野	育子
神戸市	細川	花門
佐渡市	高野	不二
生駒市	飛永ふりこ	
桜井市	安土	理恵
堺市	遠山	唯教
堺市	村上	玄也
犬山市	金子美千代	
堺市	奥	時雄
神戸市	能勢	利子
札幌市	斉藤	宏子
東大阪市	佐々木満作	

正座から胡坐おそらく居直る気	八尾市	宮西	弥生
安全神話おそらく誰も信じまい	西子市	黒田	茂代
おそらくと思ひシブシブ脳ドック	米子市	竹村紀の治	
おそらくへ覚悟してますお医者さま	雲南市	菅田かつ子	
丸ひとつ無ければあれもこれも買う	大阪市	川端	一步
声掛けはやめるおそらく泣いている	大洲市	花岡	順子
マイペース私の前世猫だろう	日置市	前田	洋子
おそらくは好かれていてという自信	上尾市	中村	伸子
おそらくと思うが口にせぬかつら	堺市	矢倉	五月
おそらくはダメでしょうねという笑顔	豊中市	江見	見清
頼んだらおそらく無視はされぬはず	池田市	栗田	久子
今ここで言えばおそらく愚痴になる	神戸市	松井	文香
おそらくは返って来ない金を貸す	宇部市	平田	実男
おそらくはこれが最後と何度書く	堺市	山本	半銭
元栓はたぶん締めたと引き返す	和歌山市	古久保和子	
心配をしておそらくを待っている	米子市	後藤	宏之
大物もいつかはきつと紙おむつ	寝屋川市	伊達	郁夫
辛いのはきつと叱った親の方	堺市	大隅	克博
品と言う言葉おそらく死語になる	大阪市	笠嶋	恵美
おそらくはおそらくのまま恋終わる	大和郡山市	坊農	柳弘
おそらくは口裏合せ飲んでる	和歌山市	北原	昭枝
午前二時帰れば待っている修羅場	香南市	桑名	孝雄
妻洗車おそらく明日は雨になる	塩竈市	木田比呂朗	

おそらくは秘書がやったと思います	松江市	中筋	弘充
ハンドルが無くなるだろう近未来	神戸市	山崎	武彦
おそらくはボクが原因わるかった	大阪市	江島谷勝弘	
良妻賢母おそらく死語になるだろう	西宮市	山本	義子
きつと効くと信じてサブリ飲む八十路	堺市	柿花	和夫
被災地を見れば贅沢など言えぬ	三田市	多田	雅尚
おそらくはマイナンパーで火葬許可	唐津市	仁部	四郎
生きている中に廃炉が見たいけど	米子市	竹村紀の治	
俺ばかり刺す蚊おそらく面食いか	高槻市	富田	美義
億万長者おそらく夢で終わるかも	和歌山市	玉置	当代
居なければ噂の種にされ不安	神戸市	富永	恭子
おそらくとピンクの産衣用意して	出雲市	伊藤	玲子
丸ひとつ無ければあれもこれも買う	大阪市	川端	一步
一言居士おそらく文句二つ三つ	鳥取市	山下	凱柳
おそらくは東京五輪まだもめる	三田市	堀	正和
正座から胡坐おそらく居直る気	八尾市	宮西	弥生
おそらくは良く見られただけの人	大阪市	坂	裕之
プロポーズ受ける気で乗る観覧車	尾道市	大本	和子
自爆テロおそらく神も許すまい	弘前市	福士	慕情
うつむくな願いの叶う時がくる	神戸市	奥澤洋次郎	
貰ったがおそらく使わないティッシュ	沖繩県	森山	文切
家庭でもバセリのような役回り	大阪市	高杉	力
妻が逝き新しい星誕生す	尼崎市	藤井	宏造

この雨もおそらく彼が連れて来た
旅支度おそらく雨は止むでしょう

松原市 森松まつお
和歌山市 松尾 和子

生き方を変えねば自滅するヒト科
おそらくを具体化せんと顕微鏡

大阪市 大川 桃花

下下の暮らし総理に見えぬはず
生きてさえ居ればいいことあるだろう

大阪市 田中ゆみ子
登別市 小林 碧水

母の前おそらく嘘は通じない

堺市 内藤 憲彦
具塚市 石田ひろ子

おそらくは村へ戻らぬ子へ学資
前の世は亀か何ごとにもものろい

南あわじ市 萩原 狸月
明石市 糀谷 和郎

百までは多分足りない預金高

大山市 金子美千代

この人もひとり暮らしかレジの列
毛虫とて舞う日信じているきつと

弘前市 高瀬 霜石
枚方市 海老池 洋

おそらくはマイナンバーで火葬許可
父と母おそらく黄泉で逢っている

唐津市 仁部 四郎
和歌山市 鍋嶋 澄子

あの世でもおそらく君を探します
彼の世ではきつと仕返しされるやろ

堺市 源田八千代
橋本市 石田 隆彦

来世ではおそらくあなたとは添わぬ
おそらく最後だろういつまでも手を振る

三原市 鴨田 昭紀
藤井寺市 太田扶美代

冤罪を生むおそらくという捜査

堺市 澤井 敏治

秀 句

おそらくの黒が真つ白だった嘻嘻

香芝市 大内 朝子

安保护法赤紙までも視野におく

札幌市 小沢 淳

プロポーズ受ける気で乗る観覧車

尾道市 大本 和子

生きてさえ居ればいいことあるだろう
淡雪に恋の終りの予感する

堺市 内藤 憲彦
箕面市 酒井 紀華

カーネーションおそらく父の入れ知恵だ
母の前おそらく嘘は通じない

大阪市 津守 柳伸
具塚市 石田ひろ子

極楽は無理だと思ふ友ばかり
おそらくは努力九分で運一分

三田市 北野 哲男
岡山県 池田たか子

淋しさを隠しお一人さまで逝く
唯ずつと見守る母で終りそう

青森県 松山 芳生
堺市 矢倉 五月

おそらくが分かつて医者 of 敵しい目
今亡母に会えばおそらく泣くだろう

熊本市 杉野 羅天
藤井寺市 鈴木いさお

花も人もきつと枯れると知って咲く
もう来ないそんな気がしていた私

奈良県 渡辺 富子
三田市 上田ひとみ

今ここで言えはおそらく愚痴になる
おそらくは時が解決してくれる

神戸市 松井 文香
大阪市 平井美智子

手の内をおそらく敵も読んでいる
おそらくはあの一言が変えた風

大田市 田中 恵
和歌山市 古久保和子

この人もひとり暮らしかレジの列
今頃はおそらく亡父鹿島楯

弘前市 高瀬 霜石
岸和田市 宮野みつ江

じつとしていられぬ指が鶴を折る

三田市 久保田千代

秀 句

辛いのはきつと叱った親の方

堺市 大隅 克博

ひっそりとわれも旅ゆく風になる

弘前市 高森 一吞

母さんと叫んだらう自爆テロ

大洲市 中居 善信

肩の力を抜きませんか

川柳始めてかれこれ五十年が過ぎた。つりはし、水郷、汐風、裸を中心に活躍の場を広げたのだが、最近は大阪の川柳塔へ軸足を置いている。麻生路郎が立ち上げて西尾葉や橋高薫風さんなどに引き継がれ、現在は竹原市の小島蘭幸さんが主幹である。所謂全国誌と呼ばれる柳社である。全国から会員を集めて活動をする集団である。

会員は北海道から沖縄まで全国にまたがる。だから全日本クラスの川柳家たちが大勢居る。伍健まつりに来て選をした、小島蘭幸さん、鳥取の新家完司さん、この六月に全日本の愛媛大会で「迎える」の選をされる、和歌山の三宅保州さんも同人である。こんな人達はどうなるに凄いい句を作るか？と思われるだろうが、さにあらず、彼らは全員、肩の力を抜いた句を作る。川柳とは本来そうしたものかも知れないと思うのである。蘭幸さんの句集『再会Ⅱ』より「ふるさとの窓を開ければ山ばかり」「水平線を見ている迷い消えている」「ライオンの風格に似て子が這うよ」これらの句には力みがない。考えてみるに、やっと這いだしたばかりの子供だが、一点を見つめ一生懸命這っている、それはライオンの風格にも似ていると

：説得力がある。
僕の枕元に数冊の句集を積んでいる。八木千代の『椿

守』、小島蘭幸の『再会Ⅱ』、木本朱夏の『転生』などである。これらの句集は行き詰まったとき目を通したり、眠り葉代わりに目を通したりしている。そんな句集の中に鳥取の新家完司の『二十五年』という句集がある。二十五年と言うからには、二十五年の入選を句集にしたものだろう。これがとても面白い。愛媛や高知のトップクラスの人達には理解しにくい表現である。完司さんは川柳塔の理事長である。

フクシマの方はかり向くたましいよ
腹立てていると聞こえぬ春の音

日の丸のことで議論はしたくない

かんにんなニホンカワウソかんにんな

万病に効く「のほほん」という薬

わらべうたどなたもいないとさうたう

平和とは眠いものだね鳩ぼっほ

ページ繰っても繰ってもニタニタしてしまう、肩の力を抜け、何言っただと笑われそう。

僕は沢山の大会へ投句している。鳥取や大阪辺りの大会、高知辺りの大会なのだが、一つだけ気になる事がある。句の形の違いである。愛媛高知辺りの大会賞の句は決まって抽象句である。大阪辺りの句は具象句である。一読明快理解できる。抽象か具象か機会があれば書こう。

「追う」

(投句 232名)

坂本 蜂朗 選



初恋の追憶清く切なくて
亡母に似る人を秘かに追っている
流行を追うマネキンの無表情
プライドを捨てて追いかけて手に入れる
愛猫のあと追うように逝った母
携帯が追いかけてくる秘密基地
日を追って全壊家屋無念なり
八十歳まだ幻を追っている
川柳に追われるうちが華である
追えば逃げそつげなくすりや顔を出す
メモリアルしつこく追ってくる卒寿
真実を追い過ぎ霧が深くなる
深追いをしすぎて森を出られない
連休も休まず犬を追う散歩
口べたな妻の会話をフォロースする
深追いをせずにそれから泳がせる
天災とテロが交互に追ってくる
追いかけた夢はとつくとセピア色
突き詰めて追うと器の底が見え
趣味を追う人生八十じゃ短すぎ

河内長野市

松岡

篤

橋本市

石田

隆彦

奈良県

渡辺

富子

防府市

坂本

加代

堺市

澤井

敏治

大阪市

若本

安代

唐津市

岩崎

實

鳥取市

岸本

宏彦

倉吉市

山中

康子

大阪市

内田志津子

大阪市

津村志華子

東大阪市

佐々木満作

西子市

黒田

茂代

吹田市

木下

敏子

塩竈市

木田比呂朗

和歌山市

北原

昭枝

弘前市

今

愁女

弘前市

稲見

則彦

和歌山市

松原

寿子

池田市

上山

堅坊

悲しみに追い打ちかけてくるマイク

片減りの靴で邪馬台国を追う

パトカーを法定速度で追尾する

追いかけてくると信じていた迂闊

庭中の雑草を追う母である

ケイタイのベル追ってくる山の道

花追って巣箱列鳥駆け上がる

泣き声に追われ過保護の責めを負う

プチ家出誰も追いかけてくれない

白地図の上で明日を追いかける

追い越してみるとずっしり親の齡

木簡の文字にロマンを追う学者

佳句

貧乏に追い討ちかける病だれ

追いたくは無いが背を押す余命表

かき捨てた恥がニコニコ追ってくる

追っかかりや止まってくれる過疎のバス

追伸のあたりに火の粉二つ三つ

真相を追えばいつきに氷点下

人地

生活に追われていたが若かった

天

そっぽ向いて耳があなたを追っている

軸

強い揺れあなたあなたと妻の声

奈良市 米田 恭昌

篠山市 酒井 健二

岡山市 永見 心咲

藤井寺市 太田扶美代

大洲市 花岡 順子

神戸市 奥澤洋次郎

河内長野市 坂上 淳司

堺市 遠山 唯教

京都市 三宅 満子

紀の川市 楠原 富香

唐津市 仁部 四郎

茨木市 藤井 正雄

札幌市 小沢 淳

堺市 矢倉 五月

神戸市 上田 和宏

札幌市 三浦 強一

富田林市 片岡智恵子

佐賀県 真島久美子

鳥取市 田中 天翔

橿原市 居谷真理子

「とほける」

岸本孝子選

(投句 231名)



とほけ役それなら私地でいける
呑んでない言い張っている赤い鼻
老人の武器はとほけて切り抜ける
おとほけと思っていたらボケだった
おとほけても食べた顔にかいてある
間が悪い時は聞こえぬ振りをする
しかつてもとほけて親を笑わせる
目指すのはとほけ上手なおばあさん
嘘だとは分かっているも聞いてやり
実直でとほける事は不得手です
電話口詐欺だと思いとほけとく
見ていたが見ずととほけて花もたす
痛いところ突いたつもりがとほけられ
のらりくらり惚け上手の古狸
とほける気などはないけど忘れてる
都合よくとほけた振りの老いの耳
とほけてはいないが只の物忘れ
呆けと突つ込み夫婦漫才終らない
知りながら孫に小遣い渡ししてる
目がかすむ耳が遠いととほけ切る

和歌山市 上田 紀子
岡山県 紫 しめの
三田市 上垣キヨミ
紀の川市 辻内 次根
鳥取市 吉田 弘子
紀の川市 楠原 富香
倉吉市 岡崎美知江
海南市 小谷 小雪
犬山市 関本かつ子
大洲市 中居 善信
八尾市 宮崎シマ子
姫路市 古川 奮水
可見市 板山まみ子
河内長野市 藤塚 克三
高槻市 片山かずお
和歌山市 福井 菜摘
東大阪市 佐々木満作
札幌市 三浦 強一
鳥取市 池澤 大鯨
羽曳野市 吉村久二雄

とほけんでも言い訳顔に書いてある
刺のある言葉とほけて丸く聞く
そうですかとほけて見せる思いやり
お迎えが来たらとほけてやり過ごす
長い日をとほけ合はしてたそがれる
あらそうなの私はじめに聞きました
記憶にはございませんと逃げ上手
とほけた味が好きで夫婦になりました
究極の突破口です惚けたふり
この先もほくはず一つとほくのまま
不真面目とトボケは特技親ゆずり
初耳のように聞いている聞き上手

佳句

どう見ても俺によく似た昼の月
おとほけが過ぎると落ちる信用度
傘寿過ぎとほける術も身についた
おとほけでその場を凌ぐ強かさ
記憶にはないという手はもう古い

人

爺ちゃんのおとほけ振りがなごませる 河内長野市 辻村 ヒロ
地 とほけてもしどろもどろに目が泳ぐ 富田林市 山野 寿之
天 日によって聞こえないばあさんの耳 奈良市 大久保眞澄
軸 難聴をときどき武器に使ってる

八幡市 今井万紗子
貝塚市 石田ひろ子
防府市 坂本 加代
藤井寺市 鈴木いざお
京都市 三宅 満子
羽曳野市 徳山みつこ
松山市 栗田 忠士
宝塚市 太田としお
鳥取県 竹信 照彦
弘前市 高瀬 霜石
鳥取市 福西 茶子
鳥取市 岸本 宏章
岡山市 丹下 凱夫
香芝市 大内 朝子
三田市 北野 哲男
札幌市 小沢 淳
松原市 森松まつお

初夢教室

題一夢中

山口光久

俳句は、一般的に「季語」は欠かせないものです。では、川柳ではどうでしょう。使っても使わなくてもよいのです。

川柳にはよく使われる特定の言葉があります。これを田中正坊氏は「句語」と称しています。「句語」は辞書に載っていません。市民権も得ていません。

一般に、「鬼・一匹・喜劇・仮面・白旗・負け犬・雑魚・余白・父の墓・切り札・やじろべえ・四面楚歌・四捨五入」等が使われます。

口の悪い人にかかれれば、「手垢に汚れた言葉、使い古された言葉」といい、飯の上に振掛ける「振掛け」と一緒だともいいます。でも、こういう言葉が一句の中で決定的な役割を果たすケースが多いのも事実です。

「句語」の一例

男―男坂・ベレー帽・ループタイ・紳士録
女―女文字・コンパクト・イヤリング・水鏡

〔添削〕

原針仕事夢中になり肩いたし

(山)久子

中六の破調になっています。リズムが悪いです。下五の「肩いたし」がどうでしょう。他の言葉を探してみましよう。

添針仕事夢中になって肩が凝る

原わたしにも夢中で走った四十年代 和子

中八の字余りになっています。自然とリズムが乱れてきます。定型の五七五を厳守する人と破調容認の人がおられるのも事実です。上五の字余りに寛容な人も「中八は絶対に駄目」と嫌う人がいます。字余りを避けるには、余分な「てにをは」の助詞を省くか他の言葉を探すとよいでしょう。

添わたくしも夢中で駆けた四十年代

原夢中で育てスープの冷める距離に居る (東)美智子

普通は「スープの冷めない距離」と言います。例えば、「妻の両親とスープの冷めない距離に住んでいる」などと。

添夢中で育て大成したら嫁の許

原妻は旅 夢中でつくる日々の飼 洋一

「飼」は動物を飼う、飼育するなど使うほか、食べ物、えさ(餌)の意味があります。下五に使うには疑問を感じます。

添妻は旅行夢中でつくる日々の膳

原初ものを夢中で描くイーゼルで (富)恵子

「初もの」では、あまりにも漠然として、ばやけています。具体的な物(名)を挙げた方がよいでしょう。

添イーゼルで夢中で描く青果物

原へび嫌い草取り夢中気がつかず 律子

上中下がポツンポツンと切れた感じがします。リズムも自然と悪くなります。

添草取りに夢中でへびに気がつかず

原夢中のあの娘今姦しいおばあちゃん 栄子

添夢中だったあの娘も今はおばあちゃん

原若者も電車内では静かです 夢香

添若者も借りた猫です列車内

原アレアレと夢中になれる孫と居る 由美

「アレアレ」と「夢中」には違和感を覚えます。

添付きつきり夢中になって孫の世話

原飛び跳ねて応援の声満ちあふれ 旅人

添飛び跳ねて応援団の声弾む

原春の日がブルに夢中声弾く 雪菜

ブルでの水遊びは「春の日」ではまだまだ寒く夢中になれぬのでは。

添真夏日のブルに夢中弾む声

原マドンナはなかなか見せぬ夢の中 大

添マドンナは夢の中でも顔見せぬ

原老いてなおのめり込む趣味おまけ付く (前) 洋子
添老いてなおのめり込む趣味あり至福
原指導に夢中ことばの礫とまらぬ (高) 敬子

原孫よりもじーじが夢中新ゲーム
添孫よりもじーじが夢中新ゲーム

忠貞 育児書に夢中おしめが乾かない
還暦のオンナですけど赤い靴
へそくりが消えて始めた大掃除
豊かさを夢中で追って原発禍

添老いらくの恋に夢中で我忘れ
原老年期あなたに夢中命あずけ 紀美恵

初鳴きに夢中になって呼名する
老春を夢中にさせた五七五

紀雄 夢中にはなれないけれどちよつと好き純子
ゲームにはあんな夢中になれるのに (高) 弥生
反対をされて夢中になった恋
分別が邪魔し夢中になれぬ恋
五七五夢中になって家事犠牲

添夢中になれる事あり元気です 開子
七四五の破調になっています。上五が上
六、上七の字余りになっています。中七下五が
びしと決まっていれば、許容範囲とされ
ています。

呆け防止夢中になって五七五
五七五夢中になつてもう日暮れ
上達しない川柳に夢中です
晩学の川柳道に今夢中
爺ちゃんを夢中にさせるタイガース
おしゃべりに夢中乗り換えるの忘れ

(山) 弘子 風露 夢中にはなれないけれどちよつと好き純子
天翔 ゲームにはあんな夢中になれるのに (高) 弥生
英男 反対をされて夢中になった恋
ひろ介 分別が邪魔し夢中になれぬ恋
里子 五七五夢中になって家事犠牲

添夢中になれる事があるから元気です
原あら元気ね夢中笑顔して返へす ミヨノ

夢中から醒めて疲労と虚無感と
流れ星夢中で追つた富士登山
バーゲンに夢中で夫を忘れてる
応援の疲れを知らぬ甲子園

明子 誰でも天体には興味がわきます。自分も
静枝 新星を見付けたいという気持ちになるでし
澄子 よう。たとえ数十年かかっても。
狸月 数独が夢中にさせる古稀の脳 九村 義徳
安子 数字パズルが解けた時の気分は爽快でし
紀恵 よう。クロスワードの文字から頭を捻るの
福貴子 と数字を並べ頭を捻るのと楽しみは同じ。

添何時まで夢中になれるネタ探し 清司
【少しの工夫で佳くなる句】

つくること夢中になれる夕の膳
片思い胸キユキスは夢の中
財テクに夢中の夫損ばかり
娘より母が夢中で婚活す

(見) 温子 星一つ見つけるために五十年 栗田 忠士
原けん玉に夢中になつて腕疲れ (田) 廣子
添けん玉に夢中になつてだるい腕
原夢中では仕事も恋もうまくいく 勝 正
添夢の中仕事も恋もうまくいく
原夢中だな餌運ぶ蟻観る孫ら 喬

添夢中になり餌運ぶ蟻観る孫ら
原気がつけば孫三人が成人し ゆかり

夢中になる時間が早く過ぎていく
一端の声で鴛夢中なり
古着物夢中で昔しゃべり出す
世渡りに夢中で掴む薬一本

重利 悩みことは翌日に持ち越したら駄目です。
こずえ 毎日歯を磨くように、その日その日に解決
したいものです。
高道子 歯をみがく今日の悩みを消すように 畑中 節子
孔一 歯をみがく今日の悩みを消すように 畑中 節子
【私の句】
ギャンブルに夢中になって身の破滅

添気がつけば孫三人が成人し ゆかり

世渡りに夢中で掴む薬一本

孔一

川柳塔鑑賞

同人吟 居谷 真理子

—6月号から

八十歳だと背中中に書いてある

山本 希久子

背中まで責任持たんでもよろしやんにっこり笑って顔で勝負しましようよ。

窮屈な意地を丸めてボンと放る

伊藤 玲子

私をしぱりつけてるのは、私の意地。

ボンと放れたらサツパリするでしょうね。でもヤドをなくしたヤドカリのように、あわててまた拾いに行ったりして。

子の頬を包めるように手を洗う

森山 文切

命そのもののような幼子。輝くようなその頬を汚してはいけません。手を洗います。心を洗います。

もう会えぬかも知れないがまた会おう

早川 遡行

こう思う年齢になりました。運が良ければこの世でまた会おう。運が悪くてもあの世でまた会える。

何でやるガス屋が電気売りに来た

板東 倫子

ほんまですねえ、この頃ワケの分からんこと増えました。「何でやる」と考えた「何でやねん」と呆れたり。

ひと夏の恋サンダルをぶらさげて

酒井 真由

そのまま映画のワンシーン。真つさらのサンダルで恋人と駆けた砂浜を、一人裸足で歩きます。今日で恋も夏も終わらせて、明日からは少し重たい秋の靴。

人生の午後のおやつに絵本など

矢倉 五月

弱ってきた目や心に難解な書物は要りません。甘くやさしい絵本を楽しみます。絵本には平明な言葉と絵で、深い内容が描かれています。

マ行のム何をされても不愉快だ

藤井 寿代

確かに「ム」って形も音も機嫌悪そう。「ム」さん、すみません。この句に笑ってしまいました。

強引に似合うと決めて赤を着る

木見谷 孝代

そう、ファッションは気合いだった!!

吸って吐くそれさえできぬ時が来る

夏目 一粋

母を介護して、呼吸って大仕事だなど思われました。それができなくなつた時は、もうそんな仕事しなくていいよということなのでしょう。

とりあえずとりあえず生き還暦に

井丸 昌紀

応急処置ばかりでやりくりしてきた気もする60年。とりあえずビールで乾杯。

行き先は行き着くところ万歩計

柿花 和夫

ヒマやし、健康のために歩きましょう。しんどなってアホらしなる所まで。

ひっそりと逝きます騒がしく生きて

松本文子

どんな静かな人でも生きるとは騒がしいこと。静かでない私が静かになるのは、魂があのだ行つた後。ハイ、皆様、おやかましゅうございました。

幸せになれと北上する桜

加島 由一

この句、心に沁みました。「冬は終わったよ。精一杯美しく咲きます。つらい人も私を見て幸せになってほしいから。」桜は最高のエンターテイナー。

ナース来て笑顔で開ける花の窓

富田 保子

咲いてますよ、と病室の窓をいつぱいに開けてくれました。ナースの笑顔は、病人の心も開いてくれます。

不器用な僕は昭和のバネ仕掛け

山野 寿之

ブリキの玩具を思い出します。手触りも悪く、動きもギクシャク。昭和の子供たちは、そんな玩具で夢を育みました。このような巧みな比喩を操る寿之さんが不器用とは……。ご謙遜ですね。

これでいいと声に出したら落ち着いた

藤原 大子

私に言い聞かせた私の声は、うろたえていませんでしたから。

天気よいだけでやる気が湧いてくる

田中 瞳子

同感です。自分の単純さが嬉しいです。

春の海電車大きくカーブして

白川 淑子

海の気を深く吸いこみたくあります。のどかな春は、人生が大きく変わる季節でもありますね。

顔じゃない心なんだと顔洗う

山崎 武彦

わかっていません。顔より心です。でも心は洗いにくいからひとまず顔です。

松園展甘い女は見当たらぬ

緒方 美津子

美人画で有名な上村松園。厳しい画の道に生きた彼女が、美しいだけの女を描くはずがありません。そしてまたこの句も厳しい作品です。

私を急かす桜が咲いている

辻内 次根

美しく咲いて潔く散る桜。しかし、桜も人も花の時だけの命ではありません。葉もよし、冬の枝もよし、と思いたい。

平凡な胸にもリボン付けておく

小谷 小雪

どこにでもいそうな私だけれど、胸の中はオンリーワンの世界。このリボンは「私は私」のしるしです。

私抜けます一億総活躍

竹村 紀の治

私も抜けます。号令かけられるの嫌いのんびりボンヤリしてるのが好き。

去年よりも重いひとひら肩に舞う

田付 絹枝

今年も桜を見ることができました。蕾、咲き初め、満開、そしていま落花盛ん。来年は、いや先のこととは考えずにおきましよう。今年会えたこのひとひらに思いを込めましよう。

美しい春を横切る霊柩車

岸 桂子

花咲き鳥歌う季節にも人は死にます。悲しみの黒が横切つて、春は一層切なく美しい。

寒がりの墓は日当たりよいところ

山田 耕治

お母さんは寒がりだったからね、このお墓なら安心だ。ぼかぼかと気持ちいいでしょ、お母さん。

ちなみに和歌山県高野山の川柳塔碑も日当たり抜群。緑のなかで同人諸先輩が祀られています。

水煙抄鑑賞

— 6月号から

松本 昌

君の花を咲かす優しい土になる

西田 美恵子

震災後出来たポピュラーな歌を思わせる。人間の本性、つまり性善説である。作者は女性、男の気持を良く理解した一句。

美術展どうも掴めぬ美の世界

宮宅 比佐恵

全くその通り、私の知人で芸大出身の人。日展入選十数回、絵筆一本では生活が出来ない。京都中心に活躍していたが、最近我が町に帰って来た。これだから勝負となる。

食べてるか元気でいるか金あるか

平井 美智子

どこかで聞いたフレーズ、そうだ、さだまさしの歌があった。親と名前をつく人は、全てが心配。しかし当の本人は意外としっかりしている。

一両電車迎える花の無人駅

栗田 忠士

我が住む土地と同じ過疎地と感じた。電車とあるからまだ我が町より上か、何せ電化はしてない。ディーゼルが一日数本走っている十人程度の乗客のせて。

つつがない暮しの中で今生きる

北原 昭枝

恙無いと、うらやましいかぎり、私は毎日十数錠の薬を飲み生活している。若い時に仕事事に追われていたのが原因と思っている。時には父を恨みながら。

ときめいてちよびり紅を差して行く

菅田 かつ子

どんなときめきか知るよしもないが、生きて行く事の大切さ、女の気持を知る事が出来た。それにしても病の御主人の手となり足となって看護には感服する。今後の健吟を期待する。

椅子少しずらし回りの空気読む

高山 清子

会の空気を読む事は人として守るべき事。少しずらすと巧い表現です。聞くべき所、聞かなくて良い所等々。質問者の品性が問われますので注意したいものです。

初夏の陽を知らぬ野菜のハウスもの

宮村 満寿恵

筍に蕨と灰汁も春の味

宮野 みつ江

春の味覚を詠んだものと思いいこに句の話をしよう。つまり現代は句の味が分らない程ハウス物で食卓がにぎわっているが句とはつまり上旬、下旬から本当に旬を味わうのは十日前後の事である。

妻が病みまず包丁が錆びてくる

片島 秀月

全く同感です。私も妻が入院した経験で毎日店屋物ばかり。退院した妻の第一声「男ってだめだ」そこで私は戦前の教育を受けた人はほとんど同じ？

去年見た花を今年も見れた幸

小栢 こずえ

「年年歳歳花相似たり歳歳年年人同じからず」

中国の詩人劉廷芝の作である。自然は変わらないが人の境遇はつねに変わりやすいという事。人の世の無常を現わす言葉である。日本で有名になったのは「和漢朗詠集」ののつてから藤原公任の撰である。成立は一〇一八年頃となっている。



恋心を詠う (1)

前号では気の合わない人との「不愉快な気分」の句を取り上げました。そのような面白くないことが多い世の中で、心身共に元気づけてくれることの一つは「恋」です。

恋焦がれるというほどのことでもなく、誰だって一人や二人ぐらいいは「ちよっと気になる人」がいるはず。その「ちよっと気になる」がもう少し進展すると「ちよっと好き」になり、そして「片思い」と進んでゆくでしょう。川柳作家諸兄は節度ある人が多いのか、この「ひっそり片思いで我慢している」句がたくさん見受けられます。

密やかに狼煙を上げる片思い
 鴨田 昭紀
 怪我しないところで見てる片思い
 今西 廣子
 気の抜けたソーダーほどの片思い
 古久保和子
 片思いちびりちびりと呑んでいる
 濱谷ひろし
 本物の愛ですずっと片思い
 福西 茶子
 片思い金いらんのがいいところ
 鈴木 浩

相手に想いを告げたけれども受け入れて貰えなかった「失恋の片思い」はいささか深刻。五七五にまとめるのも難しいですが、右の句すべて、恋する想いを誰にも悟られぬように、ひっそり胸にしまっている状況を述べています。

「密やかな狼煙」「怪我しないところで」「気の抜けたソーダー」「ちびりちびり」そして、打ち明けないからこそ「本物の愛」等という想いはよく分かります。恋の感情に損得はありませんが、敢えて「金いらん」と言っただけのが愉快。

隣より斜め向かいのかたえくほ
 もやもやと恋らしきもの芽を出した
 ハイタッチ交わしちよつぱり恋もする
 暑いからブラトニツクな恋にする
 手相見る君に触れたい一心で
 他意はないけれど逢いたい人がいる
 内緒だが会えばどきどきしてしまふ
 別れ際あなたが好きと気がついた
 上田ひとみ

右の句、いずれも「片思い」という言葉は使っていませんが、内容は明らかに「誰にも言えない想い」です。

また、作者を知らない鑑賞者に「青年たちの作品」と言っても疑う人はいないでしょう。人を想う純な気持ちに年齢の差などはなく、壮年も高年も恋すれば若者に戻るようです。

ただ、自分が「高齢である」と自覚した上での恋の句は、表現もいささか違ってきます。右の8句と左の6句を比べてみますと、左の句にはいささかの自嘲あるいは自省が含まれているように感じます。それは、「恋は若者の特権」とか「年寄りの色恋などみつともない」などという古い概念に気を遣っているのではないか。そのことよって「慎むべし」という自省が働いているのではないかと推定いたします。

浅い瀬でちやぶちやぶ遊ぶ老いの恋
 上山 堅坊
 さわさわと傍がうるさい老いの恋
 岩本 浩二
 老いらくの恋です低温やけどです
 樋口 輝夫
 晩年の恋はいちやつくこともなし
 今 愁女
 高鳴りをすんなり出せぬ古稀の恋
 緒方美津子
 平行線の恋抱いている八十歳
 宮崎シマ子

麻生路郎覚書

古谷恭一

六大家のうち関西では「番傘」の岸本水府(昭四〇没)、「川柳雑誌」の麻生路郎(昭四〇没)、「ふあうすと」の楢元紋太(昭四五没)が活躍した。私が川柳を始めたのは昭和四五年であったから、丁度これらの大家が亡くなったあとで、私は彼らのことは間接的にしか知らない。私の住む四国の高知は、これら三巨頭の影響下にあつて「番傘」の支部として「帆傘」、「川柳雑誌」の支部として「川雑高知(改題「川柳高知」)が発行され、私が最初に所属した柳誌は「川柳高知」であつた。主宰川竹松風は路郎門下の不朽洞会員であつて、その関係からか路郎門弟の橘高薫風がよく来高し、松風と懇談してゐた。その酒席に相伴し、私も話を伺つたことがある。当時の雑談で、麻生路郎は日本で只一人、川柳を職業にしていた、と云う話を聞いたことがあり、正直私は驚いた。小説家ならまだしも川柳なんかで飯が食えるのか、と半信半疑、何だか雲を掴むような思いをしたことがある。後から思うに、これは昭和十一年の路郎の「職業川柳人宣言」であつて、現代でもそうだが、戦前の貧乏な

時代のその企ては、やはり無謀に思えたらしく、大いなる褒貶を巻き起こしたようだ。しかし、麻生路郎はその意志を貫徹し、凄絶なまでの川柳家人生を送つたようである。

麻生路郎は、明治二二年七月十日尾道市に生れている。明治三七年大阪高商入学後、読売柳壇(田能村朴念仁選)に投句し、川柳に手を染め、明治三八年小島六厘坊主宰の「新編柳樽(改題「葉柳」)」に参加、川柳革新を旨指す六厘坊に深い影響を受けている。明治四二年、西田當百主宰の「関西川柳社」に参加、同社機関誌「番傘(大正二創刊)」同人となる。大正三年、河盛葎乃と結婚。大正四年、「番傘」同人を辞退し、新傾向派の川上日車と「雪」を刊行。大正七年「雪」に代つて「土団子」発刊。更に大正八年「後の葉柳」創刊。川上日車、木村半文銭、松村柳珍堂らと新しい川柳運動に没頭する。しかし「後の葉柳」廃刊後、「楊柳(発行者小島紺之助)」に社友として参加するも、大正十二年日車に要請された「小康」には参加しなかつた。そして翌十三年、路郎三六歳

で「川柳雑誌」を創刊することになるのである。

大正時代はデモクラシーが高揚し、自由主義、社会主義が台頭して来るが、川柳も連動する形で新興運動が盛んになって来る。森田一二や田中五呂八、日車や半文銭など伝統に対峙して革新傾向を強め、更にはプロレタリアの鶴彬など過激な川柳が生まれて来る。しかし、日車や半文銭と行動していた路郎はなぜか、途中で伝統に回帰してゆく。六厘坊の詩趣に富んだ作品には同調しても、あまりに観念的な傾向は路郎の肌に合わなかったのかも知れない。路郎の作品は、実生活に即した身辺詠が多いので、思想的なものとは敬遠したのかも知れない。路郎は「私は多くの悲しみと、苦しみと、悩みが横たわってあるだけです。それらの悲しみ、苦しみ悩みを凝視して生きて行くのが人生だと思わなければならなくなっています。私の川柳はそこから生まれて来る（中略）。苦しみを抜いた揚句の果てが実生活のうめき声を川柳の上に盛ろうとするところまで発達したのであります。」と井上信子の書簡で述べている。実体験に基づく川柳。日常の人事、叙景、喜怒哀楽の深耕が川柳の根本だと悟っていたものであろう。

麻生路郎は、大阪高商卒業後、東京や大阪で職業を転々とする。測量機械屋、金屏風店、大阪中央電信局、毎日新聞記者、病院事務長、喫茶店、古本屋、大阪時事新報社、

大正日日新聞社、文案、著述家あらゆる職業に就き、高いスキルがあったが、金銭に恬淡としていたものか、酷い貧乏暮らしであったようだ。路郎は、大正三年、霞乃と結婚。四男五女、九人の子供を儲ける。これほど職業を転々とし、子沢山、金にもならぬ川柳に狂奔する父を持つ家庭では、貧乏も推して知るべしだろう。

出世などもう問題にしてはるず

古本屋でもやりますと帰りゆく

また辞職ですかと妻子驚かず

気遣ひじみた夫をまもり老けている

路郎にとつて身過ぎ世過ぎの仕事より、川柳に情熱を注ぐことが勝っていたので、世渡り下手な、家族を犠牲にした貧乏生活が続く。

その日ぐらしも軒に雀がこぼれるよ

やうもまあ豆腐ばかりとあきれられ

一合の土もまたぬに子がうまれ

思ふまいとすれど月給はたりず

貧しさのながながしくも四十一

貧乏だけどおちつきだけは失わす

高商を出た路郎はその気になれば、何処でも相当の地位で迎えられるであろうに、狷介、一徹の故か、転職をくり返す。敢えて困難な道を選び、苦悩している。人間の苦悩が、肉体的精神的に深刻であるほど、創作欲も刺激され、良い作品が出来、人間的にも完成されてゆく、

とても考えていたのであろうか。路郎には、

春の僕ただ良寛をこころざす

と云う作品があつて、良寛のように俗世間の中にあつて、超脱俗的に生きたい希いがあつた。私たちは、俗世間の煩わしさから超越したいために文学し、川柳する悩みを持つと云うのである。川柳することによって、現代化された良寛になることが望ましい。そのように云う路郎は、どのような逆境の中でも、超然として生きていくようであつた。路郎は「川柳とは人間及自然の性情を素材とし、その素材の組合せによる内容を、平言俗語で表現し、人の肺腑を衝く一七音字中心の人間陶冶の詩である」と云う。人間陶冶とは、凡俗混濁の中に身を投じ、真の人間を築き上げること、路郎にとって最良の見本は、良寛だったのかも知れない。

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

ある時は子をだんばしでくひとめる

腕白がそうかやつたか体当り

子を死なし学校に子の多いこと

一周忌その弟を泳がさず

風よ吹け抱いてある子へ歩く子へ

路郎と云えば、何といつても子煩惱な親心を詠った作品である。いつの世にも通じる愛や人情に溢れる普遍の世界を描いていると言える。どんなつらい時でも希望を失わず、前向きに生きた麻生路郎だからこそ、その作品

は、明朗で剛直、矜持と品性を失わぬ詩精神に貫かれていると言えよう。

二階を降りてどこへ行く身ぞ

証文は要らぬしっかりやりたまへ

君見たまへ蒨葎草が伸びてゐる

時計がとまった淋しさですよ僕にも

桜かねと落ちついてゐる年になり

誰が捨てた草鞋が氷張りつめる

しがみつくほどのこの世でなかりけり

路郎には殊更、穿つたりデフォルメした作品は少なく、日常の感慨(心境)を淡々と呟くような三要素を逸脱した作品があつて、それが得もいぬ詩風景になつている。伝統の骨子は守りながらも、要するに自由に詠んでいる。平易で清新な作風が窺え、そうかと云つて、観察の鋭い作品もあつて雅趣に富み、路郎の柔軟さを思わせる。

涼むのかと思や女はついとたち

十二月まがりくねつたところで飲み

もう未練ないが糸屑とつてやり

人妻になつて卑怯な眼を使ひ

ふるさとの蝗右から左から

必要なことしか言はぬ国訛り

病院の廊下財布のまま渡し

つりの多いことに気付いた歩きぶり

まああがれ女房の風呂は長いから

すべりんこ親は涼しいとこで待ち
 計を聞いて炬燵の人も手を合はし
 品切れで向ひへ這入るとこが見え

成程と膝を叩いて私なんかは読んでしまう。誰にでも身に覚えのある、時代を越えてある情景で、生命ある句を創れ」と戒めた路郎の面目が躍如しているようだ。

時計までうつる神経衰弱症

お互ひがみな病院にゐるとも知らず

大正から昭和初期は激動の時代で、社会は戦時色を帯び、人々の生活は閉鎖的で生きづらくなって行った。そんな時代、芥川龍之介も「ほんやりした不安」を抱えて昭和二年自殺している。その一方で、何か熱に浮かれたように国家主義的同胞愛に包まれる大衆。殆どの日本人は軍部のプロバガンダにマインドコントロールされ、挙つて愛国的狂信者になってゆく。その実態は、日本人みな半病人と云う事実であった。この路郎の辛辣な作品は、似たような状況になりつつある現代の私たちを大いに警告しているように思える。

路郎が一風変わったいたのは、自分の子供に、当時としては奇抜な、ロンドン、アート、リリと名付けたことでも察せられる（クリスチャンだった故もあるのか）が、型に嵌まらない自由な発想の人物だったことは間違いない。

い。しかし、川柳だけはその奔放ぶりを処々に織り込みながらも、古典川柳の近代化に主眼を置いた。あくまで伝統主体の進歩主義であった。路郎は、狭量な意見を吐く既成派革新派には、どちらにも与しなかったが、「川柳の内容を進化せしめることは川柳家の当然なすべきことである。（中略）常に変化と進化が巧みに交錯するところにそのものの生命が躍動する」と、川柳が停滞することは許さなかった。その具体化策として、路郎は大正十三年「川柳雑誌」を創刊する。初心者指導、古句研究、川柳の社会化運動をテーマに「現代人の思想にびつたりと触れた詩と云えば、川柳の外にはない。我等は此の川柳によつて人生を的確に批評してゆきたい」と高らかに宣揚する。更に、情熱家の路郎は「専門家なき世界発達せず、能はざるにあらざるなり」との信念から、昭和十一年、川柳職業人を宣言。川柳雑誌社を路郎の個人経営として、敢然と社会に打つて出る。川柳の六大家はいずれ劣らぬ情熱家揃いだ、路郎は特に不屈の闘志を秘め、金にもならぬ川柳一本で立った。何とも破天荒、反骨精神に富んだ人物だ、私は麻生路郎を畏敬するのである。そうした川柳に命を賭けた先人がいたればこそ、現代の川柳は、豊かな実りを享受できるようになったものであろう。

（新思潮・正会員）



(投句229名)

毎年、この時期になると思うのです。早や一年の半分が過ぎてしまっただけだと自分は何をしてきたのだろうか、日々の雑事に振り回されてきただけのよう気がして、ほんの少し落ち込みます。

しかし、大過なく、そこそこ元気でやってこれたことに感謝し、そこに意味を見いだして、何となく後の半年を過ごすのです。

皆様方はいかがでしょう。

裏側は見えたことがないゴツホの絵

(評) ホントだ。そう言われてみれば見たことないですねえ。ゴツホだからこそ見てみたい気になってきました。

あの旗を撃てと五欲がそそのかす

(評) 五欲にそそのかされながらも、ギリ

大阪市 藤田 奏子

唐津市 仁部 四郎

ギリのところでも理性が打ち勝つ、そんなストーリーを想像しています。

お隣りの青い芝生が発火点

(評) 人のものが、素晴らしく思えてしまう時ありますよね。でも、小さな不満も積み重なればコワイことです。

不自由なことも沢山自由人

(評) 何でも自分で決めて、どこへでも行ける自由というもの。望むところだけ、これがけっこううんどういのです。

風呂敷を広げすぎたらこないなる

(評) こないなってしまうとしたか。広げすぎた風呂敷を畳むのは大変、でも、どこか人ごとのように可笑しいです。

もう何度妻に白旗あげたやら

(評) 内容は目新しくないのに、白旗をあげている亭主の顔を想像してしまいます。白旗イコール家庭の平和ですね。

さあおいでここは大人の秘密基地

(評) こんな場所のある人たちは幸せですよ。そこでちょっと充電して、またガンバルゾって言えるから。

雑学を入れるコーナーまだ余裕

(評) お話の中に、雑学が少し入っている

大阪市 津守なごさ

鳥取県 竹信 照彦

大阪市 江島谷勝弘

豊中市 水野 黒兎

大阪市 石橋 直子

橋本市 石田 隆彦

と何となく和みます。そして、雑学って意外とセンスが要求されるのです。

継ぎはぎの言葉で友に勞られ

(評) 本当に私のこと、心配してくれているのかしら。継ぎはぎ、というコトバにちよつと不安は残りますが。

原発のとなり格安分譲地

(評) これは何と手厳しい、川柳でなければ書けない世界かも。いのちと生活、本来、天秤にかけられないものですね。

ふたたびの恋愛畑花ばたけ

天運を信じて旗を上げました。夢からさめて幻を追いかけろ。繕ってとても丈夫な母の旗。

ロビンソンクルーソー救助待つ日がまだ続く

警官が立つと流れが悪くなる。いつまでも拗ねていないでご飯です。真っ先に撃たれた旗を振る男。

ばそばそといいい訳をする壁の穴

高槻市 富田 保子

堺市 澤井 敏治

米子市 八木 千代

鳥取市 土橋 螢

三田市 村田 博

宝塚市 田中 章子

河内長野市 山岡富美子

権原市 居谷真理子

大阪市 内田志津子

大阪府 寺井 弘子
パナマ文書情報開示押し立てる

河内長野市 木見谷孝代
傷心をパッチワークで補強する

尼崎市 清水久美子
保護色で生きるアンタを許せない

大阪市 高杉 力
もし僕が王様ならばこんな旗

大阪市 柴本ぼっは
いや！止めてうちのジーンズやったのに

箕面市 広島 巴子
一坪の庭にも四季の楽しみが

下松市 有海 静枝
哲学が頭の上に生えてきた

枚方市 海老池 洋
ステンドグラス羊の懺悔聞き飽きる

鳥取市 山下 節子
公園の遊具の配置思案する

熊本市 杉野 羅天
背後霊なんか私にいませんよ

八尾市 山根 妙子
終活の一步区別で日が暮れる

弘前市 高瀬 霜石
川柳人檻褸の旗は離さない

藤井寺市 鴨谷留美子
この箱を出るなど風がいうたから

松江市 石橋 芳山
ステンドグラス盗んで来たたらダメでしょう

豊中市 藤井 則彦
観客も超改革の甲子園

大阪府 坂 裕之
父さんの領域までも侵す母

和歌山市 楠見 章子
字幕スーパードだけで終わったスクリーン

大阪府 高木 道子
余生なお夢ふくらまず応援歌

芦屋市 黒田 能子
難民の受け入れ先の国がない

河内長野市 藤塚 克三
この7州取れば勝利だトランプ氏

笠岡市 藤井 智史
失恋の傷が痛々しく残る

藤井寺市 鈴木いさお
リオ五輪ちゃんど開催出来ませうか

三田市 久保田千代
国境という厄介な線がある

男鹿市 伊藤のぶよし
紛争の種も最初はこの程度

大阪市 平井美智子
借金も生前譲渡しておこう

大府市 真島久美子
路ん張っています昭和という土台

和歌山市 小久保和子
一辺の長さでいつも採めている

河内長野市 梶原 弘光
ISを国と言うたらあきまへん

鳥取市 福西 茶子
墓石の下の間取りを決めました

岡山市 永見 心咲
清正の銀杏城が崩れだす

青森県 松山 芳生
じつと耐えています騎手のひとり言

香南市 桑名 孝雄
むしろ旗立てて一揆が押し寄せる

大阪市 笠嶋 惠美
老いひとり今日も元氣と旗を出す

西宮市 西口いわゑ
蓮華たんぼもう帰れないふるさとへ

鳥取市 谷口回春子
連れ添った愛車と別れ歩く日々

弘前市 稲見 則彦
芸術は時に誤解をされている

鳥取市 夏目 一粹
マイナンバー僕が死んだら君も死ぬ

大山市 金子美千代
団結をさせた家族の一大事

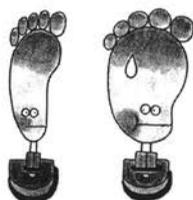
三田市 福田 好文
七十年いっそ国旗も変えましょか

尾道市 大本 和子
ひっそりと迎える過疎の手打ち蕎麦

羽曳野市 吉村久仁雄
つぎはぎの六文銭の旗の覇氣

9月号発表

(7月15日締切)



(平本 勝彦 画)

柳篋に2句

本社 六月旬会

◇六月七日(火)午後一時
アウイーナ大阪

早くも梅雨入りをした大阪。雨にも負けず、六月旬会は奈良市の小林佳世子さんの初出席を得て二二四名(投句九名)の参加で開催された。

今月のお話は、鈴木いさおさん。題は「豆秋に恋して」。こよなく酒を愛した須崎豆秋は、おでん屋で麻生路郎と知り合い、私たちが師と仰ぐべき大先輩の一人として名を残された。川柳界の一茶と呼ばれる豆秋への恋心を、まず自慢の喉で披露され、死期を悟った豆秋の名句「院長があかん言うてる独逸語で」が生まれたドラマをドイツ語を交えて再現されて会場を大いに沸かせたかと思うと、奥様への豆秋の遺書を紹介してしみじみとした雰囲気で参加者の心を包み込んだまま、お話を締め括られた。いさおさん一推しの豆秋の句けなげにも家主の犬を囀んで来た(真澄)

月間賞は谷口 義さん(大阪市)

(司会)真理子・篤(協取)五月・勝弘

(受付)靖博・舞夢(清記)憲彦

席題「輪」 川端 一步 選

搜索の輪の外にいた大和君
もうひと花咲かせたいから輪に入る
輪の中に藪蚊一匹まぎれ込む
輪の中に馴れて世間に馴染めない
ヒマワリのまあるい丸い夏の午後
青い輪に入り三年若返る
粗食でも一輪添えて和む膳
遺産からいびつになった絆の輪
花一輪室の空気をやわらげる
釈迦の手はメビウスの輪の無限大
怒涛浴び冬の輪島の鬼太鼓
誰ひとり欠けてはならぬ仲間の輪
許そうか怒りが輪廻せぬように
平和への願ひ五輪旗ひるがえる
車座と古い言葉が生きる村
狙い目がはずれ意地になる輪なげ
輪の中にめでたい人がひとり居る
人生の余白へかごめ輪が温い
火の輪でも君のためなら喜んで
輪唱の声にピアノもよく弾む
輪になって話そうきつと良い答
輪の中にいる安心と窮屈と
人の輪は素敵円でも楕円でも
かごめの輪うしろの正面いつも君

輪ゴムで髪束ねパートの朝を出る
被災者の輪に跪き両殿下

完司 友の輪を必死に守る子の世界
憲彦 地位協定輪禍といえど捨ておけぬ
扶美代 潮時へ小鳥静かに輪を抜ける
美籠 人の輪に欠かせぬものに酒がある
紀華 両輪もやがて一輪冬堂
俣子 歓声に次々輪っか吐く海豚
福貴子 輪廻とや生きとし生きる花遍路
あや子 パナマ文書悪徳の輪に鉈を振る
葉子 ほんとうは輪の中にある第三者
黒兎 輪になると強い一人は弱くても
富子 月の輪がまるでコンパスひいたよう

住

楓楽 直樹 隆彦 六点 たもつ 花門 寿之 俣子 保州 誠一 勝弘 富美子 妙子 真理子 朝子 満知子 富子 寿之 扶美代 保州 唯教

兼題「どっち」 原田 すみ子 選

与野党のどっちの水も甘いらし
 みぎひだりどっちの手にもある役目
 どっちでもよいと大きい方を取る
 どっちから撮っても歳は隠せない
 どっちみち反対をする妻である
 よく見て大きい方を貰います
 どっちかと言えば美人と言われます
 酒とるか長生きするか医者が聞く
 家どっち月に聞いている千鳥足
 どっちにも転ぶ私は浮動票
 どっちみち駄目と解って努力する
 どっちみち団栗だよと天の声
 どちらかと言えばアホやと思います
 どっち向いても老人ばかりニュータウン
 どっち道駄目でも夢をたのしまん
 どっちみち明日になったら皆忘れ
 どっちみちやる原発の再稼働
 どっちから来てもあっちへ行くのです
 どっちみち私の世話になるくせに
 勝ち馬に乗りたくない票が揺れ動く
 どっちでもいいよ私はリバーシブル
 美人だが隠しようないのどほとけ
 どっち似てであろうと私産みました
 どっちみち持って死ねないのに貯める
 かわいいのはどっちシルバーカーと杖

哲男 キヨミ 雅枝 ひろ子 宏子 修 六点 憲彦 隆彦 日の出 よしみ 眞澄 美智代 千枝子 正和 耕治 義 蕉子 妙子 純子 由一 美津子 耕治 眞澄
 どっちみち釈迦の手の中蜘蛛の糸
 じじはばのどっち攻めるか孫の知恵
 どっちみち到着点はあの世です
 どっちみち付けは私が負うつもり
 ご先祖がこつちと決めて僕がある
 ウサギとカメこの頃カメの日が続く
 晴雨兼用どっちつかずの雨の中
 しあわせの道はどっちも大差ない
 パパが開けばパパが好きと答えてね
 どっちでも気の無い返事目はスマホ
 八方美人どっちにしよう今日の影
 もてましたどっちつかずでひとり者
 佳
 唇を先に出したのはどっち
 人間を信じる方に賭けてみる
 どちらまでちよつとそこまであさよか
 どっちみちいつかはひとり渡る橋
 迷つたら黙って父の道標
 人
 おもてうらんどっちも私みなわたし
 都合により今日は性善説をとる
 天
 七歳の選択いのち守り抜く
 軸
 どっちみち支払わされる子の誘い

黒兎 順子 満作 修 久仁雄 扶美代 唯教 利子 五月 千代 順子 博 眞理子 保州 万紗子 寿之 哲子 眞理子 富美子
 金脈が裏にひそんだ金バツジ
 頑張れば五輪候補の脈残る
 人脈がつないでくれた切れた首
 三姉妹寄って脈絡ない話
 ネオンつき僕の脈出番です
 脈のある顔に手を振る選挙カー
 脈あるらしいコテンコテンにしこかれる
 医者らしい顔で脈とるインタン
 脈があるホップステップジャンプする
 脈々と次世代へ継ぐ反戦歌
 二枚舌脈乱さずに使い分け
 まだ脈があると思つて花贈る
 息継ぎが下手で脈拍乱れがち
 脈絡なしの話ができるのが熟女
 ときめいてもいいよ私の不整脈
 人脈も切れてしまった年金者
 おばあさんの人脈見くびるべからず
 脈がなくなつた割勘になつた
 人脈をたどつて甘い汁を吸う
 言い残すことは無いかと脈を取る
 脈を診た医者のよっしゃでよく眠れ
 脈々と続く政治と金の間
 妻は留守ただ今脈拍正常値
 透析で生かす命か脈の音

兼題「脈」 樹本 宏子 選

哲男 五月 狸月 まつお 靖鬼 憲彦 六点 昌代 希久子 狸月 裕之 千代 かずお 葉子 宣子 眞澄 蘭幸 玄也 武彦 裕篤 万紗子 哲夫

人脈が物言う時がきつとくる

脈脈と神秘の森に棲む神話

DNA良きも悪しきも脈脈と

アペノミクス景気回復脈が無い

インフラがちゃんと脈打つ街に生き

千年の樹齢古城に脈を打つ

人脈の広さで楽し予定表

脈々と私の中にある昭和

血脈をたどれば猿になるヒト科

地震予知大地の脈はまだとれず

凡人の家系脈々と五世代

佳

告別式父の人脈広さ知る

鉱脈が尽き楽園に戻る島

人脈の紅一点のあの効き目

脈々と伝統を継ぐ祇園の灯

脈々と路郎イズムをつなぐ句座

人

血が通う看護に脈がよみがえる

地

脈脈と伝えなければきこの雲

天

水脈を辿ると卑弥呼まで届く

軸

病み上がり静脈透ける手を見つめ

瑠美子

郁夫

福貴子

紀雄

堅坊

弥生

美籠

富美子

富子

真理子

すみ子

隆彦

奏子

ばっは

楓楽

花門

唯教

ばっは

よしみ

兼題「曲がる」

堀

正和選

客引きが曲がった胡瓜道の駅

絶妙なスローカーブで三振ショー

曲がり角靴が覚えていたのれん

都知事さんアンタの心曲がってる

交流戦ここがセ・パの曲がり角

爆買いもいずればぶつかる曲がり角

世の曲がりあぶり出してる週刊誌

アペノミクスくねくね曲がり意味不明

梅雨の角曲がれば暑い暑い夏

足止めて角を曲がったランドセル

あの角曲がればきつといい事ある

曲がる角間違え家の遠くなる

へそ曲がりふりしてダイヤゲットする

大の字で寝てもやっぱりエビになる

指切りの小指やさしく曲がってる

あの頃はイナバウアーも真似できた

その昔スプーン曲げて叱られた

曲水に一句流してみたいもの

その角を曲がると女の顔になる

整形で治してみますへそ曲がり

あといくつ曲がれば会えますかあなた

ターンする度に迷いが深くなる

直球で押せとあれほど言うたのに

くそ真面目たまにカーブを投げてやる

(興)五月

英旺

哲男

勝弘

福貴子

則彦

篤

富子

満知子

千枝子

良子

敏治

宏子

宏子

宏造

瑠美子

保州

万紗子

順子

真理子

宣子

利子

葉子

握夢

耕治

やつと来てすつと曲つた論吉殿

曲がるのは釘のわがままです大工

美しく曲げる匠の竹細工

七曲がり富士が見えたり隠れたり

横丁を曲がり曲がって僕の家

妄想を自戒海辺の曲線美

さあ食べて良いよセンマイくるりんこ

北山杉も曲がってみたい時がある

ひん曲がる程臭いドリアン好きになる

京の街路地へ入ってみたくなる

西の角曲がれば直ぐと言われても

親子だな曲がったままの目鼻立ち

折れて曲がるぼろい商売おまへんか

佳

胸よりも腹の曲線目立つてる

生き方にスローカーブも入れておく

曲がらないブレない父が居た昭和

振り向かず角を曲がった肩が泣く

学校では教えてくれぬ曲がり方

人

この道を曲がればきつとある出口

地

曲がり角で泣いた日笑った日

天

曲がったことしてない人手を挙げて

軸

カーブさえ投げればエース草野球

ばっは

六点

弥生

満作

完司

なぎさ

奏子

俣子

靖博

かずお

たもつ

武彦

博

すみ子

好

奏子

朝子

兼題「ヒット」 古今堂蕉子選

遅咲きで定年過ぎて持て始め
うららうらら山本リンダは生き残る
諦めて欲捨ててから出たヒット
下町からロケット飛んだ心意気
今年の梅酒とても上手に出来ました
ヒット曲常識のない歌詞が受け
大学発まさかヒットのマグロロ井
音痴でも唄える歌と売れ始め
超速球打てばヒットの二刀流
メガヒット打った七つの児の奇跡
釣り天狗今日の当たりは久しぶり
介護してこれぞヒットの紙おしめ
酔うたびに浮かぶ昭和のヒット曲
iPS再生医療大ヒット
四番打者九回裏に真価見せ
辛酸を嘗めたヒットは本物だ
大ヒット数々あった西部劇
代打逆転筋書きいて待つヒット
平凡な暮らしにキミというヒット
ロングランに反論はなしサザエさん
ヒット商品素顔のことは忘れなさい
ど真ん中打たれ君しか愛せない
一本のヒット歴史に名を残す
ヒットエンドランたまには夫婦息が合う
ヒット商品生み出す浪花の町工場

クリーンヒットブログへママの殴り込み
ライバルのヒットゾーンは広そうだ
明日には命はかない流行語
褒めて煽つておだてた末のヒットです
演出のヒットメーカー巨星逝く
どこまで飛んだか渾身のひとふり
打てぬ時フアンの声は矢に変わる
イチローのヒット数だけある努力
実況の声裏返る逆転打
ヒロシマへ大統領が来たヒット
乙女の折りヒットをさせたオルゴール
お気の毒当り所が悪かった

たもつ 宏造 進 よしみ 満作 良子 すみ子 章子 好 あや子 希久子 としお

人関関係直球だけでやってきた
堂々としつけてしたと言おうお父さん
一病を武器に堂堂渡り切る
堂堂と呼名しました夢でした
堂堂と防犯カメラ写つとく
背負う児へママはきっぱり非戦論
堂堂と生きた夫の日記帳
平凡が一番堂々と言おう
堂堂とレジで小銭をひとつずつ
縄文杉今人間を何と見る
ボケットは空っぽだけど堂々と
クレイからアリへ堂々生きてきた
どんと来い沖を見据える竜馬像
大黒柱の父は胡坐がよく似合う
堂々と負けを宣言して笑う
胸張ると影堂々といってくる
堂堂としすぎ目標の数字は
マッチ一本堂々と役終らせる
優先席スマホ片手に握り飯
堂堂と過失認めてから蘇生
堂堂としての鈍いのかも知れぬ
戦争はしない核など持ちせぬ
反対の拳は一人でも上げる
へこんだらあかん堂堂としてなさい

和宏 章子 日の出 千枝子 満知子 久仁雄 利子 章子 直樹 ばっは 完司 正和 美龍 憲彦 廣子 シマ子 信子 廣子 寿之 昌代 かずお 黒兎 花門 理恵

兼題「一堂」 小島蘭幸選

堂々とまわり好きな方に向く
 威風堂々モハマド・アリは偉かった
 堂堂たる髭だが当らない易者
 堂々とオンリーワンを生きている
 堂堂と全部が黒でないと
 公私混同堂堂と見せられて鬱
 堂々とチャイム鳴らしてくる詐欺師
 堂々と税で天ぶら食べた人
 反戦歌の狼煙を遮ってはならぬ
 大好きなピンクと堂々と生きる
 堂々とのれん張ってるビル谷間
 だれ憚らず人間をやっている
 知らぬことは知らぬと言える歳になる

佳
 戦つてモハマドアリは神になる
 若き溢れるオリンピックの抱負きく
 一と書く大海原のように書く
 てらいなくこぼで抱いてくれました
 堂々とと静かに咲いている

人
 堂堂と折鶴置いて帰国した
 俺のライバルは高倉健だった

天
 堂々と隠れるかくれんぼだから
 軸

堂々として七歳の無邪気

希久子
 武臣
 楓楽
 富子
 まつお
 憲彦
 狸月
 奏子
 富美子
 扶美代
 敏治
 といな
 久仁雄

由一
 葉子
 真理子
 (知)五月
 扶美代

あや子
 保州
 義

句会 燦 燦

五月句会を読む 岩崎 眞里子

震災地ただ黙々とヘルメット
 震災のニュースを胸で聴いている
 熊本の余震速報を見る度、大地震直後の映像が思い浮かぶ。
 そんな非情な現実を前にして、「鑑賞」って何だろうと思う。
 良い話不意に涙が湧いてくる
 笑わねば心たちまち枯れてゆく
 気を張って懸命に耐えている時ふっと聴こえてきた良い話。
 どっと溢れる涙：熱くなる胸。やつと戻ってきた体温を感じた
 時、ホツとして気付く。ああ私、笑ってる……と。
 ひとりだが上げた手迷うことはない
 一言に病み一言に甦る
 揺るぎない志を抱いて歩む強さに人は憧れる。でも己の弱さ
 を知った靱さに柔らかく包まれた時、打ち拉がれた心は甦る。
 ドクターが言葉の葉出してくれ
 闘病の友に帽子を編んでいる
 言葉の妙薬を処方出来るのは良く話を聴いてくれる先生。
 そんな先生に出遇うことができますようにと、祈りを込めて編
 む帽子。体験から、帽子には闘病を支える力があると叫びたい。
 脳にある心と胸にあるころろ
 いつだって胸は太平洋である
 名優の芸に無言という言葉
 正しさを説く脳内の心と、時々制御不能になる胸中のころろ。
 風や大嵐、平穏や狂気を孕む太平洋と同じ。人の内懐にも太平
 洋があると識っている父の無言は、名優の芸を越えて在る。
 歌うように奏できるようにありがとう
 五体五感を奏するような「ありがとう」は、天地融合の一時
 と思う。梅雨の重さを吹き飛ばしてくれた作品に「ありがとう」
 を言いたい。どうやら「鑑賞」とは、読者を元気にするらしい。

廣子
 (柿)和夫
 かずお
 楓楽
 ダン吉
 良一
 耕治
 理恵
 眞理子
 完司
 洋
 朱夏

老也油壺

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。
編集部

京都塔の会

山田 葉子報

蜂のひと刺し男一匹頓死する
辛口のことばを刺してくる相手
美しく生きる努力のバラのトゲ
熊本のごく地震が胸を刺す
刺す視線分かってますわ届いてる
世の中を孫から習ううそんな齢
習性を熟知している先回り
人間味習得出来ぬままヒト科
書道より日常役立つのは習字
パソコンを教える古希と習う喜寿
デジタルの世にたじろがずペン習字
曲り道逃げてばかりで何習う
大物のエラーに弾む週刊誌
たくさんのエラーをした人は丸い
人間の最大エラー核兵器
失敗に触れず黙って酒を注ぐ
エラーしてもエラーと認めないエラー
ワタシの財布カラでも夢は詰つてる

英 紀 牛 忠 文 福 欣 哲 求 保 則 弘 美津子
旺 乃 延 子 代 子 之 子 芽 彦 子 子 子 子 子

でもでもと御託ならべるあかんたれ
大学でも教えてくれない事がある
女ころすぐでもでもで焦れたい
ポジションはどこでもこなすでも補欠
何所へでもついて行きます陰になり
誰でもいいと言いが本音はそうじゃない
少しでも役立つて欲し募金箱
三代目頼りない奴でも社長
おとこでも料理もするし服も縫う
年寄りでも活躍する場ある句会
肌を刺す風にも春が感じられ
身のうちにひとつ種蒔く習い事

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目 一粹報

レジェンドの本音は負けるのが怖い
夫の留守背中に羽根が生えてきた
レジェンドが目指すオンリーワンの道
父さんはまだ満鉄に乗っている
学歴の格差を知った靴の底
ハグをしてくれる人あり惚けられぬ
さ迷えるホテル二匹は父と母
学歴に肩張る癖が一つある
子供向けニュースがパパに良くかわり
さ迷って最後に戻る妻の膝
学歴が心のレンズ狂わせる
袖の下使い阿るのは得てん
得てんだと今更寝言言わないの
得てんこと続けりゃいつかさまになる
今も尚藁いっぽんが見つからぬ

ふりこ 泰夫 万紗子 洋志 光久 かずお 美籠 北舟 宏子 満子 葉子 啓子
洋々 一瑤 無限 敏夫 三千代 地佳平 芳子 茂登子 隆浩 悦子 回春子 凱柳 房江

さ迷うて結局帰る元の道
水道水ただ出るだけでありがたい
泣きなさい必ず気持切り替わる
生まれつき女を口説くのは得てん
友弔辞本音を述べて叱られる
学歴が付いたか孫も一人立ち
過疎に住む鶴と亀とがレジェンドだ
何だかんだつてまだ学歴がものをいう
レジェンドの夢を描ける空が好き
レジェンドによれば美人は薄命だ
神様も神代七代オスとメス
エンゲルが高いよ家計簿が嘆く
学歴を問わぬ仏へ逢いに行く
我が心愛しき日々をさ迷うか
宇宙にもさ迷うゴミがあるらしい
九条がさ迷い鳩が落ち着けず
満中陰やつと居場所にとどりつく
貧しいが子には学歴つけておく
レジェンドの後ろ姿はぶれぬまま
学歴で人の値打ちは決められぬ
方言「得てん」は苦手・得意でないこと。

竹原川柳会(広島)

古田 太虚報

新しい命溢れる春は来る
春だ春だと芽吹く命が背を伸ばす
カブセルの命に託す医師と神
大切な命無くしたトンネルで
朝刊に命の文字幾らある
震災の思いをはせる命の灯

金祥 真理子 清信 野蒜 初恵 振作 蟹郎 とも湖 圭一郎 妻子 天翔 善平 勲章 昌鼓 茶人 賢悟 由美子 幸子 一粹 栄香

好きなことさせてもらっている命

短くて花のいのちが愛おしい

なんやかや言うて動ける体あり

お茶の間の幸せの壺磨いてる

初孫とアンパンマン読む幸せよ

価値観が違う幸せ毛糸編む

子や孫の優しさ老いの幸とする

小さいがこの幸せは捨てられぬ

飲み会になると輝くわたくしです

輝いて少年野球涙あり

晩学へ輝くものを手のひらに

輝いているのは母の晴れ姿

輝いて紡ぐ人生まだ七十路

宇宙便り桜輝く日本地図

咲いて散る桜儂さと人似る

ホロホロとところを解く難巡り

雑草の小さな花が愛おしい

盛りすぎて小鉢余白が欲しいなり

鯉のぼり泳ぐ元氣だ三兄弟

川柳塔なら

大久保眞澄報

震災地の再起を祈る槌の音

粗茶ですが言うて出てきたのは玉露

ジグザグに進めば見えて来た野心

検診の疑い晴れて酒進む

絵手紙の温もりもらう日の再起

茶飲み友達大いにつくり若く居る

初めにはぬるい茶次は熱いお茶

好きな点再発見のフルムーン

蘭幸

寛

輝恵

淑子

千代美

一徳

汎美

笹舟

昭紀

規代

笑子

栄恵

敬子

歩美

厚子

初音

比呂子

史子

もう一步前へ進んで生きていく

長寿国美人薄命やがて死語

再審が無罪の扉こじ開ける

進む世にやつとスマホでしがみつく

いい返事もらう茶粥に舌を焼く

誰にでもやがていつかはお迎えが

再起する女ひとりの舟を漕ぐ

発酵のやがて魅惑の美酒になる

やがてくる日を穏やかに受け入れる

やがて来る八十路の坂の佇まい

百歳を視野に希望の花咲かす

元カレにひよっこり出会う雨やどり

木洩れ日の野点利休の佐を飲む

再三のリストラ逃れ縄のれん

ロボットの介護でネコに看取られる

苦勞して結果の出ないダイエツト

振り向かずいつも私はゴーサイン

迷ったら真つ直ぐの道突き進む

そのうちにハグをし合える時は来る

大いなるやがてに種を播いておく

落日へ祈ればやがて澄むところ

川柳塔みちのく(青森) 稲見 則彦報

二次会はまかせておけと言う課長

ボクだけの母が居ります母子手帳

夢なんて持つ見るそして捨てるもの

何年ぶりだろう友がやって来た

一枚の遺影肌身に旅に出る

鎌持では爺ちゃん雑草許さない

賛郎

崇明

貫一

薫

完次

おたか

妙

弘子

奈津子

孝子

紀子

成子

秋一

泉

真澄

日の出

ふりこ

博一

和夫

理恵

富子

両川 無限 選

ごめんねの「ね」が軽やかに歌ってる

陽だまりを抱いて私の空を翔ぶ

公園も空も昔は広かった

一月は雨雨雪でなにもせず

厄介な罪撒き散らす軽い口

気晴らしに一千万の壺を買う

お互いが杖お手本は両陛下

補聴器の耳にヒアスは似合わない

鏡見てこんなの俺の顔じゃない

引退を決めて夕陽と飲んでいる

寿子

忠貞

雅枝

宏章

石花菜

寿之

和之

昌紀

かこ

くにと

佳句地十選 (6月号から)

榎本宏子選

不用品下取りだすか断捨離か

夜桜も昔ばなしをしたい人

何も彼もお天道様のメッセージ

折り合いを続け夫婦の顔が似る

試着してやはり似合ったしサイズ

鮮やかに効き過ぎました副作用

お釈迦様今日は貴方の誕生日

新しく覚えるための物忘れ

凱柳

仲雄

厚子

保子

修

満

忠昭

紀の治

喜八郎

義

ポケットの中に持つてる火打石
位牌というたつたひとつの記念品
勲一等棄て切れないでゴミとなる
擬装した貌を信じた友が居る
断捨離の手をにぶらせる記念品
江戸つ子に無い故里を持つている
終活に花束持つて勤練られ
持ち合わせ無くて眠った振りをする
生きているうちは胃袋ふくらまず
何度でも笑ひ袋を膨らます
少年の心膨らむ上野駅
生きようとして決めて手術を決意する
原爆ドーム戦禍残した置き土産
ひよっこりと昭和新生生まれ出る
寅さんにひよっこり帰る家がある
父と母ひよっこり逢って僕がいる
ひよっこりと病室覗き嫁帰る
ひよっこりと庭に顔出す福寿草
青天の霹靂我が家孫四人
風の中握られる掌の暖かさ
金色水飲んで百歳まで生きる
七歳を迎えた申と初詣
忘れちゃいないネクタイの結び方
酒を酌む話に空気丸くなる
風止んで華は正気を取り戻す

川柳塔すみよし(天阪) 森松まつお報

洋子 隆樹 一呑 黙人 初枝 慕情 花匠 柳子 ひとし 美鈴 小とみ 規子 呑舟 京子 龍馬 のぶよし つとむ きよし 和香子 氏加子 一花 ふさゑ 霜石 花峯 嘉 昌紀 としお

珍名がアダ名になって人気者
インパクト狙って珍名つける店
名前程珍しくない私です
妻主張良くも悪くも押し通す
手のひらで握りつぶしていたセリフ
人の意見聞かぬ桜は枯れてゆく
言葉には出せぬ主張を胃に落とす
戦するな主張している九条が
団栗の一つ一つが主張する
おしゃべりも涙も武器にする女
主張して反対意見にらみつけ
子供にはまず言い分をしゃべらせる
婆ちゃんの違い分いつも御尤も
痛いこと知った子供思いやり
痛い目に合つて人間生長す
オキナワの痛みは知らぬ星条旗
痛かった父の一言から奮起
平凡な日々が痛さをやわらげる
安受けて痛い出費に気がめいる
痛いこと突かれて出鼻くじかれる
懐が痛い春には祝事
生きるため痛さ辛さを持ち越えて
まだ癒えぬ痛み新たにまた地震
まっぴいとお金で済んだことだから
自転車にぼんやりするなおこられる
ぼんやりは脳の老化のアクセルだ
ぼんやりとしてたらすぐに肥えてくる
そこかしこゆるんできたぞないしよう
ぼんやりに見せて腕利き若旦那

柳弘 桃花 敏晴 公平 日の出 一歩 五月 福貴子 賢子 萌 満寿恵 郁子 半銭 大子 舞夢 いさお ふりこ 美籠 廣子 満作 シマ子 安代 満知子 勝弘 宏造 淳一 芳香 ばっは 妙子

ぼんやりと青い空へと溶けていき
絶望へぼんやり見えてきた希望
今の世はぼんやりできぬ物価高
ぼんやりと遠い記憶の母想う

重信 朝子 美世子 志津子

野口 節子報

川柳塔打吹(鳥取)

咲いたなら散り行く定めなにもかも
長年の礼もそこそこ永久の旅
そこそこで良いよ横綱荷が重い
本命で無いがそこそこ持参金
そこそこのお布施でごめん亡母さん
そこそこの暮らしと言えど最下層
そこそこの幸せがあり倦怠期
そこそこの勝ちにしておく同士討ち
そこそこの妻とピツタリ蓋が合う
そこそこの娘に返るチャンスくれた土
引き出しを開けたらチャンスやってくる
満開のチャンス狙って桜浴び
若者に春はチャンスを手振られて行く
絶好のチャンス手を振り逃げて行く
失言だ拡大コピーするチャンス
チャンスみて金魚鉢から飛び出した
ひたすらに好機を待つて黄昏れる
反撃のチャンスを待つている拳
チャンスだと言うのに軒かいてる
球児達鐘を飾る晴れ姿
どう見ても子に見せられぬ背中です

陽之助 久芽代 貴恵 道子 紀美恵 乾啓 瑞子 芳光 玲坊 野蒜 重利 久江 悦子 公恵 照彦 くにこ 美ツ千 紀の治 重忠 石花菜 美世子

ふるさとは姿変えても懐かしい

移り行く此の世の姿不安定

遺影に似た女鏡の前に居る

めしを食うときははりしいチャレンジャー

姿より心に惚れて五十年

神仏も姿暗ます闇がある

日の本の姿が滲む畳の目

和歌山三幸川柳会 武本

白地図をちらほら埋める定住者

ちらほらとじらして咲くなんてずい

走り続けてほろほろうろ落ちていく

ちらほらと咲くも散るのも人の道

思いやりちらほら混ぜたお説教

ちらほらと春を訪ねて今を解く

ちらほらの噂を煮込む社会鍋

双葉からもうちらほらとある格差

ちらほらと花の便りと喪の便り

許されてわたしを包む丸い風

風呂敷でふるりの風持ち帰る

落日へ風と紛れてゆく命

向きを変えると追いつく風になるので

譲り合う心へ風が柔らかい

風ぐるま義理の重さを知っている

隙間風吹いて気づいた倦怠期

風見鶏うまい話をさがして

春風や季節まよって傘寿生き

さわやかにこの世おさらはする呪文

レモンスカッシュの泡にも似たり片思

龍枝

妻子

みち子

完司

滋

三津子

節子

碧報

明子

知香

章子

准一

八重子

悦子

昇

起世子

みつ江

美枝子

和子

幹子

保州

美羽

昭枝

久

よしこ

弘子

碧

淑子

さわやかな別れが残す手の温み

さわやかなリズムで今日も動き出す

菌に衣を着せぬ祝辞に湧く拍手

さわやかな挨拶くれる通学路

ラグビーの戦い終えてノーサイド

さわやかに生きる笑顔は母譲り

自転車の風巻き起こす通学路

さわやかな朝一番の笑顔よし

走り去る乙女の後にレモンの香

赤ちゃんが転ぶ芝生が暖かい

誘われて今宵の風があたたかい

耐えて来た手の平だから温かい

サツチモの歌が心を温める

温かい心が弾むボランテア

辛酸を嘗めた器が温かい

富柳会(大阪) 関

ひとつだけ峠を越えて荷を降ろす

ダイレクトに母の涙は子を論ず

ダイレクトに言うて胸ぐらつかまれる

空間に溜息一つ落ちて

したたかな野草の意地を借りて咲く

想いまだ決まらぬままに髪洗う

炎を抱いて想いを戻す女文字

行間に好きなセリフを伏せておく

群青の海はあの日のわたし色

紺碧の空に溶け込む青い海

初キッス鼓動高鳴るダイレクト

ゴールまで明日への夢を温める

みね

当代

菜摘

ひろ子

義泰

あき子

まさ

幸子

宏枝

次根

絹子

日香

日出男

義雄

純子

よしみ報

文重

常男

隆光

登子

田鶴子

伸雄

信子

慶子

壽峰

高鷲

澄子

退きながら貴方をほめるダイレクト

逆縁の不条理神に直訴する

雑草を愛でて強さの謎を追う

背中の母に重くなった目は涙

跡継ぎになれと赤子を膝の上

五線譜にこぼれた愛の夜想曲

妻の口たまには投げける変化球

直球の正論本音ではカーブ

横座りすれば自信がゆるかぎ出す

空想は天まで伸びていく大樹

青い青い檸檬に悟された呪縛

全身に自由ばかりが寄つて来る

川柳塔わかやま吟社 川上

子育ての母の枕は眠らない

苦も楽も母は笑顔で家守る

しわのない似顔絵書いて母の日に

おめでとうにっこり笑う聴診器

ゆるぎないものおふくろという大地

今となり母に感謝の手を合わす

母はまだ独りで行けるコンビニへ

思い出は祖母の方言耳の奥

ガンバルケン被災地に書くメッセージ

なんやわからんけど日本語やろなあ

みくびつた里の方言抜けきらさず

そうどすなと舞妓はんはよく似合う

方言の奥に故郷の風が吹く

心配の種が立派に発芽した

まとも役心配りの大切さ

朋子

仁

深雪

未知

武人

奏子

一文

寿之

アキ

欣之

よしみ

森子

大輪報

めぐみ

和香

まさみ

大輪

夕胡

ほのか

英子

秀子

富美子

知香

紀子

紀久子

京子

悦子

准一

だんだんと非常袋が重くなる
 シンデレラの夜目覚め朝のけだるさよ
 くねくねと生きて頂上見当たらず
 草書体読めなかつたって美しい
 イエスともノーとも男くねくねと
 握りでもあるのか蛇の歩き方

川柳塔唐津(佐賀) 仁部 四郎報

新緑のもみじもいいねさわやかで
 ネクタイをきちんとして十八選挙権
 さあ傘寿そろそろ老いの仲間入り
 いいわけを云つたつもりが喧嘩種
 こんなにもスリムだったと写真見せ

八尾市民川柳会(大阪) 土田 欣之報

人間の雑木林は多色刷り
 渋滞は事故じゃなかった前にバト
 段畑原風景は畝の青
 天辺を探れば見えて来た矜持
 小学校からつきあっている真の友
 目を凝らしそつと広げた袋綴じ
 スーツより制服似合う三代目
 目を凝らし見えて来たのは人の情
 こつそりと育てた花へ老いの夢
 秒針を止めて下さい五月間
 曲者も風も味方と思う不覚
 わたくしの裏をわたしが責めて春
 何枚も重ねて花になつてゆく
 淋しさを聞いて希望を手持したす

小 雪 弘 子 寿 子 よしこ 克 子 日出男
 四 郎 蜂 朗 節 子 高 明 寿 之 清 朋 子 一 文 高 鷲 紀 雄 慶 子 耀 一 加 央 里 常 男 森 子 欣 之

南大阪川柳会 津守 柳伸報

まっとうに生きよと母に導かれ
 手術室で出合つた神に導かれ
 一点の導くあかり希望の灯
 視野広い友の話に導かれ
 女房の導くままに生き元氣
 天国へ導くありがたいお経
 寡黙なる父の背中を導かれ
 パンストが残念がつている足湯
 靴下をはくの時間にかかる父
 クリスマスに大きい靴下用意する
 パンストを脱いで淑女が足湯する
 野球選手のスーツキンは花盛り
 靴下のゴムが伸びても履く昭和
 靴下を脱いで足からリフレッシュ
 満開へ冬をしのいで花咲かせ
 水だけで飢えを凌いで救助待つ
 闇市の芋を見ながらしのいでた
 ささやきか寝息か真夜中をしのぐ
 避難所でお互いさまをしのぎあう
 若夫婦引つ付き合つて暖保つ
 大戦をしのいだ顔にある自信
 百玉玉こつこつ貯めて二十万
 こつこつの西川きよし貯めている
 こつこつと病めど励みの没句積む
 入つてる言うのにこつこつうるさいな
 こつこつと貯めて子供に甘い脛
 こつこつと薄利多売で財築く

あさ子 たもつ 弘委智 更紗 和雄 克己 楓 楽 恭 昌 柳 右 子 シ マ 子 歌 留 多 一 歩 武 臣 弘 泰 栄 子 柳 修 柳 弘 柳 仲 忠 昭 博 勝 弘 タ カ 子 昌 紀 弘 子

少数意見もつともなれどややこしい
 サインより難解岡田監督語
 ややこしい話の時は遠い耳
 上る下るややこしい街京都弁
 ややこしい話は止そうワンカップ
 志華子

川柳塔おっぱい吟社(香川)川崎ひかり報

甚五郎の三猿三態のポーズ
 姑が拍手を送る嫁の舞
 懐メロのギターの色色亡母しのぶ
 手の平で踊り踊らせ嗚呼夫婦
 手直しをするとまだまだ生きられる
 消灯のそこから先の深い闇
 ひかり

ほたる川柳同好会(大阪)水野 黒兔報

おや卒寿囃んだ福豆四千余
 生き方のヒントになった豆知識
 独りでも五合は炊くよ豆ごはん
 安眠を豆電球に見守られ
 父の日も枝豆だけの独り酒
 足のみめフルマラソンの記念品
 ふるりの気分にはさせる豆ごはん
 心では許してるのに出ぬ言葉
 許すこと学び大人へ第一歩
 一年の無沙汰許したカーネーション
 おおかたの事おおらかに皆許す
 泣いてまた許してもらう子が可愛い
 見て見ない振りして許す子のやんちゃ
 咲いてるよいつでもおいで故郷へ

ルイ子 東 風 実 なぎさ 志華子 弘 放 任 よしみ はつ恵 いさむ ひかり 勝 順 子 正 子 奈 津 子 堅 坊 郁 子 黒 兔 美 智 代 純 子 美 佐 子 久 子 長 一 柳 童 春 代

さみしさにいつもの飲み屋ふと入る
空の青今日一日のいい予感
反省の素振り見せるが辞任せず

川柳茶ばしら(愛知) 関本かつ子報

とほけても妻には分かる盗み酒
転動が急に決まった家の中
バタバタと音する闇へ寝つかれず
足腰が不自由な分よく喋る
アルバムの母にこめんねばかり言い

ブラザ川柳(大阪) 坂上 淳司報

贅肉を放るのに高いエステ代
我が暮らし無駄は無いけど腹にある
騎馬戦の後ろ攻められ帽子泣く
王よりも飛車角まもるへば将棋
宝くじ夢追いかけた五十年
道路補修無駄に予算を使い切る
緊張の会議社長の無駄話

無駄話節に掛けて拾う知恵
枯れてきて昔の無駄が活きてくる
賭博して花火と散ったリオの夢
足広げ席を分捕るすかんだこ
穏やかな笑顔の下に鬼潜む
被災地で分捕り合いがない日本

はびきの市民川柳会(大阪)永田 章司報

どこまでも嘘つき通す白ペンキ
不自由を知って自由の有難み

わたしても真白い灰になれるかな
かあちゃんに感謝してますこれからも
五十年連れ添ってくれ有難う
主婦できるあなたたいるのが誇りです
腕組の中へ名案湧いてくる
チャレンジは何でもしよう二十代
多数決でも少数を見捨てない
ありがとう言うて言われて輪が和む
母の形見の組紐キリリと引き締める
いいわけにでもは禁止と父の声
結婚が勝ち組だったのは昔
口癖にならぬ程度にありがとう
少額の寄付でもこころ届けたい
温泉はいいでも地震は嫌です
古希過ぎて生ある今日を感謝する
双子でも互いに違う主義主張
水加減すれば古米も旨く炊け
でもでもと歩き回った元の道
でもだめと採める沖繩そのままに
でもがある三角形の底あたり
恋からを組んで鴛鴦五十年
故郷を飛び出したけど捨て切れず

みつこ
光 男
アヤ子
千鶴子
泰 子
雄 太
いさお
登志子
ヨシ枝
喜久子
さくら
シルク
ひろ介
フジ
かつ美
高 鷲
ちづる
清 一
洋 一
美代子
欣 之
章 司

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西 茶子報

厄介な事は時効を待つことに
厄介を当たり前だと思ひ込む
ちよつとしたミスだが火の粉浴びている
厄介をかけますなーと扱き使う
厄介なことに貴男は超頑固

孔美子
和 子
盛 桜
照 彦
美ツ千

通帳を見ては溜息「はー」と吐く
あの時はちよつとの違い今格差
厄介な孫が火種を持つてきた
神経過敏ちよつとの音の心拍数
睨むから笑った顔が尚怖い
年金の暮らしに通帳軽くなる
睨んではいるが優しい論しの目
この頃は厄介者が多すぎる
北の空から厄介なものが飛ぶ
益暮の通い通帳忙しい
知らぬ間に厄介者になつていた
チラチラと眼鏡の奥で睨む父
睨みをきかすお客さまが来たという
厄介な円周率は僕が出す
通帳の残高さみしサクラサク
厄介なクラゲに漁を邪魔される
睨んでも恐れ入るよな妻でない
九十を超すと厄介者になる
好物も度々貰うと厄介
通帳に頑張った跡はつきりと
味噌汁の豆腐が睨む朝寝坊

ゆり子
綾 子
重 忠
弘 子
実 満
八 重
茶 子
文 道
かおる
京 子
みさ子
富久江
小 鹿
蟹 郎
恒 子
妻 子
拓 庵
鈴 子
すみれ

長 柳 会(大阪) 辻村 ヒ口報

他人めく孫の成長目を細め
良し悪しの言葉選り分け勝手耳
分捕つてしぶしぶ渡すお裾分け
旅が好きスーツケースは軽めです
下駄箱に無駄な靴下駄顔揃え
あの仕草あの癖さへも我が身かな

ヒロ
洋 二
たけし
正 博
マ サ
純 風

恋すれば他人の空似よく見かけ
野に咲く花心に浮かぶ好きな人
道に書いた陣地分捕る幼い日
無駄口をきいて和ます人気者
七冠を手にし防衛忙しい
奪取した愛大切に風薫る
生きているそれが無駄だと言われそう
参観日他人のふりに帰る子よ
待ち侘びる娘を分捕つてくれる人
丹精の野菜カラスに分捕られ
ピアガーデン仮面を外し一気飲み
攻防戦どちらにも負けぬ恋敵
戴いた命大事に無駄にせず
分捕られすつかり瘦せた父の脛
やれることやつて一生無駄にせず
無駄な子は一人も居ない母の胸

川柳塔さかい(天阪)

村上

玄也報

腹の虫一晚寝たら皆忘れ
お静かに痛みが移動する気配
けんか腰やっぱりあんだ気が小さい
成長を助けてくれた本の虫
欠点は野心家にして気が多い
大事なこと元気なうちに喋つとこ
お喋りのなかで思案が解けてくる
桜散り毛虫我が世の夏が来る
少々の痛みは金で済む話
孫のためセミもバツタも手で掴む
化粧などやめるとき素颜きれいだよ
喋らずに墓まで持つていく秘密

光 弘
辰 男
も こ
三和子
靖博
ふみ
直樹
旅人
正美
孝代
和子
ともこ
幸子
福子
隆彦
和代

昆虫の鳴き声聞けばホッとする
警告と感謝してますこの痛み
働き蟻の稼ぎから取る消費税
アルバムを開くと青春が喋る
被災地の痛みがわかるボランティア
健気な子火傷も辞さぬ危機救う
定年後虫の居所悪い妻
傷口に余震が塩を塗りたくる
口止めの論吉時々謀反する
忘れ去る鎮痛剤を持つヒト科
瘡蓋をはがしヨーチン塗つてやる
汚染され帰れぬふるさとの痛み
乗り換えた途端方言喋り出す
都合悪くなると横文字で喋る
色香まだあるのに虫が寄つて来ぬ
赤ん坊のバブバママは聞き分ける
此処だけの喋りが明日はひと回り
お喋りな人に打ち明けてからの鬱
ケチ臭い奴だがとても几帳面
ロボツトが喋り上手になる怖さ
回虫と聞けば昭和を思い出す
恵まれて他人の痛みに気付かない
柔らかな笑みで痛みに触れてこぬ

川柳大阪

山崎

珠生報

月に兎夢があつたねその昔
月満ちて待ちに待つてた呱呱の声
満月に亡母の笑顔をだぶらせる
どっちみち晴れる月夜の内緒ごと
諦めぬ忠実誓う辺野古基地

日の出
清晋
倭子
唯教
八千代
舞夢
和夫
誠一
好
敏治
憲
憲彦
五月
澄空
妙子
時雄
雅明
みつこ
としお
玄也
天笑

真っ白いシャツに匂いたつ謙虚
忠実に復元願う熊本城
忠実に描いた似顔絵叱られた
忠実に距離を守る老いの恋
忠実に遣伝子だけは残される
忠実に被まで書いてうとまれる
忠実な恋をしてます片思い
忠実な部下よく見ればイエスマン
主婦ボストイつても空ける旦那様
ボクの名が「バナマ文書」に出てこない
ボストなど要らぬ無償の愛欲しい
大阪の人ねとばれるそうやねん
生きざまの手本示した父の背な
母さんの何も言わないのも教え
亡母の背が教えてくれた生きる術
九州の地震よ早く収まって
好き勝手自由自在なえ身分

城北川柳会(天阪)

近藤

被災地に又の無情の春の雨
間違つていないか手のひらを聞く
恐ろしい妻にも影で手を合わす
デイサービスでひょいと別れた妻に会う
父の日に子と孫が来て祝い酒
影法師みどりの風に弾み出す
ライバルの会釈うなじにある火花
こよりびんほくもまだまだ役に立ち
いらいらとするが信号守つてる
首覚悟内部告発直訴状
巡り来る幸を信じて汗を積む

わこ
珠生
万紗子
堅坊
芳香
まつお
柳弘
武臣
克己
勝弘
紀雄
蕉子
一歩
かよこ
功司
節子
求芽
五月
弘泰
佐津乃
洋志
たもつ
勝弘
朝博
朝子

元氣かの一言でいい親の幸
一巡り花の蜜吸い飛んでゆく
群れの中間性がキラリ光る君
若かつた真つ直ぐだった悔いはない
滾る胸若人のごと楠若葉
葉桜はけれども味もなく品保つ
淋しさの海に首まで沈み込む
やんわりとお小言みかん剥きながら
言葉など要らぬ笑顔で答えてる
人生を謙虚に生きて癒し銀
人の群掻き分け生きる質流れ
病身をやんわり包む朝の粥
生かされて今日も感謝の血が巡る
店先の群れ見て並ぶあわてもの
ここで皆償いせよと閻魔待つ
手かげをしている母の平手打ち
喝采へ黒子の汗がよく光る
やんわりと言えば鎧も脱げていく
腹の虫やんわりアメで慰める
やんわりと刺も包む京言葉
念願の句集発刊五月晴れ
春風春に別れの花筏
わが家にも籬の外れた桶ひとつ
父母の墓やんわり拭いて侘びている

川柳塔まつえ吟社(鳥根)相見 柳歩報

賢子 千恵子 秋香 武彦 直樹 美智子 郁夫 和夫 満作 集一 あさ子 星雨 公子 弘委智 修 一步 野鶴 榮子 堅坊 克己 縣作 高志 志華子

レッツゴーステキが多い今日にする
八月の記憶の中の水たまり
記憶が逃げそうで早くフタをする
青春の気まずい記憶消せぬまま
ハローニカ記憶の底で鳴っている
ころにははしていただいたこと記憶
願い事記憶している五円玉
わたしの心消えたか雨に流れたか
消火器をください発火しそうです
我が悩み小さきことよ地震地よ
アナタから消去されたくない私
消しゴムでたやすく消せぬ悪い過去
消しゴムで消されたクスがくやしがる
もみ消した噂ビールで盛り上がる
今日もまた地図から消える過疎の家
靖国の桜考えながら咲く
国引きで生まれましたよ鳥根県
テロを生む国も言い分もつている
故郷の湖波打つ音も国なままり
雑音の陽で国歌のすすり泣き
連休の陽に当ててやる足の裏
連休ではばの財布が風邪をひく
連休は笑って泣いて主人公
連休中どつか連れてけ攻撃だ
連休の疲れを置いてジェット音

あかつき川柳会(大阪) 山本 昌代報

哲子 桂子 ゆき 俊子 千里 柳歩 文子 ちえこ 寿代 邦代 孝子 ひふみ 堂太 久絵 雪代 芳山 弘充 博子 左余 美智子 玲子 幸子 とも子 紗季 草庵

おもしろい鳥獣戯画は超アニメ
オバマさん核の悲惨さ篤と見て
四十年疲れがたまる原子炉も
甲子園に魚落とした鳥に喝
新社員余裕も出来てピアガーデン
危篤から不死鳥のごと神の加護
母を看る話空気が動かない
ああ初夏だべババミントの風が吹く
父ちゃんは空気入れればまだ走る
新玉葱わたしを泣かす初夏のね
接待の疲れを癒す一人酒
沈滞の空気に投げてみる小石
憲法を子供に話す五月晴
疲れると音をあげやがる寺の鐘
国境を跨ぐ平和な渡り鳥
天空の峰鳥葬のレクイエム
聴いている方が疲れる口達者
聴いてる優しい気持ち欠けて行く
幸せを胸一杯に鯉のほり
居心地のいい空気あり長居する
広島へ行けば本物平和賞
同じ事何度も訊いてやる介護
被災地の空を旋回してる鳥
フクシマが忘れた頃に来る気配
定年の夫毎日家に居る
初夏の風何か期待を匂わせて
息継ぎはみごとあしたを生きていく
空を掴んでマジックの見せどころ
リトルボーイ腰を折りたくない空気

哲男 敏子 照子 美春

和 福貴子 満知子 紅絵 朝子 栄子 克己 紀乃 和代 隆昭 英夫 義泰 秀夫 欣之 久美子 廣子 一志 康信 一文 壽峰 信子 武

羽繕い終えた鳥から青い風
熊本の地震案する雀二羽

岩美川柳会(鳥取)

山下

節子報

知 柴
たもつ

小回りがきいてずつこけ人気者
母亡くし姉が一人で切り回す
美人の湯個人差ありと札かかり
さりげない亡母の根回し後で知る
究極の個人主義だなゴミ屋敷
孤独死の話題を避ける老いふたり
個人主義行き着く先の世は砂漠
胡麻粒のその私ここに居る
詮索はよそうそれぞれある事情
ほろ苦いビールがうまくなる五月
苦手同士ひよんなことから手を結び
繕った笑顔に時雨する介護
和の香り市松模様世界駆け
母の日も両の手遊ぶ暇がない
記念日を家族そろって祝う膳
反論に耳に空しい風が吹く
嗅覚で金に群がる族議員
風雪をしのぎつづけて夫婦独楽
いい目覚め今日もする事たとある
連休が過ぎて繰り出すお年寄り
借金はすぐ作れます膨れます
息子からネットで届くカーネーション
又来てね心裏腹息子宅
山笑うやわらかな色風みどり
さりげなく話題を変えてくれた人
川柳と笑顔が何時も居てくれた
春風に乗った綿毛は嗜好き
まだ古稀だきつといひ風僕に吹く
そわそわと隠し読んでる回し読み

順 子
じろう
宣 子
弘 子
章 子
秋 果
一 德
洋次郎
ひとみ
正 和
い わ ゑ
哲 男
邦 男
わ こ
武 臣
千 代
茂

やさしさを下さいわたし冷えてきた
妻といたただそれだけの日水なの
どこの鍵かわからないけど捨てられぬ
虫食いを上手にかくすアツプリケ
広島は待つておりますレクイエム
父母が逝き古里遠くなりました
歩を緩め花愛でながら第二章
自信家と天狗は鼻を隠さない
知識より知恵を出し合おうボランティア
老いの恋隠しきれないサムシング
クリムトが描けば恋も黄金色
手に持たぬハガキは今日も出し忘れ
一生は幸せさがす旅芝居
守備範囲広くてエラーの数も増え
見せかけのやさしさそれがややこしい
おはようさん金魚にエサをやる日課
水に流すための握手が嘘つぽい
老い先はやさしい人になるつもり
ありのまま応えて敵しベルト穴
ばれぬかと心の汗が拭えない
眠る時ややさしい人の句集読む
ドン底で暮した事は喋らない
スランプを抜けてやさしい風に会う
やさしさに触れ突張り折れる音を聞く(水)
隠し事すぐ文春が嗅ぎ付ける
幸福の切符はいつも母が持ち
坂の上で待つてくれてるひとがいる
求 芽
武 彦
美 津 子
雀 舎
き ら り
比 ろ 志
ヨシエ
歌 留 多
健 二
真 理 子
弘 之
則 彦
美 智 代
見 清
久 子
耕 治
千 鶴 子
武 臣
美 龍
満 作
宏 子
正 彦
楓 楽
満 子
玲 子
葉 子

則彦報

ネギ畑ネギを褒めたらネギくれた
ズバリ言う君に金かす金はない
気がつけば野菜が残るボクの皿
最高の味方はズバリお金だな
泣き真似をしつつ逃げ道考える
まだ若い四苦八苦です五七五
飛び跳ねて寝ころがって世は若葉
おっ噂のズバリ一声幕が引く
考えたあけくやっぱり金包む
覚悟はしても痛の告知は気がめいる
山程の野菜作って青汁買う
野菜にも私の心届く春
野菜を摘みにおいてと山笑う
小話のおちであなたの急所突き
太陽を沢山食べた夏野菜
イエスノー上司へズバリ自信つく
川柳を考える間に鍋焦がす
若者の意見も聞こう一理ある

西宮北口川柳会(兵庫)

藤井

宏造報

紀 華
光 久
浩 司
武 彦
盛 夫

苦い過去棘あるバラを抱いている
しゃしゃり出る人がいるから座が弾む
しゃしゃり出てひっつき回しなくなる
子の喧嘩親が出るからややこしい
控えてたくまモンついに前に出る

節 子

又来てね心裏腹息子宅
山笑うやわらかな色風みどり
さりげなく話題を変えてくれた人
川柳と笑顔が何時も居てくれた
春風に乗った綿毛は嗜好き
まだ古稀だきつといひ風僕に吹く
そわそわと隠し読んでる回し読み

盛 夫

又来てね心裏腹息子宅
山笑うやわらかな色風みどり
さりげなく話題を変えてくれた人
川柳と笑顔が何時も居てくれた
春風に乗った綿毛は嗜好き
まだ古稀だきつといひ風僕に吹く
そわそわと隠し読んでる回し読み

順 子
じろう
宣 子
弘 子
章 子
秋 果
一 德
洋次郎
ひとみ
正 和
い わ ゑ
哲 男
邦 男
わ こ
武 臣
千 代
茂

又来てね心裏腹息子宅
山笑うやわらかな色風みどり
さりげなく話題を変えてくれた人
川柳と笑顔が何時も居てくれた
春風に乗った綿毛は嗜好き
まだ古稀だきつといひ風僕に吹く
そわそわと隠し読んでる回し読み

順 子
じろう
宣 子
弘 子
章 子
秋 果
一 德
洋次郎
ひとみ
正 和
い わ ゑ
哲 男
邦 男
わ こ
武 臣
千 代
茂

又来てね心裏腹息子宅
山笑うやわらかな色風みどり
さりげなく話題を変えてくれた人
川柳と笑顔が何時も居てくれた
春風に乗った綿毛は嗜好き
まだ古稀だきつといひ風僕に吹く
そわそわと隠し読んでる回し読み

盛 夫

本当の気持ちをそつと聞く鏡

川柳あまがさき(兵庫) 大浦 初音報

身の丈のくらししひかりが旨い
 地震かなぐらり足元酒のせい
 どこへでも行ける足です撫でてやる
 出番増え新人競うタイガース
 耳にセミ目に蚊が飛んで賑やかし
 鎌の月ブランコするか兎たち
 遙かなる月の砂漠に摩天楼
 すつくりとしないがこで手を打とう
 姉さんのころろを開く介護の手
 撫でられて村に溶け込む道祖神
 震災のニュースばかりでまた泣いた
 美しい文字撫で書きで真似ている
 草餅の香りふあふあ手がのびる
 まな板が大事と撫でる料理人
 日本の空だと思ふ鯉轍り
 言い過ぎて丸い月まで尖らせる
 片付けてすつきり暮らすのは三日
 まだまだと心はいつも飛翔する
 連休はナスとトマトを植えただけ
 優先席ひとつ若いと譲り合う
 願かけて叶えと絵馬を撫でまわす
 しがらみの背なへほんやり月が出る
 声出せば落ちて来そうな赤い月
 仮眠する窓半月がのぞきこむ
 五年後にヤドローンに乗って夫婦旅
 穫りたてと届けてくれる友があり

美佐子 紀華 富夫 楓華 柳明 洋子 初音 健二 花門 よしひさ 靖鬼 雪菜 里江 奮水 りこ 比ろ志 歌留多 キヨミ ヨシエ 正和 耕治 かずお 晴美 和子 美籠 修平 純

み仏のご加護青葉と往く遍路
 悔いはなし鳴かず飛はずのわが人生
 順調に惚けてきました夫婦共
 ややこしい男バツサリ切っておく
 酔って候わが生まれ月春の宵
 ミサイルの飛び交う空は傷だらけ

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

真緑の風生温し夏手前
 カニ相手いつもチョコキ出す暇な僕
 飲めんけど食べて挽回してる下戸
 ホテルから留守の夫に食を問う
 せめての事旅の費用は被災地へ
 もう少し輝きたくて旅プラン
 農閑期夫婦は小さい旅をする
 今回も地酒探しの旅で終え
 まだ未練残していますふたり旅
 煩惱を脱ぎ捨てながら遍路旅
 今がある無駄でなかった途中下車
 アルバムで亡母との旅をなぞってる
 寝ころんで本で旅する雨上がり
 美女となら地獄めぐりも苦にならぬ
 野仏に笠さしかけている旅の空
 意地を捨て私が折れて相子です
 引き分けの日も梅地下で飲んでる
 右の頬たたかれ左ひっぱたく
 白黒をはつきりつけて右左
 相子では妻は許してくれませんが
 ちらちらと脚色された噂聞く

美也子 紀恵 祐康 ひとみ 哲夫 宏造 美代子 武人 茂 ちづる シルク 弥生 扶美代 久二雄 瑠美子 いさお 信二 フジ子 キーキー 光男 育代 絹子 一歩 まつお 婦美代 六点 喜代子

倉吉川柳会(鳥取)

竹信 影彦報

鯨坊主のらりくらりと説教する
 意地張ってるうちの鯨に髭が無い
 大地震なますのせいと信じたい
 韓ドラの大將なます髭生やし
 骨壺の中は無利子で無事無難
 借りる利子やつばり高い破産する
 利子生まぬ腑抜けにされた諭吉君
 楽してと怠け心に利子がつく
 食べ過ぎた後に葉の利子がつく
 利子なんかあてにしないと豪語する
 利子に利子積んでも足りぬ親の恩
 大笑いのあと空しさは倍になる
 大風呂敷広げた後の空しさよ
 寝て起きて飯食って寝てまた起きて
 むなしさは我が一票の消えたとき
 待ちぼうけはーと過した空しい日
 自信作全部ボツとは空しいな
 パブル後の企業戦士のうつろな目
 聖火台忘れられてたスタジアム
 未熟者脳にふっくら知恵入れる
 ふっくらと飛んでしまったゴム風船
 ふくよかな裸婦の絵にみる恥じらいが

稚枝 ヨシ枝 一文 紀雄 みつこ 紀美恵 節子 けいこ 日出子 石花菜 瑞子 重忠 玲子 美知江 醉美蓉 祐子 由紀子 風露 鬼一 萩江 龍枝 泰輔 茂夫 野蒜 恭子 雄大 智恵子

ふつくらもメタボも知らぬこの財布
ふつくらと浸かる足湯がたまらない
空しいなバタバタしても飛べないよ

川柳花の輪(大阪)

岡本

薫報

踏切りの影にひっそり花の束

昭好

歩行器のテンポで孫と春を行く

風

踏み切ったあの一言で今がある

やすの

大友はしや断機はさみ話にする

あや乃

突走る友にふみきり一つ要る

泰子

式次第時間間違えず事が済み

正太郎

職やめて暮しのテンポ崩れがち

敬子

おばちゃんの口に遮断機つけてくれ

薫

テンポ合う二人三脚五十年

みちる

踏み切りで欠伸している田舎道

勇太朗

胸たたきまかしとときは言うたけど

笑子

川柳さんだ(兵庫)

田中

童子報

突然の電話だったが良い知らせ

歳子

午前様帰ってみたら置き手紙

加代子

薄化粧突然ハグをされました

ヨシエ

金無いが結婚すると言う息子

健二

認知テストものは試しと受けさせ

修平

突然に始まる怖い痴呆症

淑子

下宿していいかと突然孫が来る

一子

お薬に嫌なおまけの副作用

光久

人生のおまけ大事に医者通い

耕治

アイドルと夢で逢いますトットちゃん

哲夫

腕に技災害時には散髪屋

美智子

アイドルがまだ生きている時代劇
踊る指合格メーブル嬉しがり
気がつけば尻馬に乗り踊ってた
万華鏡見ているような阿波踊り
週刊誌有名人の名は踊る

オリンピック招致疑惑が踊り出す
フナツシーとくまモン並ぶフラダンス
網の上踊るアワビを食べれるか
ブルドールの踊りを真似た足の裏
アイドルの踊りを真似た湿布薬
稀勢の里うかうかしたら綱とれぬ
平和ボケしてる日本に寄せる波
年金が減ったうかうかしてられん
人生の奈落の底へ捺した判
自分史に書かぬ不倫と株の損
そこそこを知らずあなたは突っ走る
知事懐疑公私混同絵画まで
騙されてやろうかこの人好きだから
起き上がり小法師わたしの理想型
目に青葉口にいかに天手には美酒
毛の抜ける頃が最後の反抗期
十年後それより今日は今日のこと

千津子

キヨミ

雄太郎

雅尚

隆

見

真由

富夫

勝正

章子

花門

好文

ひとみ

正和

宣彦

健彦

俊昭

雅司

順子

祐康

古い二人孫のパソコン門下生
時代遅れの哲学持つて生き延びる
恥をかかたばに学んだ生きる知恵
適塾がビジネス街のオアシスに
歴史とはわれらが学ぶ教科書だ
鐘の音が古都に響いたたたずまい
古書店の奥に主の顔の猫
古い地層から新しい発見
塩振ってみても時代おくれのまま
古い記憶とところどころにしみがある
幾度でも笑ってあげろ古い洒落
紫煙くゆらす時代遅れの男です
風みどり古いメガネは掛け替える
古書店の隅に読みたい文学書
押し見て引いて人生ハッケヨイ
老人の健康計る万歩計
負け犬が昔むかしの話好き
味方だと信じた影がついて来ぬ
水兵の凛々しい遺影セピア色
素朴やと大正の知恵褒めてくれ
元氣ならそれでよろしいしかなあ

恭昌

富子

集一

けんい

公平

捷也

すみ子

蕉子

義

希久子

和夫

真澄

楓楽

照子

志華子

善之

日の出

紀子

千歩

理恵

武彦

六甲川柳会(兵庫)

市坪

武臣報

微笑んで深い眠りについた母

踏ん張れる父母が歩んだ道だから

坂道を人が往き交う神戸ジャズ

赤い灯に虫も男も蠢いて

そのままにしておいてやる深い愛

ドトールに行けば会いたい亡夫が居る

いとおしや今年もうちにつばめの巢

千賀子

盛夫

弘

忠貞

利子

文香

診察券五枚で医者をハシゴする
深読みし身構えたのに肩透かし
血圧は虫の居所次第です
残せるか冥途の川の渡し賃
熊本の虫も支援が欲しかろう
災害に心届ける募金箱
回った駒もだんだん年をとり
亡くなって解る親から受けた愛
幸の橋を渡つて今日を知る
深い傷愛があふれる募金箱
吊橋を百面相で渡る妻
長生きの世渡り鶴と亀に聞く
消しゴムの滓ばかり出る五七五
深い色池の緑や海の青
深々と頭を下げて舌を出し
どの国で観ても素敵な青い空
申年の息子無病にと赤パンツ
綱渡り今日まで堪えた共白髪
世渡りもどうにか越えてケセラセラ
川柳が一つ出来そうな散歩道
抜け殻になって大地に還る虫
生きのびるかたちへ虫は擬態する
サングラス心の奥をのぞかせぬ
犯人にも美人にもなるサングラス
サングラスかけて婆ちゃん粋がつて
父の樹は深い根つ子を持っていた

大山滝句座(鳥取) 新家 完司報

取り囲む眼眼眼眼口事故現場

茂 浩司 博史 洋次郎 和宏 繁義 弘子 芳江 英子 正彦 和一 洋一 道子 邦子 保雄 順子 照子 敏夫 じろう 夏子 美恵子 和郎 美穂 能子 光久 無限

言いわけをしそいで上を向いている
和解してしまう挨拶してしまう
第三のビールも泡が立って来た
オフコース私が先に逝くつもり
連休が終わって毎日が無色
特売日二人で別のレジ並ぶ
ドーナツを食べたら穴が消えていた
海山に恵まれ店が無くなった
言うまでもなくアルコール依存症
釈明をすればするほど疑念増す
被災地は五七五には詠み込めぬ
くまモンの顔に泪はなじまぬ
何も無いけど取り柄もろ元氣だけ
恵まれた犬抱かれて散歩する
読むよりも聞いているほうが良い
先の見えぬ眼鏡をかけてすましてる
健康にいいとテレビが餌を誘く
安産で生まれたんだね女子さん
どこまでもウサギになれず亀で行く
ままならぬことは忘れて高いびき
忘れても開き直って生きている
被災地へ貧者の一灯届けます
楽しみを体力低下が邪魔をする
生きている限りは続く僕の愚痴
人生を何度も曲がる折り返し
安物の身体に安い服が合う

美ツ千 正人 熊四郎 寿代 芳山 楓花 照彦 紀の治 大鯨 雄大 規雄 由紀子 コスモス 風露 けいこ 麦青 石花菜 幹啓 幸子 昭子 道唱 鈴野 重忠 久子 完司

一掬の涙捧げる被害地に
サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報 房子

明日よりも今が大事になってきた
野心秘めたハイヒールです棚の隅
野心家はロールキャベツの中に居た
スパイスの一つ野心を持ち続け
野心のない人の表情覇気がない
飾るものない心が満ちている
実らなかつた野心心が日だまりで解く
行列から野心が一つ前へ出る
冷めた目の奥から湧いてくる野心
ITの森で野心の牙を研ぐ
夢をかなえたあとにくじりが始まる
バラ色を目指してモノクロの野心
野心満々まだまだ仏にはなれぬ

川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報

神よ許し給え嘘をつきました
人生迷路神に丸投げする手口
からみ糸出口見つけた肩こった
犬にまで頭下げて朝帰り
強敵に向かう弱者の命懸け
人生の谷間でちよっと小休止
極楽が見えるところにある出口
あちこちに出口があつて金縛り
意地張つて古女房は謝らぬ
泥棒も逃げる出口は忘れぬ
登校の列を遊ばす水たまり
言い訳が追い越してゆく五月晴れ
歩かねばまだ歩かねば枯れていく
ほつとして出口ひんやり鍾乳洞
まだまだ出口見えない被災地のくらし

いわゑ 義子 昌紀 久二雄 光久 たもつ 美智代 扶美代 千代 蕉子 智恵子 希久子 楓楽 恵子報 亜成 遠野 美江 あさ子 壽峰 高鷲 仁 秀雄 さち子 高志 弘委智 柳弘 郁夫 賢子

休憩をしない老女の食事会
くまモンに託す支援の底力
機械化で休憩時間なぜ増えぬ
口喧嘩負けるが勝ちとホコ納め
方程式を解くと迷いがひとつつ消え
ごめんねが素直に言えた嬉しい日
なんどかは捨て身の思いしたノルマ
写経して人生の出口模索する
休憩時間無駄にしないで書く手紙
核汚染非常口などない地球
断捨離も腰痛起す程々に
葉の裏に羽根を休めて待つ出番
人間の捨て身の覚悟恐ろしい
店ぐるみ捨て身の覚悟赤字消し
一合の酒が人生語り出す
ノリシロを使い果たしている捨て身

岸和田川柳会(大阪)

佐藤 幸子 報

かすみ 一 鈍 薫 弘 朝 麗 修 朝 子 一 子 洋 尚 世 寿 昭 祥 昭 忠 央 博 泉 恵 子 一 昭 和 美 喜 代 志 カズ子 香 代 幸 子 粧 子 信 二 笑 司 丹 吉

親友の彼と密かに逢っている
広島は平和の鐘がよく似合う
横綱に変化相撲は似合わない
方向を定め一気に巻を喰う
生きているモラルに違反せず真面目
へそくりを引き出しておくバナマから
捨てられたモラルが呻くゴミ置場
身の丈に似合う暮しで恙無く
あまりにも縁起をかつき疲れ果て
送り火の熾は密かに今も抱き
初摘みの娘に似合う紅タスキ
小細工はせず人の道説いている
隠し味ほどの秘密は持っています

隆 珠 大 忠 弘 英 大 忠 隆 珠
子 輔 太 昭 子
久 夫 子
ひろ 子
益 男
み つ 江
洋 二
義 泰
律 雄

竹原川柳会創立 60 周年記念川柳大会

日 時 9月4日(日) 午前9時30分
会 場 ホテル 大広苑 (0846-22-2970)
広島県竹原市上新開 3591-1
(JR 呉線 竹原駅下車 徒歩 15分)

事前投句の部 (欠席投句可・出席の有無をお知らせください)

課題と選者 (各題2句)
「深い」 弘兼 秀子 選
「宇宙」 弘津秋の子 選
「窓」 森中恵美子 選

投句締切 7月31日(日) 当日消印有効
投 句 料 1,000円(定額小為替)作品発表誌呈
投句様式 専用紙または適宜用紙に3題6句連記
投句先 〒725-0022 竹原市本町1丁目14-3
小島 蘭幸 宛

当日の部 (欠席投句拝辞)
課題と選者 (各題2句)
「火」 北川 拓治 選
「美」 芳賀 博子 選
「音楽」 赤松ますみ 選
「未完」 新家 完司 選

当日会費 2,000円(昼食・作品発表誌呈)
出句締切 11時30分・席題なし
宿泊希望者は7月31日までにご連絡ください
*竹原駅から車で15分・温泉もあります
連絡先 〒725-0022 竹原市本町1丁目14-3
TEL/FAX 0846-22-6626
主 催 竹原川柳会

第二回「ふるさと」川柳募集案内

課題「雪」(一口2句・12名共選・複数応募可・清記選)
選者 伊藤寿子・渡辺松風・加藤ゆみ子
岡本 聡・興津幸代・米山明日歌
中山恵子・吉崎柳歩・赤松ますみ
石橋芳山・梅崎流青・浅利一郎
締切 7月31日(消印有効)
投句料 1,000円(切手不可・小為替等使用のこと)
賞 最優秀賞一点(樺細工色紙掛・仙北 市産品)他
発表 柳誌「湖」(10月発行予定・応募者全員に送付)
主催 川柳「湖」(うみ)
問合せ 浅利玄一郎川柳事務所 TEL/FAX 0187-48-2236
投句先 〒014-0662
秋田県仙北市ひのきない字長戸呂 85
浅利方 第三回「ふるさと」川柳事務局 宛

句会名	日時と題	会場と投句先
ほたる川柳同好会	12日(火) 13時30分締切 万・迷う・やがて	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール 螢池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
岸和田川柳会	16日(土) 12時30分開場 約束・流行る・むつつり・エコ	岸和田市立福祉総合センター 南海電車岸和田駅より徒歩5分 〒596-0067 岸和田市南町9-17-818 藤井康信
川柳塔みちのく	16日(土) 17時締切 喜ぶ・きりきり・ガイドブック	弘前市松森町73「レストラン・セーブル」TEL0172-36-6614 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL0172-36-8605
川柳ねやがわ	17日(日) 13時締切 力士・ふんわり・いじめ 自由吟	産業会館 3F 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 宛 川柳ねやがわ
川柳藤井寺	17日(日) 14時締切 欠片・それぞれ・席題共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺さくら町2-2-201 高田美代子
豊中もくせい川柳会	18日(月) 13時45分締切 波紋・届く・しばらく・自由吟	豊中市中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川柳さんだ	19日(火) 13時30分締切 大根・ポイント・配る くねくね・自由吟	三輪会館・三輪神社内 TEL079-564-4538 JR「三田」駅北5分 〒669-1545 三田市扶間が丘5-10-19 谷 祐康
川柳たちばな	20日(水) 14時締切 印象吟・川(互選)	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7) 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
川柳塔すみよし	23日(土) 14時15分締切 機嫌・囲む・軽い	住吉区民センター 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
和歌山幸会 三川柳会	23日(土) 12時30分開場 トップ・待つ・乱	和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの市川柳会	24日(日) 14時締切 泥・一発・ノック	陵南の森公民館 近鉄「高鷲」駅北東 徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川柳ふうもん社	24日(日) 13時30分開場 図星・ドッカーン・樺ましい	開発ビル 2F ホール 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南大阪川柳会	25日(月) 18時開場 尊い・爆発・寄りそう・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都塔の会	25日(月) 14時締切 サークル・すれすれ・煮	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勤修寺堂田70-16 榎本宏子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

7 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
城北 川柳会	2日(土) 14時締切 覗く・出番・こつこつ・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線 千林大宮駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
富柳会	2日(土) 14時締切 望・ぱっちり・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 川柳とんだばやし富柳会 池 森子
倉吉 川柳会	2日(土) 14時締切 やりくり・ガタガタ・割り切る	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 つえ社 ま吟	2日(土) 13時30分締切 染める・託す・先輩・小さい	松江市雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保岡町笠浦222-1 相見柳歩
川柳塔 なら	7日(木) 14時締切 シャワー・心配・耐	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄奈良駅④番出口徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787 松本方 安土理恵
あかつき 川柳会	8日(金) 14時締切 欲しがらる・皺・安全・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川柳塔 さかい	8日(金) 13時開場 海・騙す・なつめ(折句)	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
川柳大阪	9日(土) 14時締切 欲・デビュー・早い	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
川柳塔 打吹	9日(土) 14時締切 風・落とす・ちゃっかり	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川柳会	10日(日) 14時締切 傀儡・うっかり・除く・雑詠	八尾市渋川町 安中町集会所 1F JR八尾駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川柳塔 わかやま 吟社	10日(日) 14時10分締切 兼題 = 説明・返品・売り切れ 課題吟 = 石鹸・洗剤	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼題 〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 栗原道夫
西宮北口 川柳会	11日(月) 14時締切 度胸・吸う・総掛り・自由吟	西宮市立中央公民館 6F 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
川柳 あまがさき	12日(火) 14時締切 好き・赤・どンドン・自由吟	尼崎市女性センター・トレビエ 阪急「武庫之荘」駅南へ200m 〒661-0033 尼崎市南武庫之荘5-20-14 加川靖鬼

柳界展望

★第6回高田寄生木賞

大賞 こうだ ひでお

スリッパが全部こつちを向いている

秀逸 大久保眞澄

総活躍代理に猫を差し出そう

秀逸 居谷真理子

生きるとは汚れることよ流し難

秀逸 谷口 義

大竹しのぶがその気になっっている

秀逸 石橋 芳山

ライオンの姿を保たねばならぬ

★「ひらた川柳会40年川柳大会」。同人成績。

秀 1 石橋 芳山

忠誠心比べて敵は本能寺

秀 1 藤井 寿代

キューボラの街にあげたいノーベル賞

秀 1 伊藤 玲子

どっこいしょ呪文かけるとまだ動く

秀 2 竹村紀の治

後からの人が食べてるボクの蕎麦

秀 2 石橋 芳山

女から女優に変わるカメラ前

秀 2 斉尾くにこ

スマホにはGPSが付いている

▽柳界動向△

○「さんだ川柳会」新役は、5月から会長に谷祐康。副会長に上田ひとみ。田中章子。福田好文

を選出。前会長堀正和氏は三田市川柳協会会長に就任。

○須郷井蛙さん(同人・青森)は、2月3日付東奥日報朝刊に「男子誕生

の木彫り像―孫の代まで見守り」と紹介された。

○松山芳生さん(同人・青森)は、4月1日付東奥日報夕刊に「川柳で明るく生きる」と紹介された。

○上方芸能200号(終刊号)さようなら「上方芸能」

―みんなの思いをこの一冊に―には49人からのメッセージが寄せられた。

川柳塔からは西出楓楽・木本朱夏・乗原道夫の諸氏が寄稿した。

新同人紹介

中川 ひろ介

―みつこ・いさお推薦

萩原 狸月

―光久・楓楽推薦

子。P 88「川柳塔鑑賞」紹介者 北野 哲男

上段3行目、晩学の亡母 三田市 稲角 優子

と同じ咳が出る↓晩年の 紹介者 北野 哲男

亡母と同じ咳が出る 三田市 幸田 厚子

▽新誌友紹介△ 紹介者 北野 哲男

三原市 笹重 耕三 常任理事会 6月6日(月)

紹介者 小島 蘭幸 ①二賞選考とその他の選

奈良市 宇賀 史郎 ②川柳塔誌発送方法につ

紹介者 安土 理恵 いて③大阪川柳大会、選

奈良市 長谷川 崇明 者その他の確認者につ

紹介者 安土 理恵 て④塔定例確事項⑤各部

三田市 馬場喜美江 報告事項。

紹介者 北野 哲男 次回 7月6日(水)AM10時

三田市 生田えい子

▽お詫びして訂正△

▼6月号 P 43 「第47回

奈良新聞川柳大会」、9

行目、大橋・紀子↓大橋・紀

番傘川柳本社 8月句会
(52回水府忌)

日時 8月6日(土)
13時30分開場
会場 サンケイカンファレス大阪梅田
(新サンケイビル)
TEL 06-6344-4888
会費 1,000円
お話し 「上方芸能」以前以後
木津川 計 氏
席題有り 当日発表
宿題 各題2句 締切 14時30分
「石」 中村 牛延 選
「はらはら」 大楠 紀子 選
「妻」 油谷 克己 選
「やっぱり」 河内 月子 選
「握る」 田中 新一 選

第63回 八尾市民川柳大会

とき 8月28日(日) 正午開場
ところ 八尾文化会館・ブリズムホール
5Fレセプションホール
近鉄八尾駅下車 徒歩5分
西武デパート東隣
会費 2,000円(作品集・鉢植え花)
宿題 各題2句 締切 午後1時
「真」 伊澤 壽峰 選
「菌」 坂本 高士 選
「無」 天根 夢草 選
「手」 新家 完司 選
「左」 村上 氷筆 選
「火」 森中恵美子 選
「愛」 土屋 耀一 選
問い合わせ 土田 欣之
(TEL 072-992-4934)
主催 八尾市民川柳会

第17回 四万十川川柳全国大会

日時 8月27日(土) 午後1時~4時
会場 幡多信用金庫 本店会議室
募集要項
投句「雑詠」 小島 蘭幸 選
2句一組1000円、何組でも可、
未発表に限る
表彰 特別賞10句(大会賞、四万十市長賞)
秀作10句、佳作20句
賞品 賞状及び記念品
投句及び問い合わせ先
〒787-0021 高知県四万十市中村京町1-17
幡多信用金庫 川柳係 TEL 0880-34-2121
主催 幡多信用金庫
後援 四万十教育委員会、四万十観光
協会、中村若鮎川柳会など

第34回 夜市川柳大会

とき 平成28年8月7日(日)
開場 10時30分 出句締切 12時30分
セレモニー 1時(表彰・記念写真など)
抜講 2時~4時30分
句会終了 4時30分(予定)
ところ 堺市総合福祉会館5F 大研修室
会費 2000円(軽食・お茶・記念品)
事前投句「星」 堺 河内 天笑 宛
締め切り 7月25日 ハガキに2句
堺市西区堀上緑町2-16-3 河内 天笑 宛
課題と選者(各題2句) 欠席投句拝辞
「火」 吹田 山本希久子 選
「顔」 岬 米澤 倭子 選
「先生」 紀の川 山東日出男 選
「弾む」 海南 三宅 保州 選
「大」 鳥取 新家 完司 選
「しびれる」 和歌山 古久保和子 選
「光」 和歌山 武本 碧 選
「浮く」 藤井寺 太田扶美代 選
「まる」 河内長野 山岡富美子 選
選者ご招待懇親宴は5時より堺駅前「楓林閣」

暑中お見舞い申し上げます

西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日 午後1時 西宮市立中央公民館

(阪急電鉄神戸線西宮北口下車 南出口徒歩3分)

プレラにしのみや6F

投句先 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫

河亀片加奥大大長緒江梅上上井市石足浅秋奥西
合岡山川澤矢坪川方谷澤田垣上坪原立野元田口

敏哲 靖洋 一哲美勝盛ひキじ武歳 房てみい
次 津 弘夫みミう臣子茂子る子ゑ
夫子忠鬼郎伸徳夫子弘夫みミう臣子茂子る子ゑ

難七長中富富都寺寺田竹白酒酒小黒蔵久北北北
反 波田浜西山永倉柚井中山山川田井林田田野島川

伯順美豊ル恭求富秋章千淑浩紀わ能光千哲邦美
備子籠子子子芽次果子子子司華こ子子代男男香

両山山山山山山丸松松牧堀古藤藤藤藤福春能野
川本 田田田崎口山下井 川原本岡井島城勢口

無義婦昭耕武光一比文富正奮み り宏弘年利晶
限子子朗治彦久之志香子和水し直こ造子代子子

暑中御見舞申し上げます

川柳塔すみよし10周年記念川柳大会

会長 鶴田遠野

と き 平成29年6月18日(日)
開 場 12時 開 会 17時
と ころ ホテル・アウリーナ大阪 3F 葛城の間
おはなし 「川柳こぼれ話」
(NHK ほやき川柳 選者) 大 西 泰 世 氏
兼 題 「期 待」 長 島 敏 子 選
「続 く」 川 上 大 輪 選
「 神 」 西 出 楓 楽 選
謝 選 「チャンス」 鶴 田 遠 野 選
事前投句 「住 む」 5月20日必着 小 島 蘭 幸 選

- * 各題2句・欠席投句拝辞(各題の「天」位に賞呈)
- * 出句締切 13時30分
- * 開 会 14時
- * お 話 14時10分
- * 披 講 15時
- * 会 費 1,500円 記念品 呈
- * ご芳志はご辞退させていただきます

〈懇親宴〉

- * 同会場にて5時半～7時半(3F 葛城の間)
- * 会 費 7,000円 先着申し込み50名様

暑中お見舞い申し上げます

竹原川柳会

会長

小島蘭幸

会計

岩本笑子

石原淑子

六田半徳

土井輝恵

若年幸子

ほか会員一同

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔さかい

会長 河内天笑

若本安代	山根妙子	山岡富美子	村上玄也	宮本かりん	増井ヨシ枝	日野愿	中林佳子	内藤憲彦	玉瀬富夫	津田シルク	谷川憲	高木世紀子	柴本ばっは	齋藤さくら	小林若芽	源田八千代	柿花和夫	太田扶美代	榎本舞夢	梅木澄空	石田ひろ子
米澤俣子	山本半錢	矢倉五月	向井清好	升成	伏見雅明	原野清晋	中野健吾	徳山みつこ	遠山唯教	田部和幸	田中ゆみ子	島田誠一	澤井敏治	小山永久	古手川光	河内月子	奥時雄	太田としお	榎本日の出	出海素頼馬	

暑中お見舞い申し上げます

川柳ふうもん吟社

会長 両川洋々

会員一同

事務局：〒689-0202 鳥取市美萩野2丁目171-3

中村金祥

TEL 0857-59-1056

月例会：毎月第4日曜日 13:00～

会場：砂場隆浩事務所（鳥取市片原1丁目107）

暑中お見舞い申し上げます

大山滝句座

大山滝句座は「会」という組織ではなく、句会当日に参加した人が座を構成するだけのシンプルな句座です。これは、組織が陥りやすい権威的なものを排除し自由と平等を目指した結果です。このような脆弱な形でどれだけ続くか危惧しましたが、今年で17年目になりました。鳥取へお出でのときはご遠慮なくお立ち寄りください。

世話人代表 新家完司

暑中お見舞い申し上げます

川 柳 大 阪

会 長 山 崎 珠 生

手 崎 川 童	滝 沢 美 濃	高 木 信 醉	鈴 木 い さ お	阪 井 美 世 子	小 林 わ こ	古 今 堂 蕉 子	北 村 賢 子	川 端 一 歩	河 田 富 美 子	奥 村 五 月	大 野 照 月	大 内 朝 子	江 島 谷 勝 弘	宇 都 満 知 子	上 山 堅 坊	今 井 万 紗 子	磯 島 福 貴 子	浅 田 河 南 子
和 田 和	芳 鉄 心	山 本 昌 代	山 田 か よ こ	矢 倉 五 月	門 野 隆 司	森 村 美 花	森 松 芳 香	森 松 ま つ お	宮 西 弥 生	前 田 紀 雄	堀 田 温 子	坊 濃 柳 弘	東 川 世 志 子	長 谷 川 司	中 村 喜 楽	中 原 比 呂 志	長 浜 美 籠	中 園 功

暑中お見舞い申し上げます

富 柳 会

前 田 登 子	林 澄 子	藤 田 武 人	栃 尾 奏 子	中 村 恵	関 よ し み	肥 山 一 文	山 野 寿 之	中 崎 深 雪	中 井 ア キ	池 森 子
他 一 同	都 筑 文 重	福 元 田 鶴 子	岸 本 慶 子	松 本 正 治	沢 田 和 子	田 嶋 伸 雄	井 澤 壽 峰	久 世 高 鷺	石 橋 未 知	河 野 彦 次

暑中お見舞い申し上げます

翠 洋 会

浅井 公平	高杉 千歩
安土 理恵	高橋 敬子
安福 和夫	谷口 義
阿部 紀子	辻内 げんえい
井上 照子	津村 志華子
岩本 浩二	寺井 弘子
榎本 日の出	西出 楓楽
榎本 舞夢	能勢 良子
大川 桃花	原田 すみ子
大久保 眞澄	藤井 正雄
太田 昭	前川 善之
奥田 みつ子	山本 希久子
古今堂 蕉子	横山 捷也
小谷 集一	米田 恭昌
佐々木 満作	渡辺 富子

「昭和の川柳百人一句集」は語る

'28 柳都全国川柳大会のご案内

― 後援：一般社団法人全日本川柳協会／読売新聞東京本社 ―

○朝日／平成28年7月3日（日） 10時

○会場／新潟市中央区下大川前通り新潟グランドホテル

○会費／3000円（昼食・参加記念品）

― 宿題 ― 各題2句

遠い 岩手 吉田 成一 選

巢 大阪 大西 泰世 選

味 東京 尾藤 一泉 選

ずばり 仙台 雫石 隆子 選

おいしい 広島 小島 蘭幸 選

― 特別宿題 ― 2句

雑詠 主幹 大野 風柳 選

※特別宿題「雑詠」は事前投句とします。6月10日まではがきで956-8691 新潟局私書箱15号 柳都川柳社宛にお送りください。大会の参加と懇親会（60000円）の出欠もご記入ください。

昭和の川柳百人一句集は語る

今年の指定席は昭和56年2月に刊行された「現代川柳百人一句集」です。百人のひとりである墨作二郎氏が山陽新聞（岡山）の川柳選者である芳賀博子さんにプレゼントされ、山陽新聞に大きく掲載されたことから始まります。この百人一句集は大野風柳主幹と北都印刷とで企画出版され、北都では小野守通氏が担当されました。※宿泊希望の方は2日か3日を指定でお申込みください。早目をお願いいたします。

暑中お見舞い申しあげます 川柳塔みちのく

主幹 福士 慕情

川柳塔みちのく創始者であり川柳塔社副主幹・相談役の重責にあった波多野五楽庵の句碑を、勝岳院（波多野家菩提寺／弘前市西茂森）に建立の運びとなりました。

ご賛同の方の寄付を募っております。下記へ送金されるか、振込み下さるようお願い申し上げます。

036-8275 弘前市城西1-9-5 福士 慕情 宛
郵便振替口座番号および名義

02300-7-36673 川柳塔みちのく

募金締切日／平成28年8月31日

募金額／一口 2,000円

暑中お見舞い申し上げます

城北川柳会

藤	平	綱	永	小	江	近	伊
原	嶋	島	井	林	島	藤	達
千	美	榮	縣	杵	勝		郁
恵	智	子	笹	香	弘	正	夫
子	子						

暑中お見舞い申し上げます

河内長野川柳協会

顧問 板尾 岳人

長柳会・プラザ川柳

藤	大	辻	松	谷	梶	石	木	山	黒	坂	村	山	会 員 有 志
塚	島	村	岡		原	田	見 谷	室	岩	上	上	岡	
克	と	ヒ		久	弘	隆	孝	光	靖	淳	直	富	
三	も	コ	篤	美 子	光	彦	代	弘	博	司	樹	美 子	

暑中お見舞申し上げます

豊中もくせい川柳会

会員一同

暑中お見舞い申し上げます

川柳あまがさき

会長 長浜美籠

例会 毎月第二火曜日
場所 尼崎女性センター・テレビエ

足立つな子	渡辺柳明	山口ヨシエ	宮崎咲貴	前川千津子	古川奮水	藤井宏造	永田紀恵	都倉求芽	谷祐康	坂本晴美	九鬼洋子	北川純	片山かずお	岡部美浪	大岸和子	江見清	上垣キヨミ	石川きよみ
長川哲夫	内田美也子	市坪武臣	新井つね湖	山本幸香	溝端利夫	松村里江	堀正和	藤田雪菜	鶴田遠野	酒井紀華	小山紀乃	北野哲男	川端篤子	奥村五月	扇野よしひさ	大浦初音	上田ひとみ	入江修平
小山聖也	細川花門	森松芳香	森松まつお	山田耕治	三好京江	松下比ろ志	藤岡りこ	平井富夫	野口晶子	中井楓花	玉村幸子	竹林千代子	酒井健二	木山歌留多	河津正治	加川靖鬼		

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔まつえ吟社

主幹 石橋芳山

同人一同

連絡先 〒690-0001 松江市東朝日町206-7
石橋芳山方
TEL. 090-2003-5846

暑中御見舞

申し上げます

川柳塔唐津

岩崎 實
坂本 蜂 朗
仁部 四 郎
山口 高 明
吉富 節 子

暑中お見舞申し上げます

川柳塔きやらぼく

会 員 一 同

事務局 〒683-0804 米子市米原5-1-3-304 竹村紀の治
TEL 0859-21-7656

暑中お見舞

申し上げます

川柳茶ばしら

早川 遯 行
板山 まみ子
金子 美千代
脇田 雅 美
関本 かつ子

暑中お見舞申し上げます

岸和田川柳会

飯宮藤仲中次助佐小岸瓦石松藤雪増岩	田野井谷岡井川藤島井谷田崎原本田佐	忠み康弘香義和幸笑ふさ正ひろ大珠隆ダン	太江信子代泰美子司ゑ幸子輔昭子昭吉
三向松不西中長中出堤立高新久柿井井	宅井浦破田原浜里原誠檜信律信益和益一	保英仁喜代宏美はこべ夫代子雄二祥夫男	州清夫緑志之籠

暑中お見舞申し上げます

鳥取県川柳作家協会

会長 森山盛桜

〒689-0423 鳥取市鹿野町中園180

TEL.0857-82-1491

暑中お見舞申し上げます

川柳塔鹿野みか月

会長 森山盛桜

会員 一同

暑中お見舞申し上げます

いずも川柳会

会長 竹治 ちかし
会員 一同

事務局 〒693-0026 出雲市塩治原町3-1-5 竹治ちかし 方
TEL 0853-22-4309

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔なら

顧問	会計監査	〃	〃	〃	〃	〃	〃	世話人	会計	副会長	副会長	会長
中原比呂志	江島谷勝弘	渡辺富子	森中博一	長谷川崇明	仲堀優	仲西賛郎	高畑おたか	大久保眞澄	飛永ふりこ	宇賀史郎	安福和夫	安土理恵

暑中お見舞い申し上げます

はびきの市民川柳会

会長 徳山みつこ 会員一同

暑中御見舞い申します

川柳藤井寺
川柳みささぎ
会員一同

代表 高田美代子

あかつき川柳会

(鶴彬をはじめ先覚川柳人の反戦平和と社会風刺の精神を現代に生かす) (会則)

◆毎月②(金) 13時開場
◆(助)大阪保育運動センター
◆「あかつき」(月刊300円)
〈会報〉

〈旬会〉

宮崎シマ子 塩満敏 山本昌代 森村美花 松本千鶴子 前田紀雄 西川ひろし 中里はこべ 鈴木木谷和雄 杉谷一雄 塩田美世子 阪井勝久 加山勝弘 江島勝甲 荒川鈍吉 岩佐ダン 近藤正歩

暑中お見舞い申し上げます

サークル 檸檬

吉村久仁雄 山本義子 山本希久子 山本加お里 山口光久 松尾美智代 前田たもつ 西村哲夫 西村楓楽 西出口いわゑ 長浜美籠 古今堂蕉子 久保田千代 片岡智恵子 奥田みつ子 太田扶美代 井丸昌紀 浅野房子

暑中お見舞い申し上げます

川柳さんだ

会員一同

例会：毎月第3火曜日 13時・JR三田駅前 キッピーモール6F

場	勉	句	水	岡	貝	荒	松	宮	中	寺	藤	小	水
所	強	会	森	田	塚	木	尾	田	山	井	原	牧	野
	会		美	守	正	郁	美		春	柳	桂	信	黒
	豊	第	佐	啓	子	子	智	輝	代	童	子	男	兔
	中	四	子				代						
	市	火	齋	上	上	樋	池	多	米	田	栗	高	藤
	蛸	曜	藤	山	田	口	田	田	原	中	田	嶋	沢
	池	日	奈	堅	陽	順	純	契	雪	螢	久	長	一
	公	午	津	坊	子	子	子	子	子	柳	子	勝	
	民	後	子										
	館	一											
		時											
		より											

ほたる川柳同好会

暑中お見舞い申し上げます

暑中お見舞申し上げます

南大阪川柳会

会員一同

住まいの情報センター（地下鉄谷町線・堺筋線 天神橋6丁目駅③出口）
原則として第4月曜日・6時から（8時終了）

暑中お見舞い申し上げます

大阪川柳人クラブ

会 員 一 同

会 長 磯野いさむ

副会長 板尾 岳人

板野 美子

幹事長 竹森 雀舎

会 計 中川 隆充

事務局 伊達 郁夫

大 阪 川 柳 の 会

事務局 〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706 本田智彦 方
TEL 06 (6303) 7297

代 表

磯野いさむ

世 話 人

足立 淑子

井上かれん

池田 武彦

碓氷 祥昭

大堀 正明

竹森 雀舎

伊達 郁夫

内藤 光枝

藤井満洲夫

本田 智彦

森口 美羽

安井 英華

◎会場 駅前第二ビル5階(大阪市北区梅田1-2-2-500) ※開場 午後1時

暑中お見舞申し上げます

岩 美 川 柳 会

会 員 一 同

〒681-0074 鳥取県岩美郡岩美町網代118-155
TEL 0857-72-0762

山 下 蟹 郎

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔わかやま吟社

同人一同

事務局 〒640-8482 和歌山市六十谷1188-14

川上大輪方

電話・FAX 073-462-7229

暑中お見舞申し上げます

京都塔の会

会員一同

暑中御見舞

申し上げます

六甲川柳会

メダカの学校

世話人

山	竹	輿	梅	井
崎	山	水	澤	上
武	千		盛	忠
彦	賀	弘	夫	貞
	子			

暑中お見舞申し上げます

川 柳 塔 社

名譽主幹
主 幹
理 事 長
副 主 幹
副 理 事 長
副 理 事 長
常 任 理 事

河 内 天 笑
小 島 蘭 幸
新 家 完 司
川 上 大 輪
木 本 朱 夏
鶴 田 遠 野
足 立 茂
居 谷 真 理 子
片 山 か ず お
古 今 堂 蕉 子
佐 々 木 満 作
鈴 木 い さ お
藤 井 宏 造
松 原 寿 子
森 松 ま つ お

江 島 谷 勝 弘
柿 花 和 夫
久 保 田 千 代
坂 田 裕 之
島 田 誠 一
長 井 善 純
坊 農 柳 弘
水 野 黒 兔
山 崎 武 彦

川柳塔社常任理事会

編集後記

★路郎の忌 句を奉り香華とす 薫風

★路郎没後51年。目次下を清博美先生にお願いした。また十日町川柳研究会代表・松田ていこさんのご厚意により、高知在住・古谷恭一氏の「麻生路郎覚書」を転載させて頂いた。お陰さまで路郎を偲ぶよすがを得られたことを嬉しく思う。

★そこには私たちの目に触れない被災者の辛い現実がある。犠牲者に哀悼の意を捧げながらも立ち尽くすしかない不甲斐ない我が身を顧みる日々。どうかお身体を大切に祈らずにはいられない。

★6月号の目次下をお読み下さったでしょうか。山本希久子さんが川柳塔のおじいちゃんと慕われた黒川紫香先生の想い出をお寄せくださった。紫香先生のやわらかい掌の春の日溜まりのような暖かさを今も覚えていて。

★空前の猫ブームだ。「ネコノミクス」とかで経済効果は2兆円！遂に飼い猫と飼い主のための料理教室が出来た。同じ食材で猫と飼い主の料理をつくる。「魚貝のスープ」「マグルのカルパッチョーしらす添え」等々・・・。

★熊本在住の田口麦彦先生が5月2日付「熊本日日新聞」をお送りくださった。一面には「南阿蘇村立てないのだから」という

★猫と共に棲居ること半世紀の私が敢えて言う。やり過ぎだ。猫だっていう迷惑ナイフもフォークも持てないのだから。という

野地区―消滅の危機」の

見出しが躍る。「生活関連情報」のページには、災害ゴミや給水、医療、銭湯・浴場、支援、学校再開の身

てないのだから。という

山聖九段。五歳で腎臓の

ひとこと

「菖さす紫野行き標野行き 野守は見ずや君が袖振る」

昔々のこと、高校の国語の授業で五七五の句を作る課題があった。その時作った句が、先生に絶賛された。そして調子に乗った。

俄文学部を作り、自意識過剰な級友達と、詩や句を小冊子にまとめた。その時のペンネームが「紫標野」だ。もちろん、冒頭の額田王の歌にあやかり、モテモテ女子

になりたいたいおもったからだ。

それから20年後川柳を始めにあり、この愛着のある名前を引っ張り出すことにした。しかし「標野」を読んでもらえない。そこで平仮名に変えてみたが、相変わらずモテモテには程遠い。

今では、わたしの周りの天智、天武の眼は節穴だと思うことになっている。古来、女は強い生き物だ。そうだ、命短し恋せよ乙女だ。強く生きていこう。(紫しめの)

のは冗談としても、地球上には餓えている人々も多い。猫には猫の分際がある。猫と知るべし。

チェスでは世界チャンピオンに勝利、チェスより複雑とされている将棋でもプロを負かしている。

難病ネフラージ、関連する疾病、二七歳で膀胱がん、病魔に魅入られた一生で、A級に在籍したまま二九歳で他界した。羽生善治名人の一歳年長。公式記録は村山の六勝七敗でほぼ互角、天才の呼び名は誇張ではない。その生涯が松山ケンイチさん主演で「聖の青春」という映画になる。将棋ファンとして心待ちにしている。(まつお)

★お知らせが遅れました。三好専平さんの「民族の詩歌」は五月号をもって終了しました。ご愛読ありがとうございました。

○アルファ碁に導入されたのは深層学習。人間の神経回路を模した手法で人工知能自身が学習し、判断能力を高める。まるで映画の「ターミネーター」である。まさか殺人ロボットを創りだすとは思えないが・・・

○天才と言えば将棋の村山聖九段。五歳で腎臓の

○囲碁ソフト「アルファ碁」が世界トップ級プロ棋士との対戦で4勝1敗と勝ち越し、衝撃が広がっている。人工知能は既に

○天才と言えば将棋の村山聖九段。五歳で腎臓の

○天才と言えば将棋の村山聖九段。五歳で腎臓の

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(9月号)」

地名

市都
道府 道
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

檸檬抄投句用紙

「前触れ」(7月15日締切)

9月号発表

安土 理恵 選 — 共選 — 北野 哲男 選

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

川柳塔 (8句) 小島蘭幸選
 水煙抄 (8句) 西出楓楽選
 愛染帖 (2句) 新家完司選
 檸檬抄「前触れ」(2句) 北野哲男共選
 (安土理恵選)
 インスペクションナヒ(2句) 大西泰世選
 集「受ける」 川本真理子選
 一路集 (2句) 「トライ」 福田好文選
 初歩教室 「色」(3句) 山口光久担当

9月号発表 (7月15日締切)

10月号
 檸檬抄「疑う」
 一路集「もてなす」「ひとこと」
 初歩教室「手本」

路郎忌本社7月句会

とき 7月6日(水) 13時開場・13時40分締切
 ー開場時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。
 ところ アウイーナ大阪 4階 金剛の間
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
 おはなし「川柳に表れた面白い物」 新家完司
 兼題「迫る」 安土理恵選
 「愚か」 長浜遠野選
 「スイッチ」 鶴田正明選
 「いよいよ」 大堀蘭幸選
 「空そら」 小島蘭幸選
 会費 1000円
 投句料 500円(切手可)
 (各題2句以内)

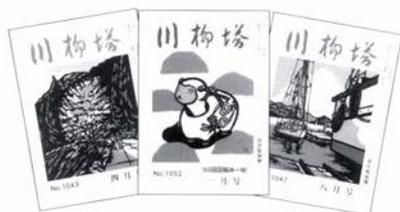
本社8月句会
 5日(金) 午後1時から
 兼題「選ぶ」「くるり」「記」
 「スタート」「外国」

第35年度 夜市川柳募集

第2回「削る」 鈴木公弘選
 ハガキに3句 7月20日締切
 投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 川柳塔さかい

川柳・俳句・エッセイ・小説 新聞・広告・ポスター・伝票等

あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9-4
 TEL (06) 6372-1178
 FAX (06) 6372-1196
 E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

定価 八百円 (送料94円)
 半年分 五千円 (送料共)
 一年分 九千八百円 (同)
 二〇一六年(平成二十八年)七月一日発行
 発行人 小島和幸
 編集人 木本朱夏
 印刷所 美研アート
 〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一四一七
 花野ビル201号室
 発行所 川柳塔社
 電話 (06) 6779-1349 番
 振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

川柳塔のホームページアドレス

<http://www.senryutou.com/>

オニザキのプレミアムロースト

つばなごま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、
香ばしい薫り。舌と記憶に
しつかりと残る、深いコク。

料理をより美味しくする

ゴマを作りたい、真つすぐな

想いから生まれた逸品。

それが「プレミアムロースト」。

素材本来の良さを余すこと

無く引き出した、オニザキの

自信作をお届けします。



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>